元総社蒼海遺跡群(137)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 2 0. 3

前橋市教育委員会

元総社蒼海遺跡群(137)

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 2 0. 3

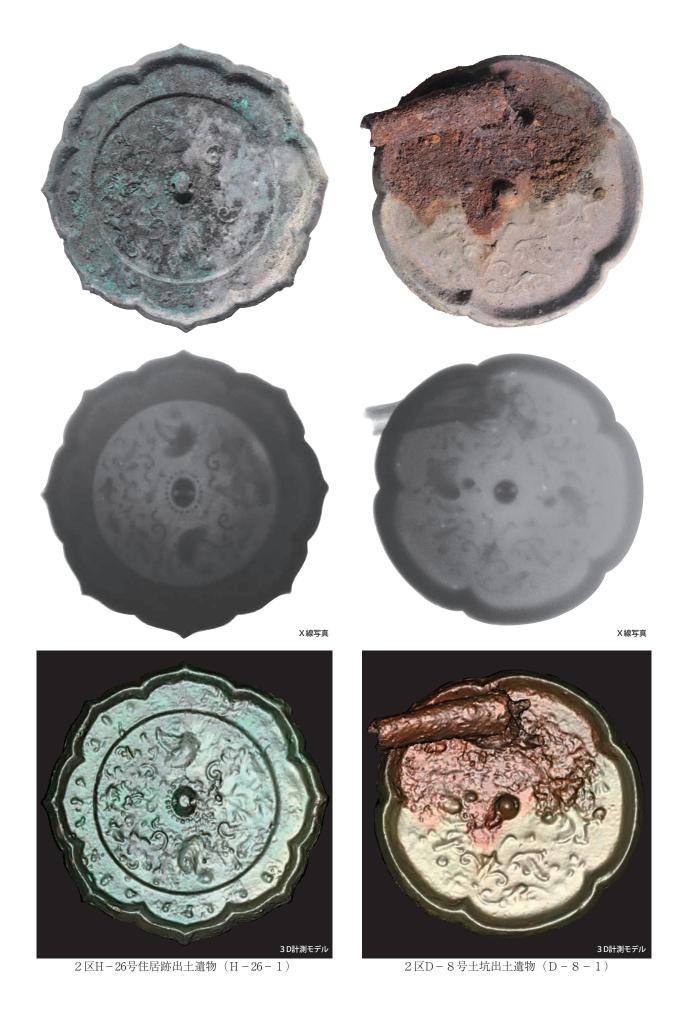
前橋市教育委員会



元総社蒼海遺跡群(137)1区全景 (上が北)



元総社蒼海遺跡群 (137) 2区遠景 (南東から)



はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、 2万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感ぜられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期 古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中 心地として栄えました。また、続く律令時代になってからは総社・元総社地区に山王廃寺、 国府、国分僧寺、国分尼寺など上野国の中枢をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎬をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する元総社蒼海遺跡群 (137) は古代上野国の中枢地域の調査であり、 上野国府推定地域にも近接することから、調査成果に多くの注目を集めております。今回 の調査では、国府そのものに関連する遺構の検出、確認はかないませんでしたが、古墳時 代から古代の多数の住居跡や中世の堀跡等が検出されました。また、八稜鏡等の鏡も出土 しています。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりま したが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができま した。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進められることができました。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

令和2年3月

前橋市教育委員会 教育長 塩 﨑 政 江

例 言

- 1 本報告書は前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う元総社蒼海遺跡群 (137) の埋蔵文化財発 掘調査報告書である。
- 2 発掘調査の要項は次の通りである。

遺跡名 元総社蒼海遺跡群 (137) 調査場所 前橋市元総社町 1986 ほか

遺跡コード 1 A 246

監理指導 並木史一(前橋市教育委員会)

発掘・整理担当者 山田誠司 (技研コンサル株式会社) 調査員 茂木佑輔 (技研コンサル株式会社)

- 3 本書の編集は山田が行い、原稿執筆は I を並木、他を山田が担当した。
- 5 発掘調査および整理作業参加者は次の通りである。

大川明子 (技研コンサル株式会社)

青木美好 芦川良紀 新井 實 安藤三枝子 伊丹茂一 稲数美枝子 稲田 實 上沢公一 上田健一郎 宇賀神光 宇貫美代子 大塚とし子 岡 眞 小川弘之 笠原たく江 菊田武明 北爪二郎 小池初美 後藤次雄 小林克宏 小林 和 佐藤秀幸 佐藤文江 塩野谷和夫 設樂和男 清水隆二 杉田安廣 杉田友香 須田一雄 須田勝美 関根信子 高津邦道 高橋一巳 高橋正志 高見壽美子 立川千栄子 田所順子 富澤 博 中嶋知恵子 長野利章 二木純夫 西潟 登 乗附敏男 福島禄子 二ツ橋正雄 星野正也 細野竹美 真下かほる 増田 静 水野さかゑ 森田恵子 山口晶久

- 6 本書における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会文化財保護課で保管している。
- 7 下記の機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 山下工業株式会社

凡例

- 1 挿図中に使用した北は座標北である。
- 2 挿図に国土地理院発行 1/200,000『宇都宮』『長野』、1/25,000『前橋』、前橋市発行 1/2,500 都市計画図を 使用した。
- 3 遺構名称は、竪穴住居跡:H、竪穴状遺構:T、溝跡:W、井戸:I、土坑:D、ピット:Pである。
- 4 遺構・遺物実測図の縮尺は原則的に次の通りである。その他各図スケールを参照されたい。 遺構 全体図・・・1/300 住居跡・・溝跡・井戸跡・土坑・ピットほか・・・1/30、1/60

遺物 土器・陶磁器・・・1/3、1/4 鉄・銅・石製品・・・1/1、1/6 古銭・・・1/1

- 5 本文および表中の計測値については()は現存値を、[]は復元値を表す。
- 6 遺構図、遺物実測図のトーン表現は以下の通りである。

遺構 灰・焼土範囲: 遺物 須恵器(還元焰): 施釉: 施和:

7 主な火山降下物等の略称と年代は次の通りである。

As-B (浅間 B 軽石:1108) 、Hr-FP (榛名二ッ岳伊香保テフラ:6世紀中葉) 、

Hr-FA (榛名二ッ岳渋川テフラ:6世紀初頭)、As-C (浅間C軽石:3世紀後葉~4世紀前半)

目 次

巻頭	図版 1			
巻頭	図版 2			
はじ	めに			
例言	・凡例			
Ι	調査に至る経緯			1
Π	遺跡の位置と環境			2
${\rm I\hspace{1em}I\hspace{1em}I}$	調査の方針と経過			
	1 調査範囲と基本方針			8
	2 調査経過			8
IV	基本層序			8
V	遺構と遺物			
	1 1 🗵			
	(3) 井戸跡・土坑・ピット			10
	2 2区			
			······································	
VI	まとめ			48
		挿図目次		
Fig.	1 遺跡の位置	····· 1 Fig.18	2 区 H-11⋅12号住居跡、D-1号土坑 ·······;	34
Fig. 2	2 前橋の地形	····· 2 Fig.19	2区 H-13·15~17号住居跡 ····································	35
Fig. 3	3 周辺遺跡図	····· 3 Fig.20	2 区 H-18~22号住居跡、T-1号竪穴状遺構、	
Fig. 4	4 周辺調査地点とグリッド設定図	7	W-2号溝跡、I-1号井戸跡 ····································	36
Fig. 5	5 基本層序	····· 8 Fig.21	2区 H-23~25号住居跡、W-3号溝跡、	
Fig. 6	6 1区 全体図	12	D – 4 号土坑······	37
Fig.	7 1区 H-1・2号住居跡	······13 Fig.22	2 区 H-25·26·28·31·35~37号住居跡、	
Fig. 8	8 1区 H-3~6号住居跡跡、D-4号土	坑 …14	D-2・3・5・6号土坑、P-3号ピット;	38
Fig. 9	9 1区 H-4・5号住居跡カマド、H-7・	8号 Fig.23	2 区 H-27号住居跡 ······	
	住居跡、D – 10・11号土坑、P – 2 号ピット		2 区 H-29⋅30⋅32~34号住居跡、D-7~9号	
Fig.1			土坑、P-2・4・5号ピット····································	40
Fig.1		_	2区 W-1・4・5号溝跡、	
Fig.1			2区出土遺物(1)	
Fig.1			2区出土遺物(2)	
Fig.1		_	2 区出土遺物 (3)	
Fig.1			2区出土遺物(4)	
Fig.1	.6 2区 H-5~7号住居跡 ··············	····· 32 Fig.29	2区出土遺物(5)	45
Fig.1	7 2区 H-8~10・14号住居跡、P-1号ピッ	ト…33		

表目次

Tab. 1 Tab. 2 Tab. 3		Tab. 4 2 区井戸跡・土坑・ピット計測表・・・・・・29 Tab. 5 2 区出土遺物観察表・・・・・・・・・46
	写真図	版目次
PL. 1	1区 H-1号住居跡全景(北から) 1区 H-2号住居跡全景(西から) 1区 H-2号住居跡遺物出土状況(北西から) 1区 H-2号住居跡遺物出土状況(西から) 1区 H-2号住居跡遺物出土状況(北から) 1区 H-3号住居跡遺物出土状況(北から)	2区 H - 25 号住居跡カマド全景 (東から)
PL. 2	1区 H − 4 ~ 6 号住居跡全景 (東から) 1区 H − 4 ~ 6 号住居跡全景 (西から) 1区 H − 4 号住居跡カマド全景 (西から) 1区 H − 5 号住居跡カマド全景 (東から) 1区 H − 7 住居跡、D − 10 · 11 号土坑全景 (南から) 1区 H − 8 号住居跡、W − 1 号溝跡全景 (南西から) 1区 I − 1 号井戸跡全景 (南から)	2区 H - 27 号住居跡全景(西から) 2区 H - 27 号住居跡カマド全景(西から) 2区 H - 28・29 号住居跡、D - 5 号土坑全景(西から) 2区 H - 28 号住居跡全景(西から)
	1区 基本層序 B (東から) 1区 基本層序 C (南から) 1区 基本層序 D (東から)	PL.8 2区 D - 8号土坑全景(西から) 2区 D - 8号土坑銅鏡出土状況(西から) 2区 D - 8号土坑銅鏡出土状況(西から) 2区 D - 8号土坑鉄鈴出土状況(西から)
PL. 3	2区 調査区全景(上が北) 2区 H-1号住居跡全景(南から) 2区 H-1号住居跡電土堆積状況(南西から) 2区 H-2号住居跡全景(北から)	2区 基本層序 A (南から) 2区 基本層序 B (西から) 2区 基本層序 C (西から) 2区 基本層序 D (東から)
PL. 4	2区 H - 4号住居跡全景(西から) F 2区 H - 5・6号住居跡全景(西から) F 2区 H - 7号住居跡全景(西から) F	PL. 9 出土遺物 PL.10 出土遺物 PL.11 出土遺物 PL.12 出土遺物 PL.13 出土遺物
PL. 5	2区 H - 7 与 住居跡 カマド 生景 (北西から) 2区 H - 8 号住居跡 、P - 1号ピット全景 (西から) 2区 H - 9 号住居跡全景 (西から) 2区 H - 10 号住居跡全景 (西から) 2区 H - 10 号住居跡カマド全景 (西から) 2区 H - 11 号住居跡、D - 1号土坑全景 (北西から) 2区 H - 11 号住居跡カマド全景 (西から) 2区 H - 12 号住居跡カマド全景 (西から) 2区 H - 12 号住居跡カマド全景 (西から)	FL.13 山上堰初
PL. 6	2区 H - 13・14 号住居跡全景(南西から) 2区 H - 13 号住居跡カマド全景(西から) 2区 H - 15・16 号住居跡全景(南から) 2区 H - 17 号住居跡(南西から) 2区 H - 17 号住居跡 (南西から) 2区 H - 18 ~ 21 号住居跡 W - 2号溝跡全景(南西から) 2区 H - 22号住居跡、T-1号竪穴状遺構全景(南から) 2区 H - 22号住居跡遺物出土状況(北西から) 2区 H - 23号住居跡金景(西から)	

I 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴い実施され、21 年目にあたる。本調査地は、周辺で埋蔵文化財調査が長年にわたって行われていることから、遺跡地であることが確認されている。

令和元年8月26日付で前橋市長 山本 龍(区画整理課)(以下「前橋市」という。)より試掘確認調査依頼が提出された。これを受け、前橋市教育委員会(以下「市教委」という。)で同年9月18・19日に試掘確認調査を実施した結果、遺構が検出され、工事計画から遺構の現状保存は困難であると判断したため、記録保存を目的とした発掘調査実施に向けて協議を進めた。

令和元年 10 月 15 日付で前橋市より、埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼が、市教委に提出された。市教委では既に他の発掘調査を実施中のため、市教委直営による調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務を委託することで合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。同年 11 月 26 日付で前橋市と民間調査組織である技研コンサル株式会社との間で業務委託契約が締結され発掘調査に着手した。

なお、遺跡名称「元総社蒼海遺跡群(137)」(遺跡コード:1A246)の「元総社蒼海」は土地区画整理事業名を採用し、「(137)」は過年度に実施した発掘調査と区別するために付したものである。



Fig.1 遺跡の位置

Ⅱ 遺跡の位置と環境

地理的環境(Fig. 1) 元総社蒼海遺跡群(137)は、前橋市街地から利根川を隔て西へ約 3.6km の地点、前橋市元総社町地内に所在する。遺跡地の西側には関越自動車道が南北に、南側には国道 17 号、主要地方道の県道足門・前橋線、前橋・安中・富岡線が東西に、また東側には市道大友・石倉線が南北にそれぞれ走っている。

遺跡は榛名山山麓の相馬ヶ原扇状地端部と前橋台地との移行地帯に立地する。遺跡周辺には、相馬ヶ原扇状地の伏流水を水源とする牛池川、染谷川が流れている。これらの河川の開析作用によって細長い微高地と低地が多く形成されており、その比高差は3~5mを測る。遺跡が立地する周辺は主に畑地として利用されていたが、前橋市中心部から続く市街地の西端にあたり、近年では元総社蒼海土地区画整理事業の進展によって宅地や商業施設が立ち並び、市街地化が拡大している。

歴史的環境(Fig. 3 · Tab. 1) 本遺跡が所在する元総社 地域は、上野国府推定地や上野国分寺・国分尼寺を中心に連綿と遺跡が広がる地域であり、関越自動車道建設や区画整理 事業などに伴う発掘調査が行われ、多くの遺構が確認されている。本遺跡周辺地域での時代毎の遺跡の概要は以下の通りである。

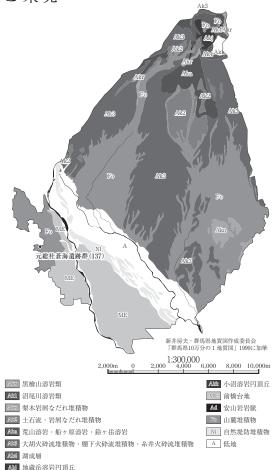


Fig. 2 前橋の地形

- (1)縄文時代 八幡川右岸の微高地上に産業道路東 [15] ・産業道路西 [16] 、本遺跡の立地する牛池川右岸台地上に上野国分僧寺・尼寺中間地域 [22] ・元総社小見Ⅲ遺跡 [59] ・元総社蒼海遺跡群 (24) などが挙げられ、竪穴住居跡が確認されている。本遺跡でも縄文時代前期から中期にかけての遺構を確認している。
- (2) 弥生時代 日高遺跡 [18] [19] ・上野国分僧寺尼寺中間地域 [22] ・正観寺遺跡 [21] などがあるが、その分布は散在的である。この内、日高遺跡では浅間 C 軽石下の水田跡が確認されており、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて継続して営まれた水田と捉えられている。
- (3) 古墳時代 本遺跡周辺は県内でも有数の古墳密集地域であり、それを代表するものとして総社古墳群が挙げられる。古墳時代後期・終末期に亘り、王山古墳 [7]・総社二子山古墳 [12]・愛宕山古墳 [10]・宝塔山古墳 [13]・蛇穴山古墳 [8] などの首長墓が多数築造された。また、この時期には山王廃寺 [4] が建立され、総社古墳群を含め、政治的中枢地域となる。

山王廃寺は昭和3年に日枝神社境内が「山王塔址」として国指定史跡となり、その後昭和49~56年にかけて7次にわたる本格的な発掘調査が行われた。この調査で金堂の検出および「放光寺」箆書の平瓦出土により山王廃寺が「山ノ上碑」「上野国交替実録帳」にみられる「放光寺」であることが有力視されるようになった。平成9~11年の調査でも土坑から大量の塑像が出土し、平成18・19年度調査では北・東・西面、平成20年度調査では南面の回廊を検出している。さらに平成21年度調査では「推定中門」と「西側南側回廊」の周辺部が、平成22年度調査では北西隅の回廊と接するように「基壇建物跡」と「北方建物群」が確認されている。なお、この寺の塔心礎や石製鴟尾、根巻石等の石造物群は宝塔山古墳の石棺や蛇穴山古墳の石室と同系統の石造技術に

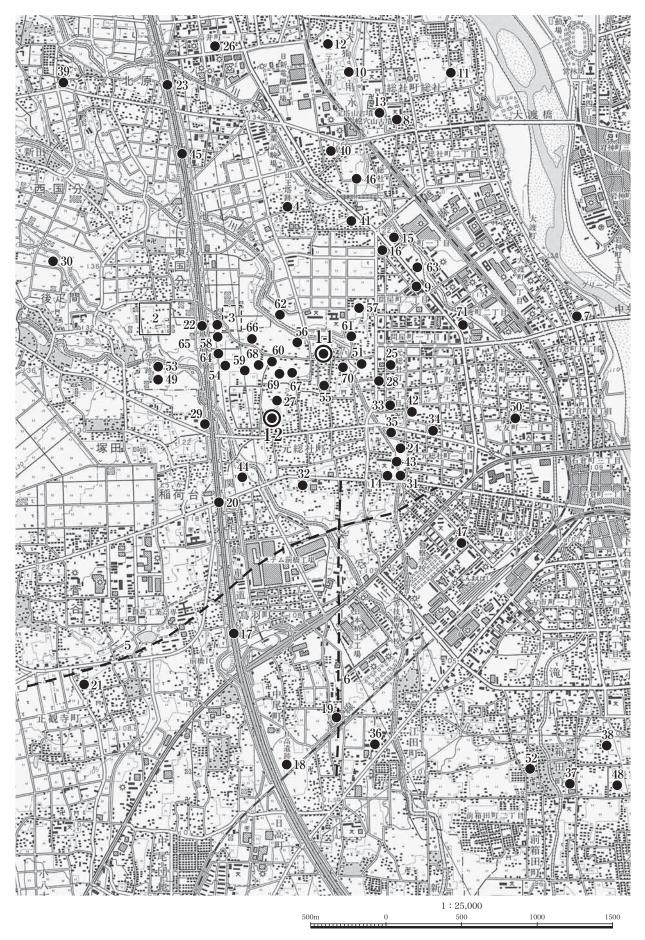


Fig. 3 周辺遺跡図

よるものと考えられており、仏教文化と古墳文化とが併存しながら機能していた様子が窺える。

この時代の集落は牛池川と染谷川に挟まれた台地上に展開しているが、前期~中期の集落は散見される程度で、後期からの集落増加が看取できる。生産域としては、牛池川左岸一帯に広がる低地平野において、元総社明神遺跡、元総社北川遺跡、総社閑泉明神北W・V遺跡などで水田跡が確認されている。

(4) 奈良・平安時代 奈良時代には上野国府が造営され、上野国分寺 [2]・国分尼寺 [3] の建立に示されるように、本遺跡周辺は古代の政治・経済・文化の中心地として再編成される。

上野国府は本遺跡付近の区域に約900m四方に推定され、関連遺跡として元総社小学校校庭遺跡 [14] では県下最大級の掘立柱建物跡が検出され、元総社蒼海遺跡群(99)、上野国府等範囲内容確認調査28・33・34トレンチでは掘込地業を持つ建物跡が、元総社蒼海遺跡群(95)では方形の柱穴掘り方をもつ大型掘立柱建物跡が確認されている。元総社寺田遺跡 [43] では「國府」・「曹司」・「国」・「邑厨」などの墨書土器や人形が出土している。元総社明神遺跡 [24] では南北方向の溝跡、閑泉樋遺跡 [25] や元総社蒼海遺跡群(7)・(9)・(10)では東西方向の溝跡が確認され、国府域の外郭線の想定が為されている。また、周辺遺跡からは円面硯や緑釉陶器、巡方(腰帯具)なども出土しており、国府を考える上で貴重な資料となっている。

国分僧寺は大正 15 年に国指定史跡となり、昭和 40 年代から部分的な発掘調査が進められるようになった。昭和 55 年以降には本格的な調査が始まり、主要伽藍の礎石・築垣・堀等が確認されている。また、平成 24 年度から 28 年度にかけての第 2 期発掘調査において、これまでの金堂が講堂であったことが判明する等、伽藍配置の変更が行われている。国分尼寺は昭和 44・45 年のトレンチ調査により伽藍配置が推定され、その後平成 12 年度に前橋市埋蔵文化財発掘調査団により南辺での寺域確認調査が行われた。調査の結果、南東・南西隅の築垣と、それに平行する溝跡や道路状遺構等が確認されている。また、高崎市教育委員会による平成 28 年度の調査で講堂跡が尼坊跡であったことが判明し、平成 29 年度の調査では回廊跡の一部が確認されている。関連遺跡としては鳥羽遺跡 [20] で神社遺構と工房跡が確認され、上野国分僧寺・尼寺中間地域 [22] では大規模な集落・堀立柱建物跡群が検出されている。また、近郊には N・64°・E 方向に東山道(国府ルート)が、日高遺跡 [19] では幅約 4.5m の推定日高道が国府方向へ延びると推定されている。

当該期の一般的な集落は、古墳時代と同様に牛池川と染谷川に挟まれた台地上に立地するが、国府推定域の中心部での分布は少なく、国府域と居住域の区分けが看取できる。近年の調査による元総社蒼海遺跡群 (40) で8世紀後半の住居跡内の一角に鍛冶遺構が検出されている。元総社蒼海遺跡群 (41) では9世紀後半の鍛冶工房が検出され、同遺跡からは金の付着した灰釉陶器や奈良三彩といった貴重な遺物が出土している。また、元総社蒼海遺跡群 (64) では8世紀前半には廃絶されたと考えられる製鉄炉跡 (箱型炉)が1基、元総社稲葉遺跡 [47]では10世紀に想定される製鉄炉跡 (小型自立炉)が2基確認されている。

(5) 中世 室町時代になると上野国守護上杉氏から守護代に任命された長尾氏が蒼海城を本拠地としこの地を治めた。元総社蒼海遺跡群では蒼海城の堀跡が多く検出されており、12~15世紀の青白磁梅瓶、青磁酒会壺蓋・袴腰香炉などの貿易陶磁が多数出土している。天正年間以降は諏訪・秋元氏が蒼海城に入り当地の領主となるが、慶長6年(1601年)に秋元長朝が総社城に移ると同時に蒼海城は廃城となった。また、当該期の周辺遺跡では大渡道場遺跡[71]の貨幣埋納遺構から572枚におよぶ銭貨が撚紐を通した「緡」の状態で六緡出土している。

Tab. 1 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	元総社蒼海遺跡群(137)	11	遠見山古墳	21	正観寺遺跡 I ~ IV	31	寺田遺跡	41	昌楽寺廻向遺跡 · Ⅱ 遺跡
2	上野国分寺跡	12	総社二子山古墳	22	上野国分僧寺・尼寺中間地域	32	天神遺跡・Ⅱ遺跡	42	堰越Ⅱ遺跡
3	上野国分尼寺跡	13	宝塔山古墳	23	北原遺跡	33	屋敷遺跡·Ⅱ遺跡	43	元総社寺田遺跡 I ~Ⅲ
4	山王廃寺跡	14	元総社小学校校庭遺跡	24	元総社明神遺跡 I ~ XⅢ	34	堰越遺跡	44	弥勒遺跡・Ⅱ 遺跡
5	東山道 (推定)	15	産業道路東遺跡	25	閑泉樋遺跡	35	大友屋敷Ⅱ・Ⅲ遺跡	45	国分境遺跡·Ⅱ·Ⅲ遺跡
6	日高道(推定)	16	産業道路西遺跡	26	柿木遺跡 · Ⅱ 遺跡	36	勝呂遺跡	46	大屋敷遺跡 I ~ VI
7	王山古墳	17	中尾遺跡	27	草作遺跡	37	村前遺跡	47	元総社稲葉遺跡
8	蛇穴山古墳	18	日高遺跡	28	閑泉樋南遺跡	38	五反田遺跡	48	五反田Ⅱ遺跡
9	稲荷山古墳	19	日高遺跡	29	塚田村東遺跡	39	熊野谷遺跡 · Ⅱ · Ⅲ遺跡	49	上野国分寺参道遺跡
10	愛宕山古墳	20	鳥羽遺跡	30	後疋間遺跡 I ~Ⅲ	40	村東遺跡	50	大友宅地添遺跡

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
51	総社閑泉明神北遺跡·Ⅱ遺跡	56	元総社小見内Ⅲ遺跡	61	総社甲稲荷塚大道西Ⅲ·Ⅳ遺跡	66	元総社小見内Ⅷ遺跡	71	大渡道場遺跡
52	箱田川西遺跡	57	総社甲稲荷塚大道西遺跡·Ⅱ遺跡	62	元総社北川遺跡	67	元総社小見内Ⅷ遺跡		
53	元総社西川遺跡	58	元総社小見内Ⅱ遺跡	63	稲荷塚道東遺跡	68	元総社小見Ⅸ・元総社小見内Ⅸ遺跡		
54	元総社小見遺跡	59	元総社小見内Ⅲ遺跡	64	元総社小見IV·VI遺跡	69	元総社小見内X遺跡		
55	元総社宅地遺跡1~23トレンチ	60	元総社小見内IV·VI遺跡	65	元総社小見V遺跡	70	総社閑泉明神北V遺跡		

番号	遺跡名	調査年度	時代:主な遺構·遺物
田 つ	元総社養海遺跡群 (1)	2005	古墳~平安:住居跡・掘立柱建物跡・区画溝・道路状遺構カ、中世:堀跡(蒼海城) ◇縄文土器(前期)・緑釉・灰釉・盤・こね鉢・
_	元総社養海遺跡群 (2)	2005	鉄鏃、鉄鋲、腰帯具・権ヵ 奈良・平安:住居跡、竪穴状遺構・大溝・土坑墓、中世以降:土坑墓・道路状遺構 ◇灰釉・盤・高盤・鉄鏃・埴輪
	元総社蒼海遺跡群 (3) ・元総社小見呱遺跡	2005	編文:住居跡、古墳・奈良・平安:住居跡・掘立柱建物跡・道路伏遺傳、中世:畠跡
-	元総社蒼海遺跡群 (4)	2005	縄文:住居跡、古墳・奈良・平安:住居跡・竪穴状遺構 ◇縄文土器(前・中期)・灰釉・盤・鉄鉢形土器・飾金具・墨書「連」カ・紡錘車・土錘・臼玉・石製模造品
-	元総社蒼海遺跡群 (5)	2005	古墳:住居跡、奈良・平安:住居跡、中世:道路状遺構・周溝状遺構・土坑墓・火葬墓 ◇暗文坏・板碑・管王・臼玉
-	元総社蒼海遺跡群(6)	2005	古墳:砂岩採掘坑、奈良・平安:住居跡・竪穴状遺構・鍛冶遺構・区画溝、中世:堀跡(蒼海城)・土坑墓 ◇灰釉・鉄鏃
	元総社蒼海遺跡群 (7) 元総社蒼海遺跡群 (8)	2005 2006	平安:住居跡・大溝・砂岩採掘坑、中世:大溝 ◇灰釉・羽口・埴輪 古墳・奈良・平安:住居跡、中世以降:道路状遺構 ◇緑釉・灰釉・三足土器・灯明具・鉄鏃・鉄鍋・勾玉
-	元総社蒼海遺跡群(9)(10)	2006	編文:住居跡、古墳:住居跡・竪穴状遺構、飛鳥:住居跡・堀立柱建物跡・大溝、奈良・平安:住居跡・竪穴状遺構・大溝・砂岩採 掘坑 ◇縄文土器(中期~晩期)・弥生土器(中期)・灰釉・鉄鏃・小札・鉄鎌・紡錘車・土錘・石製模造品・埴輪
-	元総社蒼海遺跡群 (11)	2006	古墳~平安:住居跡・竪穴状遺構、中世:堀跡(蒼海城) ◇縄文土器(前・中期)・灰釉・暗文坏・土錘・勾玉・臼玉
-	元総社蒼海遺跡群(12)	2006	古墳・奈良・平安:住居跡、中世以降:土坑墓 ◇灰釉・暗文坏・鉄鏃
-	元総社蒼海遺跡群(13)	2008	總文:住居跡、古墳・飛鳥:住居跡、奈良・平安:住居跡・工房跡・道路状遺構・大溝、中世:土坑墓 ◇縄文土器 (前期)・緑釉・灰釉・馬具・鉄鏃・鉄釜カ・紡錘車・鬼瓦
-	元総社蒼海遺跡群 (14)	2008	古墳:住居跡・水田跡・畠跡、飛鳥:住居跡、奈良・平安:住居跡・掘立柱建物跡、中世:堀跡(蒼海城)・竪穴状遺構 ◇灰釉・暗文环 [国庁 A 案推定域]
-	元総社蒼海遺跡群 (15)	2008	奈良·平安:住居跡、中世:土坑墓 ◇灰釉・灯明具
\vdash	元総社蒼海遺跡群 (16) 元総社蒼海遺跡群 (17)	2008	奈良・平安:住居跡・島跡 ◇灰釉・盤 古墳:住居跡・竪穴状遺構・区画溝、平安:住居跡、中世:土坑墓 ◇縄文土器(前期)・弥生土器(後期)・灰釉・灯明具
-	元総社蒼海遺跡群 (18)	2008	平安:住居跡、中世以降:土坑墓 ◇灰釉・盤・鉗子カ・青磁 (12c)
-	元総社蒼海遺跡群 (19)	2008	古墳:水田跡 ◇木製舟形容器
-	元総社蒼海遺跡群 (20)	2008	古墳・飛鳥:住居跡、奈良・平安:住居跡・竪穴状遺構・道路状遺構、中世:土坑墓 ◇縄文土器(前〜後期)・灰釉陶器・盤・須恵器「壺G」・暗文坏・灯明具・鉄鏃・鉄鎌・腰帯具・鬼瓦 [国庁A案推定域、国分尼寺南辺含む]
\vdash	元総社養海遺跡群 (21)	2009	奈良・平安:大溝、中世:堀跡(蒼海城)・盛土状遺構・方形竪穴 ◇灰釉・白磁(12c)・青磁(15c) [国庁 B 案推定域]
_	元総社蒼海遺跡群 (22) 元総社蒼海遺跡群 (23)	2009	古墳・飛鳥:住居跡、平安:住居跡・竪穴状遺構・道路状遺構カ ◇灰釉・暗文坏・洗 (大形盤) カ・灯明具・鉄鍵 古墳・飛鳥:住居跡、奈良・平安:住居跡・大溝、中世:堀跡(蒼海城) ◇白磁(15c)・青磁(13~15c)・天目茶碗
	元総社養海遺跡群 (24)	2009	[国庁B条推定域] 縄文:住居跡、古墳・飛鳥:住居跡、奈良・平安:住居跡・竪穴状遊樽、中世:方形竪穴・道路状遊樽 ◇縄文土器(前・中期)・灰釉・
	元総社蒼海遺跡群 (25)	2009	盤・竈形土製品・腰帯具・鉄鏃・紡錘車・土錘・青磁 (14c) 古墳・平安:住居跡 ◇灰釉・鉄鏃・青白磁梅瓶 (12~14c) [国庁A案推定域]
_	元総任倉海遺跡群 (26) 元総社蒼海遺跡群 (26)	2009	飛鳥・奈良:住居跡、平安:住居跡・竪穴状遺構、土坑墓、中世:堀跡(蒼海城) ◇緑釉・灰釉・円面硯・盤・高盤・暗文坏・紡錘車・
_	元総社蒼海遺跡群(27)	2009	鉄鏃・腰帯具・土錘・墨書「大館」 古輿: 住居跡、奈良・平安: 住居跡・掘立柱建物跡・竪穴状遺構、中世: 堀跡(蒼海城)・方形竪穴 ◇縄文土器(前~晩期)・弥生土器(後
	元総社蒼海遺跡群 (28)	2009	期)・灰釉・盤・洗ヵ・灯明具・鉄鏃・埴輪 古墳:住居跡・大溝、奈良・平安:住居跡・竪穴状遺構、中世:堀跡(蒼海城)・方形竪穴 ◇縄文土器(前〜晩期)・弥生土器(後
-	元総社蒼海遺跡群 (29)	2009	期)・灰釉・盤・鉄鏃・馬具・紡錘車・羽口・埴輪 古墳~平安:住居跡、中世以降:堀跡(蒼海城)・掘立柱建物跡・地下式坑・土坑墓・火葬跡 ◇灰釉・鉄鏃・鉄滓 [国庁B・
	元総社蒼海遺跡群 (30)	2009	○宋推定域 古墳・平安:住居跡、中世:堀跡(蒼海域)・道路状遺構・土坑墓・火葬跡 ◇縄文土器(前・中期)・鉄鏃
-	元総社蒼海遺跡群 (31)	2009	古墳:住居跡、中世:堀跡(蒼海城)、時期不明:道路状遺構 ◇土錘・埴輪 [国庁A案推定域]
-	元総社蒼海遺跡群 (32)	2010	古墳:住居跡、奈良・平安:住居跡、中世:堀跡(蒼海城)・竪穴状造構 ◇縄文土器(前期)・灰釉・鉄鏃 [国庁D条推定域含む]
-	元総社蒼海遺跡群 (33)	2010	古墳: 粘土採掘坑、飛鳥・奈良: 住居跡、平安: 住居跡・大溝カ・土坑墓 中世: 堀跡(蒼海城)・方形竪穴・土坑墓 ◇高盤・こね鉢・ 鉄鉢形土器
-	元総社蒼海遺跡群 (34)	2010	奈良・平安:住居跡、中世以降:堀跡(蒼海城)・竪穴状遺構 ◇灰釉・暗文环・羽口・紡錘車
-	元総社蒼海遺跡群 (35)	2010	縄文: 住居跡、古墳・飛鳥: 住居跡、奈良・平安: 住居跡・布振振立柱建物跡・掘立柱建物跡、中世: 堀跡 (香海城) ・土坑墓 ◇縄文土器 (前期) ・灰釉・高盤・盤・畿内産暗文坏・鉄斧・鉄整カ・紡錘車・墨書・田山「天」 (則天文字) 古墳: 畠跡、平安: 住居跡・水田跡・大溝・砂岩採掘坑、中世: 堀跡 (蒼海城) ◇灰釉・盤・ガ明具・鉄鏃・埴輪・板碑 [国]
-	元総社蒼海遺跡群 (36)	2010	□ 母、
_	元総社蒼海遺跡群 (37)	2011	日報,R. M. EDG 19、 干头、EDG 19、 主义人的国际,主义系、干E、细维(基体系)(一种工工品(及用),产品),产品 工力等、工用具、権力、疾嫌、 戸營 方,更具、羽口、转率、炉壁、勃隆車、土锤、耳葉、日主、石製炭 20
	元総社蒼海遺跡群(38)	2012	日報: 止后動、至久(火海)等 (5) 古珠河(大海) (7) 元 (1) 元 (
	元総社蒼海遺跡群 (39)	2012	日東、山西が、丁文・山西が、土力等、下足のは、八路、ウザエーは、(明・丁列) (八明 1879年 1871年 17月) 万円 1879年 18月 1877年 187
_	元総社蒼海遺跡群 (40)	2013	現立: 住居跡、古墳: 住居跡、奈良・平安: 住居跡・鍛冶遺構、中世: 报立柱建物跡・道路状遺構 ◇縄文土器 (前期)・青巌・奈良三彩・
_	元総社蒼海遺跡群 (41)	2013	轉送、任告跡、古墳・壮告跡、奈良・平安・壮告跡・寂台道傳、中世・振立任建物跡・道路状道傳 ◇ 純 太王容(明期)・育盤・奈良ニ彩・ 接輪・灰稲(金付着)・整・鉄鉢形土器・暗文坏・円面硯・須恵器「壺 G」・灯明具・鉄鏃・鉄紺・腰帯具・羽口・紡錘車・白玉・刻書「☆ (五芒星)」・墨書「金」
	元総社養海遺跡群(42)	2013	(遺情なし)
	元総社蒼海遺跡群 (43) 元総社蒼海遺跡群 (44)	2013 2013	奈良・平安:住居跡、中世:道路状遺構 ◇高盤 奈良・平安:住居跡、中世:堀跡(蒼海城)
	元総任营海道跡群(44) 元総社蒼海遺跡群(45)	2013	示良・平女・仕店が、平世・堀が(倉海城) 古墳・平安:住居跡、中世:堀跡(蒼海城)・地下式坑 ◇三足土器・鉄滓・羽口 [国庁 C 条推定域]
	元総社蒼海遺跡群(46)	2013	平安:住居跡
-	元総社蒼海遺跡群(47)	2013	中世: 場跡 (蒼海城) ・柱列跡 縄文: 住居跡、古墳~奈良: 住居跡、平安: 住居跡・竪穴状遺構・埋没谷 ◇縄文土器 (前・中期) ・灰釉・高盤・盤・暗文坏・鉄鏃・
	元総社蒼海遺跡群 (48) 元総社蒼海遺跡群 (49)	2013	轉表: 正治師、自現"亦成・正治師、干文・正治師、至八小週時、年汉甘 ◇神之上師(問・平別)、八相・同盤・盤・唱え小・歎録・養養・養藤・美澤・新蓮車・白玉 平安:住居跡
	元総社蒼海遺跡群(50)	2013	1 × ・ L. 1 1 1 1 1 1 1 1 1
	元総社蒼海遺跡群 (51)	2013	古墳·奈良:住居跡 ◇盤·暗文坏
	元総社蒼海遺跡群 (52)	2013	(遺構なし)
	元総社蒼海遺跡群(53)	2013	古墳~平安:住居跡 ◇灰釉・灯明具・紡錘車・石製模造品 [国庁 D 条推定域]
	元総社蒼海遺跡群 (54) 元総社蒼海遺跡群 (55)	2013 2013	(遺構なし) 奈良:住居跡
	元総社蒼海遺跡群 (56) (61)	2013	古墳:方形周溝墓・住居跡・竪穴状遺構、奈良・平安:住居跡 ◇縄文土器(前・中期)・弥生土器(後期)・紡錘車
	元総社蒼海遺跡群 (57)	2014	中世: 州跡 (蒼海城) ◇高盤・馬骨・青磁 (15 ~ 16c) [国庁B案推定域]
	元総社蒼海遺跡群 (58)	2014	平安:大溝、中世:堀跡(蒼海城) ◇灰釉・温石 [国庁B案推定域]
	元総社蒼海遺跡群 (59) 元総社蒼海遺跡群 (60)	2014 2014	平安:住居跡、中世:場跡(蒼海城)·方形竪穴 古墳:住居跡、飛鳥:大溝、平安:住居跡、中世:場跡(蒼海城) ◇緑釉・灰釉(朱墨転用硯)・盤・円面硯・刀装具・鉄滓
_	元総社蒼海遺跡群 (62)	2014	□ 現・正治が、飛鳥・八傳、下文・正治が、下止・帰跡(音停機) ◇ 料価・八価(不至料用税)・盤・口画税・刀を糸・妖性 古墳:周溝墓
	元総社蒼海遺跡群 (63)	2014	古墳·平安: 住居跡 ◇紡錘車·管玉·臼玉
	元総社蒼海遺跡群 (64)	2014	奈良力:製鉄炉、平安:住居跡、中世:方形竪穴・土坑墓 ◇鉄滓・炉壁 [国庁A案推定域]
	元総社蒼海遺跡群 (65)	2014	古墳·平安:住居跡、中世:堀跡(蒼海城) ◇灰釉 [国庁 C 楽推定域]
	元総社蒼海遺跡群 (66) 元総社蒼海遺跡群 (67)	2013 2013	古墳:住居跡、中世:堀跡(蒼海城) 古墳:住居跡
	/ or or interest of the Control of t	2010	The second secon

# -	生の	吐力	細木左 庇	
番号		跡名	調査年度	時代:主な遺構・出土遺物
_	元総社蒼海遺跡群 (68)		2013	奈良:住居跡、中世以降:方形竪穴
-	元総社蒼海遺跡群 (72)		2013	平安:住居跡 ◇灰釉
_	元総社蒼海遺跡群 (73)		2013	時期不明:道路状遺構
_	元総社蒼海遺跡群 (74)		2014	古墳・平安:住居跡、中世:井戸
_	元総社蒼海遺跡群(75)		2014	平安:住居跡 中世:堀跡(蒼海城) ◇埴輪
_	元総社蒼海遺跡群 (76)		2014	平安:住居跡 ◇灰釉·灯明具
-	元総社蒼海遺跡群 (77)		2014	(遺構僅か)
-	元総社蒼海遺跡群 (78)		2014	古墳·飛鳥·平安:住居跡、中世:井戸 ◇灰釉·埴輪·鉄鍵ヵ
-	元総社蒼海遺跡群 (79)		2014	古墳~奈良:住居跡、平安:住居跡・土坑墓 ◇緑釉・灰釉・鉄鏃・権・白玉・墨書「方」カ
-	元総社蒼海遺跡群(80)		2014	古墳~平安:住居跡
-	元総社蒼海遺跡群 (81)		2014	古墳:方形周溝墓・住居跡、飛鳥:住居跡、奈良・平安:住居跡・竪穴状遺構 ◇紡錘車・管玉・臼玉・石製模造品
-	元総社蒼海遺跡群 (82)		2014	古墳・平安:住居跡
-	元総社蒼海遺跡群(83)		2014	(遺構僅か)
-	元総社蒼海遺跡群(84)		2014	飛鳥:住居跡 ◇高盤
-	元総社蒼海遺跡群 (85)		2014	飛鳥~平安:住居跡、中世:堀跡(蒼海城) ◇緑釉·灰釉·羽口
-	元総社蒼海遺跡群 (88)		2014	時期不明:畠跡
-	元総社蒼海遺跡群 (89)		2014	中世:竪穴状遺構
-	元総社蒼海遺跡群 (90)		2014	中世:竪穴状遺構
-	元総社蒼海遺跡群 (91)		2014	飛鳥~平安:住居跡、中世:堀跡(蒼海城) ◇灰釉・盤・金銅小仏
-	元総社蒼海遺跡群 (92)		2014	(遺構なし)
-	元総社蒼海遺跡群 (94)		2014	中世:堀跡(蒼海城) ◇鉄滓
-	元総社蒼海遺跡群 (95)		2014	古墳・飛鳥:住居跡、奈良・平安:住居跡・掘立柱建物跡・大溝 ◇灰釉・灯明具 [国庁C楽推定域]
-	元総社蒼海遺跡群 (96)		2014	(遺構なし) [国庁C条推定域]
-	元総社蒼海遺跡群 (97)		2014	平安:住居跡、中世:堀跡(蒼海城) ◇灰釉·灯明具·馬具
-	元総社蒼海遺跡群 (98)		2014	中世: 据立柱建物跡 [国庁 C 案推定域]
	元総社蒼海遺跡群 (99)		2015	奈良·平安: 掘込地業建物跡 [国庁 C 条推定域]
	上野国府等範囲内容確認			
-	元総社蒼海遺跡群 (100))	2014	古墳:周溝墓、飛鳥:住居跡、奈良・平安:住居跡・掘立柱建物跡、中世:掘立柱建物跡・道路状遺構 <>縄文土器 (晩期) 灰釉・鉄滓・埴輪
- 1	元総社蒼海遺跡群 (101))	2014	縄文:竪穴状遺構・土坑墓、飛鳥・奈良:住居跡、平安:住居跡・掘立柱建物跡・土坑墓、中世:堀跡(蒼海城)・掘立柱建物跡
-				◇縄文土器(後期)・灰釉・槍鉋ヵ
-	元総社蒼海遺跡群 (102)		2015	中世:堀跡 ◇灯明具 [国庁B案推定域]
-	元総社蒼海遺跡群 (103)		2015	縄文:住居跡、古墳~平安:住居跡 ◇縄文土器(前・中期)・灰釉・盤状坏・灯明具・「有鍔台付鉢」
-	元総社蒼海遺跡群 (116)		2016	縄文:住居跡、古墳~平安:住居跡 ◇縄文土器(前・中期)・灰釉・「那波郡朝倉」郷名墨書瓦・銅製錫杖頭
-	元総社蒼海遺跡群 (117)		2016	飛鳥:住居跡、奈良・平安:区画溝
-	元総社蒼海遺跡群 (118)		2016	平安:住居跡·土坑墓、中世以降:粘土採掘坑 ◇灰釉·国分寺鬼瓦·鉄鏃
-	元総社蒼海遺跡群 (120))	2016	平安:掘立柱建物跡 ◇縄文土器 (前期)
-	元総社蒼海遺跡群 (121))	2016	飛鳥:住居跡·区画溝、奈良·平安:区画溝·土坑墓 ◇貝巣穴痕軟質泥岩
_	元総社蒼海遺跡群 (122))	2016	古墳: 竪穴状遺構、飛鳥・奈良: 住居跡、平安: 住居跡・掘込地業建物跡・竪穴状遺構、中世: 道路状遺構・堀跡(蒼海城)・土塁跡(蒼海堤)・人科選・アメート・フィー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
				海城) ◇緑釉・灰釉・円面硯・馬具・鉄鏃・紡錘車・土錘・臼玉・刻書「奉」・墨書「国」ヵ「代」カ
_	元総社蒼海遺跡群 (123)		2016	縄文:住居跡、古墳~平安:住居跡、中世:堀跡 ◇縄文土器(中期)・緑釉陶器
_	元総社蒼海遺跡群 (124)		2017	中世: 堀跡(蒼海城) ·土塁(蒼海城) ◇埴輪·火打金
_	元総社蒼海遺跡群 (126)		2017	平安:住居跡、中世:堀跡(蒼海城)・土塁(蒼海城)
-	元総社蒼海遺跡群 (128)		2018	古墳:住居跡・畠跡・炉跡、平安:水田跡 ◇鉄滓
-	元総社蒼海遺跡群 (129)		2018	中世: 堀跡(蒼海城) ◇縄文土器(中期)・緑釉陶器
-	元総社蒼海遺跡群(130))	2018	平安:住居跡·土坑墓、中世:堀跡(蒼海城) ◇白磁·青磁
-	元総社蒼海遺跡群 (131))	2018	古墳:住居跡、平安:住居跡、中世:堀跡(蒼海城)
_	元総社蒼海遺跡群(137	7)	2019	
-	元総社蒼海遺跡群(17後	街区)	2015	古墳:住居跡、奈良・平安:住居跡・道路状遺構、中世:土坑墓・火莽跡 ◇こね鉢カ・板碑
_	元総社蒼海遺跡群(93 復	術区)	2016	古墳:畠·粘土採掘坑、奈良·平安:住居跡・粘土採掘坑、中世:堀跡(蒼海城)・掘立柱建物跡 ◇縄文土器(中・後期)・灰釉・
		-		暗文坏・転用硯・紡錘車・鉄滓
_	元総社蒼海遺跡群(94 復	街区)	2017	縄文:住居跡、古墳:住居跡、奈良・平安:住居跡 ◇縄文土器(前・中・後期)・彩漆土器(縄文前期)、墨書「馬」「入田」
_	元総社小見遺跡		2000	縄文・古墳:住居跡、奈良・平安:住居跡・掘立柱建物跡・道路伏遺構 〈縄文土器(中期)・緑釉・灰釉・水瓶・円面硯・馬具・鉄鏃・紡錘車・臼玉
-	元総社小見Ⅱ遺跡		2002	縄文:住居跡、古墳:住居跡、奈良・平安:住居跡・掘立柱建物跡、中世:道路状遺構 ◇縄文土器 (中期) ・緑釉・灰釉・三足盤・ 双耳坏・灯明具・鉄鏃・鉄斧・鉗子・墨書「市」・紡錘車・臼玉
				スキャ・カザ兵・大阪線・大阪庁・加丁・豪音・中丁・初展早・ロエ 縄文:住居跡、古墳・飛鳥:住居跡、奈良・平安:住居跡、中世以降:堀跡(蒼海城)・道路状遺構・土坑墓 ◇縄文土器(中期)・
-	元総社小見Ⅲ遺跡		2002	種文・正店跡、古墳・飛鳥・正店跡、景良・十文・正店跡、中世以降・堀跡(宮海戏)・追崎仏遺傳・工児差 ▽ 種文工器(中期)・ 緑釉・灰釉・暗文坏・国分寺鬼瓦・耳環・臼玉
-	元総社小見Ⅳ遺跡		2003	縄文・古墳~平安:住居跡、中世:道路跡 ◇縄文土器(中期)・灰釉・灯明具・鉄鏃・弓筈ヵ・紡錘車・土錘
-	元総社小見V遺跡		2003	縄文:住居跡、古墳・平安:住居跡・掘立柱建物跡、中世:畠跡 ◇縄文土器(前~後期)・灰釉
_	元総社小見VI遺跡		2004	縄文・古墳~平安:住居跡 ◇縄文土器 (前・中期)・緑釉・灰釉・水瓶・鉄鏃・鉄斧・鉄鋤・鉄鎌・腰帯具・紡錘車・権カ・墨書「庄」
				弥生:住居弥、古墳:住居弥、飛鳥:住居跡、奈良·平安:住居跡·掘立柱建物跡·区画溝·道路状潰構·土坑墓、中世:掘立柱建物跡·
-	元総社小見内Ⅲ遺跡		2001	か工・に占助、日東・正白助、水馬・正白助、水馬・正白助、水及・干ビ・加上工産が助った形勢穴、場跡(香海域)・道路水遺像・土力塞・小岸・ - 大形勢穴、場跡(香海域)・道路水遺像・土力薬・火寒薬(一種大土器(中期)・弥生土器(中期)・緑釉・灰釉・盤・こね鉢・暗文环・ 風字硯・鉄鏃・火打金・鉗子・飾金具・腰帯具・竜形土製品・白玉
-	元総社小見内IV遺跡		2002	飛鳥:住居跡、奈良・平安:住居跡・掘立柱建物跡・竪穴状造構・道路状造構・周溝状造構、中世:堀跡(蒼海城)・土坑墓 〈灰釉・盤・こね鉢
-	元総社小見内VI遺跡		2003	古墳・飛鳥:住居跡、平安:住居跡・掘立柱建物跡・区画講・道路伏道構・砂岩採掘坑、中世:掘立柱建物跡・〈灰釉・須恵器「壺G」・鉄鏃・臼玉
-	元総社小見内Ⅷ遺跡		2003	縄文:住居跡、飛鳥:住居跡、奈良·平安:大溝 ◇縄文土器(中期)・盤
-	元総社小見内ឃ遺跡		2003	奈良・平安:住居跡、中世:方形竪穴 ◇高盤・こね鉢・暗文坏
-	元総社小見内Ⅸ遺跡		2004	奈良・平安:住居跡・竪穴状遺構・土器埋納坑 ◇灰釉・盤・灯明具・鉄鏃・紡錘車
-	元総社小見内X遺跡		2004	奈良・平安:住居跡・工房跡・粘土採掘坑、中世:堀跡(蒼海城)・土坑墓・火葬跡・道路状造構 ◇縄文土器(晩期)・灰釉・金片・金粒
-	元総社草作遺跡		1984	飛鳥~平安:住居跡 ◇縄文土器(中期)・高盤・腰帯具・白磁(15c)・青磁(13c)
-	元総社草作V遺跡		2002	古墳~平安:住居跡・粘土採掘坑、中世以降:堀跡(蒼海城)・土坑墓・火葬跡 ◇白磁(11c~12c)・鉄鏃・臼玉
-	元総社宅地遺跡1~8ト	トレンチ	2000	古墳・平安: 住居跡 ◇紡錘車 [国庁 D 案推定域]
-	元総社宅地遺跡 9~18・	・21 トレンチ	2000	中世:堀跡(蒼海城)・方形竪穴 [国庁 B 案推定域]
-	元総社宅地遺跡 19 トレ	ンチ	2000	中世: 堀跡 (蒼海城) [国庁 C 案推定域]
-	元総社宅地遺跡 20 トレ	ンチ	2000	(遺構僅か) [国庁 A 案推定域]
	元総社宅地遺跡 22・23	トレンチ・	2000 - 2012	
_	上野国府等範囲内容確認	図調査 13 トレンチ	2000 · 2012	古墳:住居跡、飛鳥~平安:住居跡 (平安) · 掘立柱建物跡 (奈良) · 大溝·道路状造構 ◇獣脚土器
-	上野国府等範囲内容確認	忍調査1~7トレンチ	2011	古墳:住居跡、奈良・平安:住居跡(平安)・大溝・道路状遺構 [国庁 A 案推定域]
_	上野国府等範囲内容確認		2012	古墳:住居跡、奈良 (8c 前半) :住居跡、奈良~平安:住居跡・掘込地業建物跡 ◇石製模造品 [国庁 C 案推定域]
	$8 \sim 11 \cdot 13 \cdot 14 \cdot 28 \ $	レンチ		
-	上野国府等範囲内容確認		2012	古墳·平安:住居跡
-	上野国府等範囲内容確認		2016	平安:住居跡 ◇緑釉·灰釉
-	上野国府等範囲内容確認		2016	古墳:住居跡、奈良:掘込地業建物跡、平安:住居跡·掘込地業建物跡 ◇銅滓
-	上野国府等範囲内容確認	忍調査 29 トレンチ	2016	奈良・平安: 大溝、中世: 堀跡 (蒼海城) ◇墨書「夫」カ
-	上野国府等範囲内容確認	忍調査 40 トレンチ	2017	奈良・平安:大溝
_	上野国分尼寺(上野国分		1969 · 1970 ·	奈良:講堂跡・金堂跡・中門跡・東門跡・築地塀跡・住居跡、平安:住居跡
			1999 · 2000	
-	総社甲稲荷塚大道西遺跡		2001	奈良・平安:住居跡・掘立柱建物跡・用水路カ、中世:畠跡 ◇緑釉・灰釉・勾玉・管玉
-	総社甲稲荷塚大道西Ⅱ遺		2001	古墳:住居跡、平安:住居跡 ◇緑釉·灰釉·銅鉢·紡錘車·管玉·鉄滓
-	総社甲稲荷塚大道西Ⅲ遺		2002	古墳:住居跡、奈良・平安:住居跡・畠跡 ◇緑釉・灰釉・石製模造品・紡錘車
-	総社甲稲荷塚大道西IV遺	遺跡	2003	古墳:畠跡、中世以降:道路状遺構・畠跡
-	総社閑泉明神北遺跡		1999	古墳:水田跡·畠跡 ◇縄文土器(前~晩期)·灰釉・鉄滓・勾玉
-	総社閑泉明神北Ⅱ遺跡		2001	古墳・平安: 住居跡 〈 灰釉・管玉

番号	遺跡名	調査年度	時代:主な遺構・出土遺物
-	総社閑泉明神北Ⅲ遺跡	2002	縄文·古墳~平安:住居跡 ◇灯明具
-	総社閑泉明神北Ⅳ遺跡	$2002 \sim 2004$	古墳:水田跡・畠跡
-	総社閑泉明神北V遺跡	2004	古墳:水田跡、奈良・平安:住居跡
-	閑泉樋遺跡	1983	古墳:住居跡、奈良・平安:大溝
-	閑泉樋南遺跡	1985	古墳:住居跡 ◇紡錘車
-	元総社北川遺跡	2002 ~ 04	縄文~弥生:旧河道、古墳:住居跡・水田跡・粘土採掘坑・旧河道、平安:住居跡・掘立柱建物跡・畠跡、中世以降:堀立柱建物跡・水田跡・火葬墓 ◇縄文土器(晩期)・弥生土器(後期)・灰釉・盤・暗文坏
-	元総社牛池川遺跡	$2002 \sim 04$	古墳:水田跡・土器集積遺構、中世:火葬跡
-	元総社中学校遺跡	2016	古墳:住居跡、奈良:住居跡、平安:住居跡・掘立柱建物跡 ◇縄文土器(前・晩期)・緑釉・灰釉・鉄鉢形土器・三足土器・竈形土製品・「方光」銘瓦・臼玉

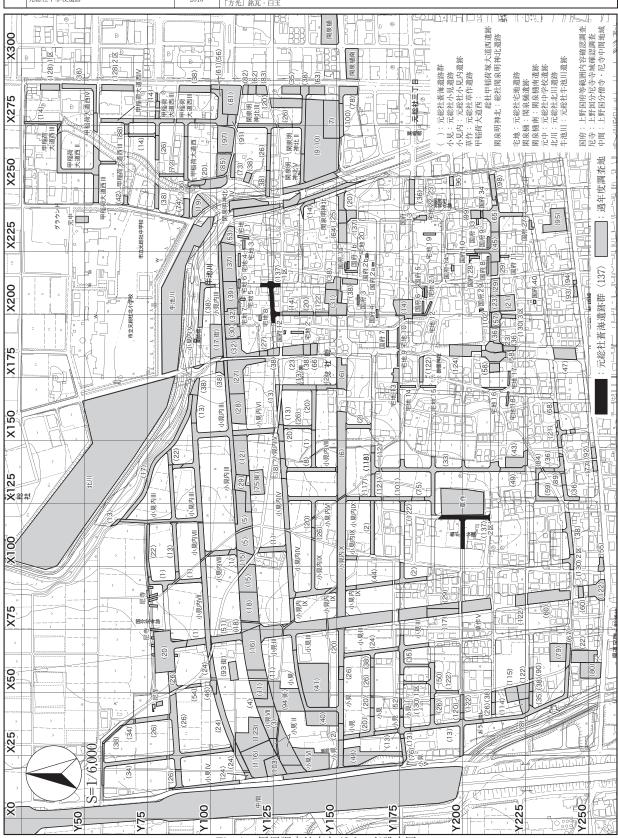


Fig. 4 周辺調査地点とグリッド設定図

\prod 調査の方針と経過

調査範囲と基本方針

委託調査箇所は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業における道路予定地であり、2工区に分かれ ている。1区605 m、2区854 m、総調査面積は1,459 mである。グリッド座標については国家座標(日本測地 系第IX系)X = 44000.000、Y = - 72200.000 を基点とする4mピッチのものを使用し、経線をX、緯線をYと して北西隅を基点に番付して呼称とした。公共座標は次のとおりである。

測点 日本測地系 (第111系) 世界測地系 (第12系 測地成果 2011)

 $1 \boxtimes$ X 198, Y 124 X = 43504.000 m, Y = -71408.000 mX = 43858.904 m, Y = -71699.761 m

2区 X = 43216.000 m, Y = -71768.000 mX = 43570.912 m, Y = -72059.759 mX 108, Y 196

発掘調査は遺構確認面まで重機(0.45バックホー)にて表土掘削を行い、遺構確認、遺構掘り下げ、遺構精査、 測量・写真撮影の手順で実施した。出土遺物に関しては、床面直上や遺構に伴うと判断したものはNo遺物とし、 他の覆土中の破片等については一括遺物として取り上げた。

遺構の記録には、図面作成はトータルステーション・電子平板を用いての測量・編集を行い、断面図について は一部オルソーフォトに変換して編集を行った。記録写真は 35mm モノクロ・リバーサル、デジタルカメラの 3種類を用いて撮影し、調査区の全景についてはドローンでの撮影を実施した。

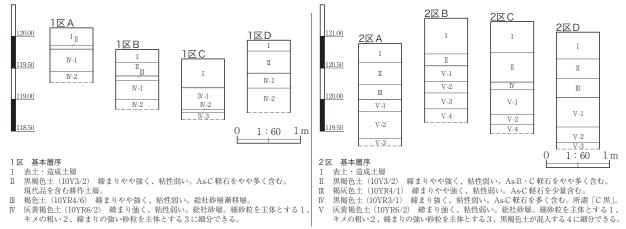
整理作業での出土遺物の計測は、キーエンス社製3Dスキャナー(VL-300)による機械計測を行った。出土 した銅鏡等は、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団でX線写真を撮影して頂いた。

2 調査経過

令和元年 12 月 5 日に調査区設定および器材準備、同日から重機による表土掘削を 9 日まで 1 区で実施した。 10日から16日まで2区の表土掘削を行い、併行して遺構確認および遺構掘下げを行った。令和2年1月16日 に1区で、27日に2区でドローンによる全景撮影を実施し、前橋市教育委員会による検査を受けた。2月6日 から13日まで埋め戻しを実施し、発掘調査を終了した。2月1日より整理作業および報告書作成を行った。

基本層序 IV

両調査区ともに、総社砂層(一部では総社砂層漸移層)を確認面として調査を実施した。2区では調査区東壁 を中心に部分的にではあるが「C黒」層(2区Ⅳ層)が残存しており、総社砂層とともに確認面とした。



- | 物色土 (101746/2) | 締まり強く、粘性弱い。 総社砂層。 細砂粒を主体とする 1 大刃 機色土 (107746/2) | 締まり強く、粘性弱い。 総社砂層。 細砂粒を主体とする 1 キメの粗い 2、締まりの強い砂粒を主体とする 3 に細分できる。

Fig. 5 基本層序

V 遺構と遺物

1 1区

(1) 竪穴住居跡

H-1号住居跡 (Fig. 7 · 12、PL. 1 · 9)

位置 X212、Y126・127 主軸方向 N - 76°-E 規模 東西軸 (1.36) m、南北軸 (3.46) m、壁現高 0.24 m。住居北西隅の検出で、大半は調査区外となる。 面積 (2.52) ㎡ 床面 平坦であるが、住居隅のためか硬化は弱い。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 P1・2の2基が検出された。 掘り方 総社砂層を掘り込みむ、地山硬化床。部分的に暗褐色土により構築されている。 重複 なし。 出土遺物 須恵器瓶類、土師器坏・甕等が出土しており、覆土から出土した土師器坏(1・2)を図示。 時期 出土遺物から6世紀後半から7世紀前半と考えられる。

H-2号住居跡(Fig. 7 · 12 · 13、PL. 1 · 9 · 10)

位置 $X211 \sim 213$ 、 $Y124 \sim 126$ 主軸方向 $N-60^{\circ}-E$ 規模 東西軸 $5.67\,\mathrm{m}$ 、南北軸 $5.73\,\mathrm{m}$ 、壁現高 $0.37\,\mathrm{m}$ 。 住居南東隅は調査区外となる。 面積 $(26.70)\,\mathrm{m}$ 床面 全面的に硬化しており、南東から中央にかけて特に顕著である。 カマド 検出されず。硬化面および焼土・灰の散布状況から、住居南東にあるものと考えられる。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 $P1 \sim 3$ の 3 基が検出された。 掘り方 総社砂層を掘り込み床面とする、地山硬化床。 重複 D-3 と重複し、新旧関係は本遺構 D-3 である。 出土遺物 須恵器坏(1)、頸部に波状文を巡らせる須恵器碌(2)、土師器坏($3\sim6$)、土師器鉢(7)、土師器甕($8\sim11$)、土師器壺($12\cdot13$)、石製紡錘車(14)が出土している。(10)・(11)の長胴甕はP1上面に並べられた状態で出土した。(12)は大型品で須恵器と見紛うが、調整や焼成から土師器と判断した。 時期 出土遺物から 6 世紀後半から 7 世紀初頭と考えられる。

H-3号住居跡(Fig. 8 · 13、PL. 1 · 10)

位置 $X209 \cdot 210$ 、 $Y123 \cdot 124$ 主軸方向 $N-68^{\circ}-E$ 規模 東西軸 4.57 m、南北軸 (1.76) m、壁現高 0.39 m。住居南半の検出である。 面積 7.22 m 床面 全面的に硬化しており、調査区際が最も硬化が強くなっている。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 $P1\sim 4$ の 4 基が検出された。 掘り方 総社砂層を掘り込み床面とする、地山硬化床。 重複 D-4 と重複し、新旧関係は本遺構 $\rightarrow D-4$ である。 出土遺物 須恵器甕、土師器坏・甕等が出土しており、P1 覆土から出土した土師器坏(1)を図示。 時期 出土遺物から 6 世紀後半から 7 世紀初頭と考えられる。

H-4号住居跡(Fig. 8 · 9 · 13、PL. 1 · 10)

位置 X211・212、Y122・123 主軸方向 N-117°-E 規模 東西軸 3.69 m、南北軸 3.42 m、壁現高 0.13 m。 調査区北東で検出。住居北東隅はカクランにより削平される。 面積 (9.52) ㎡ 床面 カマド前から住居中央にかけて硬化する。 カマド 東壁南寄りに 1 基検出した。確認長 0.83 m、燃焼部幅 0.28 m、袖の残存長は左(北)が 0.40 m、右(南)が 0.41 mを測る。煙道は壁外に 0.39 m突出している。 貯蔵穴 長軸 0.67 m、短軸 0.59 m、深さ 0.45 mを測る、楕円形の貯蔵穴が住居南東隅で検出された。 柱穴 検出されず。 掘り方総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 H-5・6と重複し、新旧関係はH-6→本遺構→H-5である。 出土遺物 須恵器高台付埦、灰釉陶器碗、羽釜等が出土しており、床面直上から出土した酸化焔焼成で底部回転糸切りによる須恵器埦(1)・高台付皿(2)を図示。 時期 重複関係や出土遺物から 10 世紀前半と考えられる。

H-5号住居跡(Fig. 8・9、PL. 1・2・10)

位置 X212、Y122 主軸方向 N-75°-W 規模 東西軸 (1.82) m、南北軸 3.37 m、壁現高 0.29 m。調査

区北東で検出、住居東半は調査区外となる。 面積 (8.01) ㎡ 床面 カマド前を中心に全体的に硬化する。カマド 東壁中央に1基検出。確認長1.14 m、燃焼部幅0.57 m、袖の残存長は左(南)が0.34 m、右(北)が0.34 m、煙道は壁外に0.51 m突出している。構築材として左袖に安山岩が据えられている。 柱穴 検出されず。掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 H-4・6と重複し、新旧関係はH-6→H-4→本遺構である。 出土遺物 床面直上から出土した酸化焔焼成で底部回転糸切りによる須恵器埦(1~4)、覆土から出土した墨書のある須恵器埦(5)、羽釜(6)を図示。(5)は酸化焔の須恵器で、墨書については判読不能である。 時期 重複関係や出土遺物から10世紀前半から中頃と考えられる。

H-6号住居跡 (Fig. 8 · 13、PL. 1 · 10)

位置 $X211 \cdot 212$ 、 $Y122 \cdot 123$ 主軸方向 $N-127^{\circ}-E$ 規模 東西軸 (1.01) m、南北軸 3.16 m、壁現高 0.10 m。調査区東側で検出、他遺構との重複により部分的な検出に留まっている。 面積 (3.90) ㎡ 床面 平坦 な床面で、住居隅の検出のためか部分的に硬化が見られるのみである。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 $H-4\cdot5$ と重複し、新旧関係は本遺構 $H-4\rightarrow H-5$ である。 出土遺物 酸化焔焼成の須恵器高台付埦 (1) が床面直上から出土している。 時期 重複関係や出土遺物から 10 世紀前半と考えられる。

H-7号住居跡(Fig. 9 · 13、PL. 2 · 10)

位置 X208、 $Y123\cdot 124$ 主軸方向 $N-90^{\circ}-E$ 規模 東西軸 (3.80) m、南北軸 (1.86) m、壁現高 0.33 m。調査区中央で検出、部分的な検出に留まっている。 面積 (12.27) m 床面 平坦な床面で、検出範囲の全面に硬化が見られる。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社 砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 $D-10\cdot 11$ 、P-2と重複し、新旧関係は本遺構 $D-10\cdot 11$ 、D-2である。 出土遺物 土師器高坏 $D-10\cdot 11$ 0・短頸壺 $D-10\cdot 11$ 0・短子 $D-10\cdot 11$ 0・短子 $D-10\cdot 11$ 0・短頸壺 $D-10\cdot 11$ 0・短子 $D-10\cdot 11$ 0・回列 $D-10\cdot 11$ 0・短子 $D-10\cdot 11$ 0・回列 $D-10\cdot 11$ 0・回列

H-8号住居跡(Fig. 9、PL. 2)

位置 X197・198、Y124・125 主軸方向 N-81°-E 規模 東西軸 (2.57) m、南北軸 (3.46) m、壁現高 0.23 m。調査区西端で検出した。住居隅の検出および重複等で全容は把握できず。 面積 (2.00) ㎡ 床面 平坦 な床面で、検出範囲の全面に硬化が見られる。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 1 基検 出された。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 W-1と重複し、新旧関係は本遺構→W-1である。 出土遺物 覆土から陶磁器片等が出土しているが、直接の時期を示すものではない。 時期 重複関係および他遺構との関連から 10 世紀代と考えられる。

(2) 溝跡

W-1号溝跡(Fig.10、PL. 2)

(3) 井戸跡・土坑・ピット(Fig. 8~11・13、PL. 2・10)

本調査区では井戸跡 2 基、土坑 19 基、ピット 27 基を確認している。重複関係や出土遺物等から、いずれも中世以後の遺構になるものと考えられる。

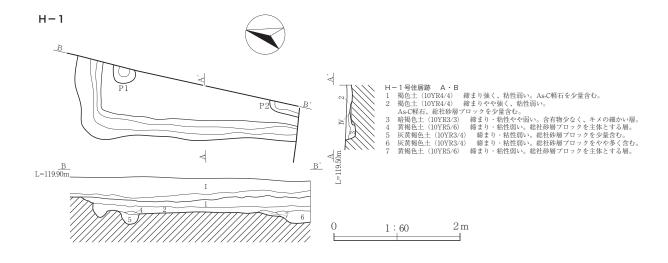
各計測値については「Tab. 2 1区井戸跡・土坑・ピット計測表」を参照のこと。

Tab. 2 1区井戸跡・土坑・ピット計測表

1 ab. 2	1 区开戸跡・工を					I	I	I
遺構名	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ(m)	平面形状	重複(古→新)	出土遺物	備考
I - 1	X 212, Y 120 · 121	0.87	0.78	(1.00)	円形		土 12、須 4	
I - 2	X 205、Y 124	(1.07)	(0.34)	(0.68)	(方形)		銭 1	
D - 1	X 212, Y 127 · 128	1.40	1.24	0.34	円形	$D-2 \rightarrow D-1$	土2、須1	
D - 2	X 211、Y 127	0.86	(0.79)	0.32	(不整形)			
D - 3	X 211 · 212、 Y 125	1.44	1.30	0.40	円形		土2、須2、陶1	
D - 4	X 209 · 210, Y 124 · 125	1.31	(1.08)	0.53	(方形)		須3、土2	
D - 5	X 209、Y 123·124	2.04	1.25	0.43	長方形	D - 6 → D - 5	土2、須1、陶1	
D - 6	X 209、Y 124	0.71	0.70	0.55	円形	D - 6 → D - 5		
D - 7	X 198、Y 124·125	(1.69)	1.06	0.38	長方形	$D - 8 \rightarrow D - 7 \rightarrow D - 12$		
D - 8	X 198 · 199、 Y 125	2.11	0.88	0.50	長方形	$D - 8 \rightarrow D - 7 \rightarrow D - 12$	土2	
D - 9	X 198 · 199、 Y 125	1.20	0.87	0.26	長方形		土2、陶磁1	
D - 10	X 208、Y 123·124	1.24	0.79	0.26	長方形	H − 7 → D − 10		
D - 11	X 208、Y 124	1.23	(0.98)	0.71	(長方形)	H − 7 → D − 11		
D - 12	X 198、Y 124 · 125	0.70	(0.38)	0.24	(長方形)	$D - 8 \rightarrow D - 7 \rightarrow D - 12$		
D - 13	X 197、Y 125	0.57	0.46	0.17	楕円形	D - 14 → D - 13		
D - 14	X 197 · 198、 Y 125	0.80	(0.65)	0.21	(長方形)	D - 14 →W - 1		
D - 15	X 206、Y 124	(0.48)	(0.24)	0.40	(長方形)			
D - 16	X 205 · 206、 Y 124	1.53	(1.03)	0.23	(長方形)			
D - 17	X 206、Y 124	(1.04)	(0.29)	0.28	(長方形)			
D - 18	X 204、Y 124	1.24	0.84	0.29	不整楕円形	P - 20 → D - 18	土1	
D - 19	X 204 · 205、 Y 124	1.03	0.80	0.34	長方形			
P - 1	X 212、Y 126	0.39	0.35	0.10	楕円形			
P - 2	X 208、Y 124	0.59	0.58	0.57	方形	$H-7 \rightarrow P-2$		
P - 3	X 198、Y 125	0.51	0.40	0.50	楕円形			
P - 4	X 198、Y 125	0.22	0.21	0.13	方形			
P - 5	X 198、Y 125	0.29	0.27	0.30	方形	P - 6 → P - 5		
P - 6	X 198、Y 125	0.30	0.29	0.22	方形	P - 6 → P - 5		
P - 7	X 199、Y 125	0.31	0.27	0.46	方形			
P - 8	X 200、Y 125	0.29	0.26	0.73	方形			
P - 9	X 204、Y 124	0.34	0.31	0.34	方形			
P - 10	X 204、Y 124 · 125	0.41	(0.37)	0.57	方形	P - 18 → P - 10		
P - 11	X 204、Y 125	0.39	(0.34)	0.45	方形			
P - 12	X 203、Y 125	0.40	(0.29)	0.73	方形	P - 12 → P - 25		
P - 13	X 203 · 204、 Y 124	0.42	0.41	0.46	方形	P - 24 → P - 13		
P - 14	X 203、Y 124	0.51	0.49	0.42	方形		焙烙1	
P - 15	X 203、Y 124	0.47	0.40	0.54	方形			
P - 16	X 203、Y 124	0.44	(0.21)	0.25	方形			
P - 17	X 204、Y 124	0.27	0.22	0.34	方形			
P - 18	X 204、Y 124 · 125	0.26	(0.20)	0.29	方形	P - 18 → P - 10		
P - 19	X 204、Y 124 · 125	0.18	0.14	0.31	方形			
P - 20	X 204、Y 124	0.31	0.31	0.50	方形	P - 20 → D - 18		
P - 21	X 204、Y 124	0.23	0.22	0.24	方形			
P - 22	X 203、Y 124 · 125	0.27	0.23	0.29	方形			
P - 23	X 203、Y 124	0.36	0.14	0.22	方形			
P - 24	X 203、Y 124	0.37	0.36	0.39	方形	P - 24 → P - 13		
P - 25	X 203、Y 124 · 125	0.37	0.31	0.34	方形	P - 12 → P - 25		
P - 26	X 203、Y 124	0.45	0.40	0.58	方形	P - 26 → P - 27		
P - 27	X 203、Y 124	0.29	0.25	0.49	方形	P - 26 → P - 27		



Fig. 6 1区 全体図



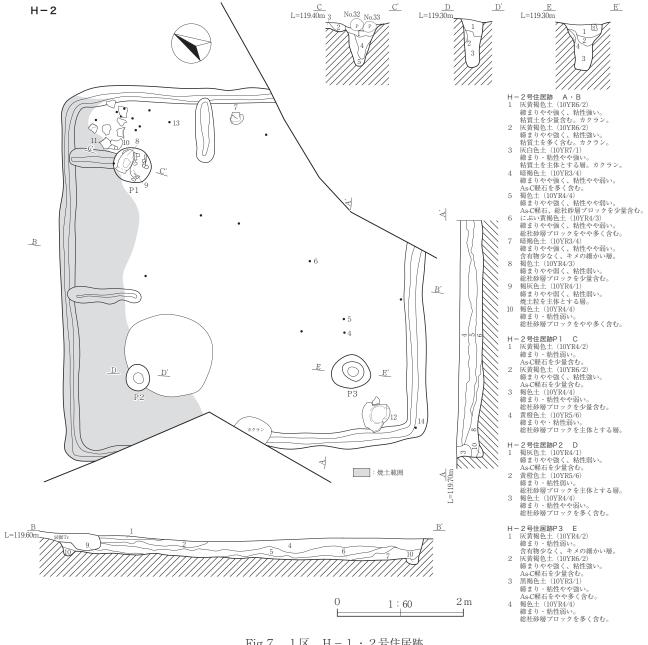


Fig. 7 1区 H-1·2号住居跡

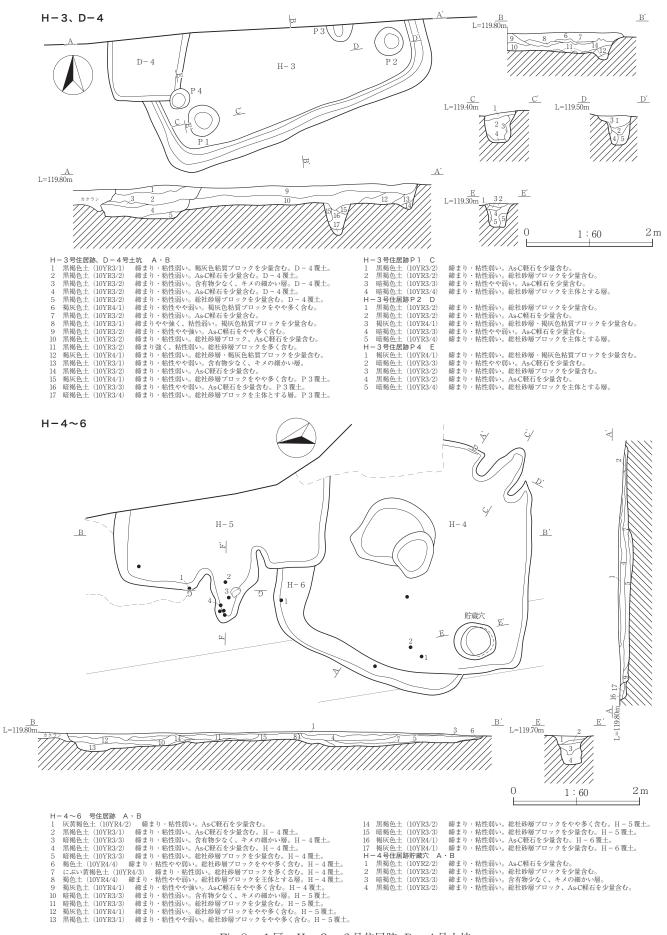
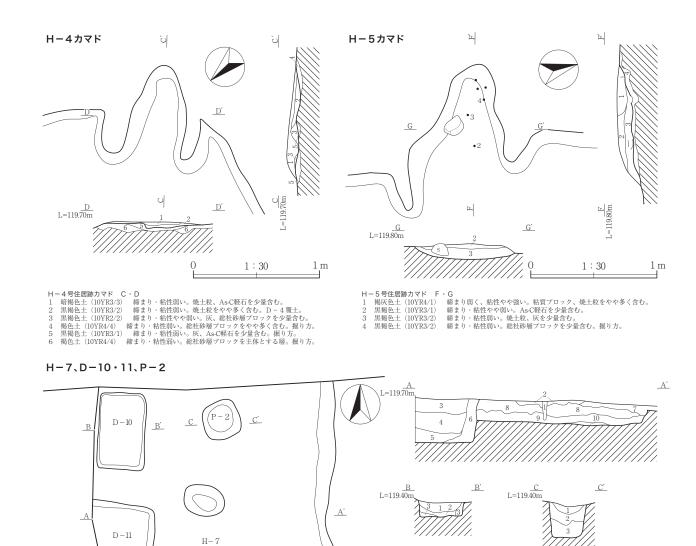


Fig. 8 1 \boxtimes H - 3 \sim 6 号住居跡、D - 4 号土坑





 $2\,\mathrm{m}$

1:60

- D−11号土坑 B
 1 黒褐色土 (10YR3/1) 締まり・粘性やや弱い。総社砂層ブロックを多く含む。
 2 黒褐色土 (10YR4/2) 締まり・粘性弱い。総社砂層ブロックを少量含む。
 3 褐色土 (10YR4/2) 締まり・粘性弱い。総社砂層ブロックをや今冬(含む。
 P−2 C
 1 黒褐色土 (10YR3/2) 締まり・粘性弱い。総土放、AsC軽石を少量含む。
 3 灰黄褐色土 (10YR3/2) 締まり・粘性弱い。総社砂層ブロックをやや多く含む。
 3 灰黄褐色土 (10YR4/2) 締まり・粘性砂い。総社砂層ブロックをや多く含む。

H-8

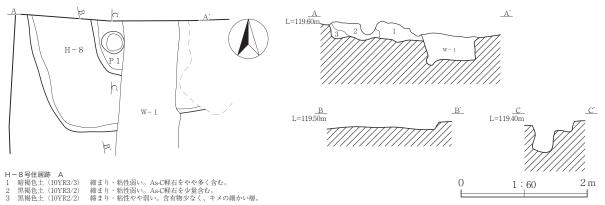


Fig. 9 1区 H-4・5号住居跡カマド、H-7・8号住居跡、D-10・11号土坑、P-2号ピット

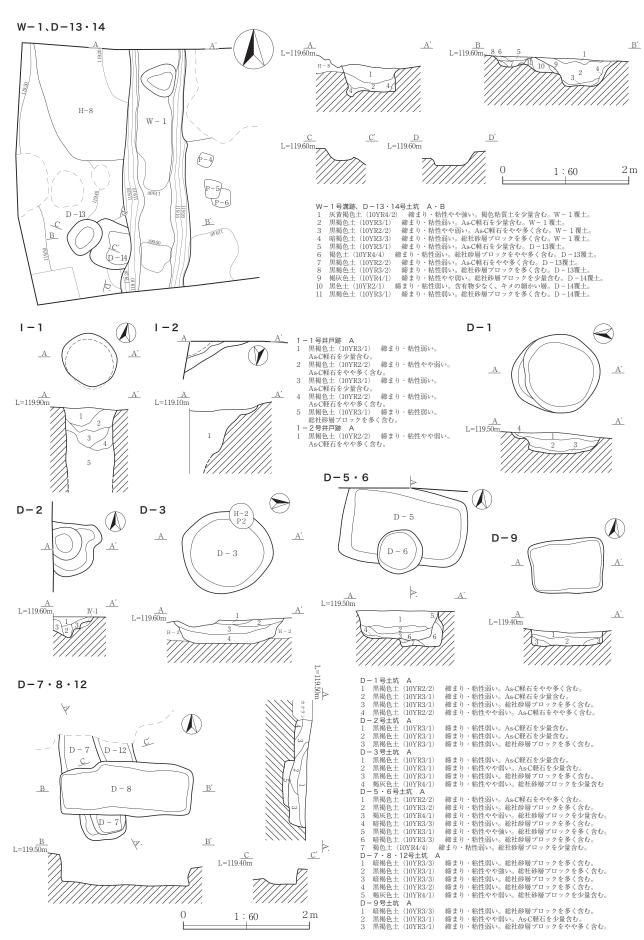


Fig.10 1区 W-1号溝跡、井戸跡、土坑(1)

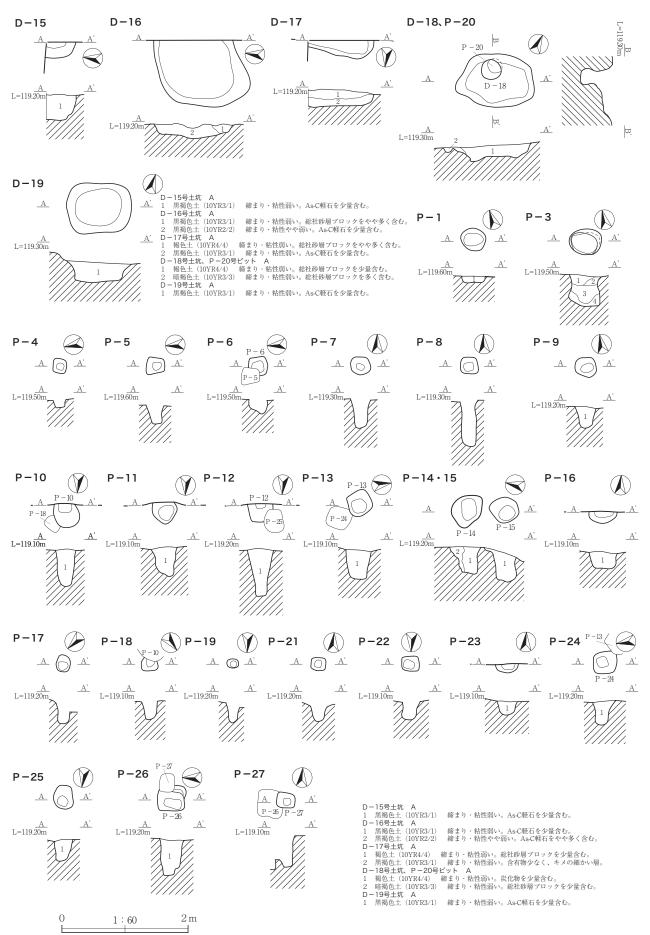
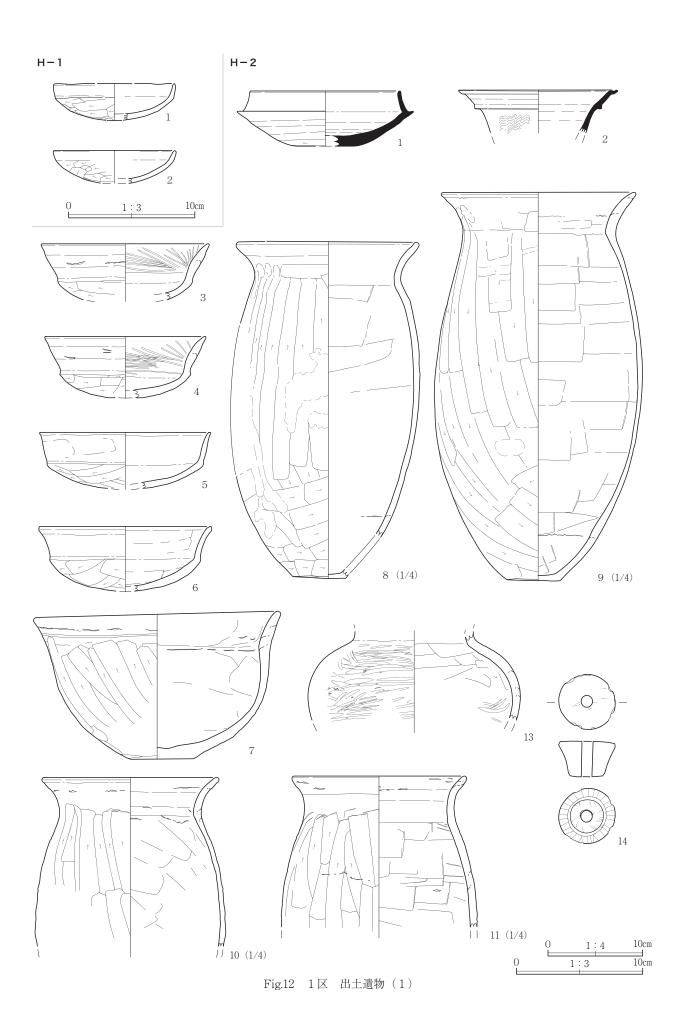


Fig.11 1区 土坑 (2)、ピット



- 18 -

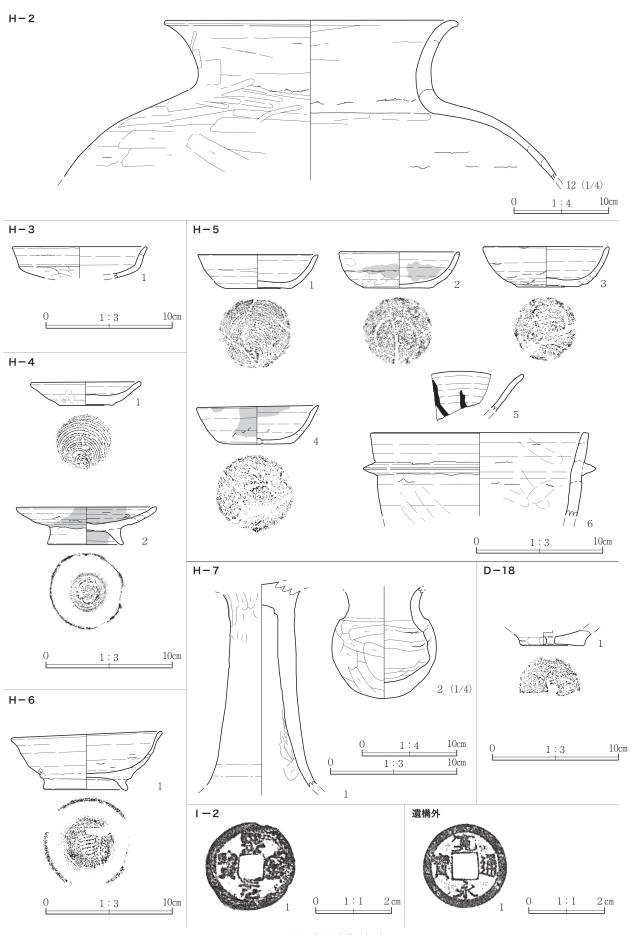


Fig.13 1区 出土遺物 (2)

Tab. 3 1区出土遺物観察表

1 H-2覆土

日本

寛永 13 年(1636 年)

,, U 1	. 四山上思	沙氏示	12								
1								I			
出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調			寺徴	残存状況・備考
覆土	土師器 坏	[9.6]	_	(2.9)	2.9) 黒色粒、雲母		橙	内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。		口縁部片。	
覆土	土師器 坏	(9.8)	_	(2.6)	黒色粒、雲母	良好	橙	外面口縁部ヨコナデ、体部へ 内面口縁部ヨコナデ、体部ナ	ラケズリ。 ゔ。		口縁部片。
2				1							
出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調			寺徴 	残存状況・備考
覆土	須恵器 坏	(11.8)	(4.1)	4.4	石英、長石	堅緻	褐灰	内面口縁部ヨコナデ、体部回転	Kナデ。		1/4 残存。
覆土	須恵器 疎	[12.8]	_	(3.3)	石英	堅緻	褐灰	内面ロクロナデ。			口縁部片。
No. 27	土師器 坏	[13.1]	_	(4.6)	白色粒	良好	橙	外面口縁部ヨコナデ、体部へ 内面口縁部ヨコナデ、ヘラミ	ラケズリ。 ブキ、体部ナデ。		口禄部片。
No. 28	土師器 坏	[12.6]	_	(4.8)	白色粒	良好	橙	外面口縁部ヨコナデ、体部へ 内面口縁部ヨコナデ、ヘラミ	ラケズリ。 ブキ、体部ナデ。		口縁部片。
覆土	土師器 坏	(13.4)	_	(4.5)	石英	良好	にぶい黄橙	外面口縁部ヨコナデ、体部へ 内面摩滅、調整不鮮明。	ラケズリ。		1/4 残存。
No. 24	土師器 坏	[13.5]	_	(5.2)	白色粒	良好	橙	外面口縁部ヨコナデ、体部へ 内面口縁部ヨコナデ、体部ナ	ラケズリ。 デ。		1/4 残存。
No. 2	土師器 鉢	[19.6]	5.6	11.1	石英、雲母	良好	橙	外面口縁部ヨコナデ、体部へ 内面口縁部ヨコナデ、体部へ	ラケズリ。 ラナデ。		2/3 残存。
No. 32	土師器 甕	19.4	5.5	35.8	白色粒	良好	橙	外面口縁部ヨコナデ、胴部縦化	で へラケズリ、下半部様	位ヘラケズリ。	ほぼ完存。
No. 33	土師器 亹	22.0	5.7	41.3	石英、雲母	良好	橙				ほぼ完存。
				(17.9)							1/2 残存、胴部下半欠損。
			_							1/3 残存、胴部下半欠損。	
		((2007)							
		31.1						内面口縁部ヨコナデ、胴部ナデか。摩滅により不鮮明。		口縁から胴上部残存。	
		1 47	T/2					内面胴部ヘラケズリ、ナデ、	、ラミガキ。	+44	胴部片。 ■ FA
											残存状況・備考
	仁 製品 初建早	4.6	2.6	0.9	2.8	灰日	33.8	な稜を有して区画される。線刻	りなし。		ほぼ完存。
	種別. 器種	口径	底径	高さ	胎十	焼成	色調	器形. 成・	整形. 文様等の物	寺徴	残存状況・備考
P 1 覆土	土師器 坏	(10.8)	7	(2.4)	雲母	良好	橙			3	口禄部片。
4								内面口縁命ココナケ、以下ユロ	-770		
出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・	整形、文様等の特	寺徴	残存状況・備考
No. 1	須恵器 坏	8.8	4.5	1.8	白色粒	堅緻	灰白	外面口縁部ヨコナデ、以下ロッ 内面口縁部ヨコナデ、以下ロッ	フロナデ成形。底部回転 フロナデ成形。	糸切り。	酸化焰。1/5 残存。
No. 2	須恵器 高台付城	(11.0)	5.8	3.0	白色粒	良好	灰白	外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。底部回転糸切り。 内面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。		酸化焰、3/4 残存。	
5											
出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・	整形、文様等の特	寺徴	残存状況・備考
No. 1	須恵器 坏	(9.6)	5.4	2.8	白色粒	良好	浅黄橙	外面口縁部ヨコナデ、以下ロッ 内面口縁部ヨコナデ、以下ロッ	ワロナデ成形。底部回転 フロナデ成形。	糸切り。	酸化焔。1/2 残存。
No. 3	須恵器 坏	9.6	5.4	2.9	白色粒	良好	浅黄橙	外面口縁部ヨコナデ、以下ロッ 内面口縁部ヨコナデ、以下ロッ	フロナデ成形。底部回転 フロナデ成形。	糸切り。	酸化焰。3/4 残存。
No. 4	須恵器 坏	10.4	5.2	3.2	赤・黒色粒	良好	浅黄橙	外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。底部回転糸切り。 内面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。		酸化焰。完存。	
No. 5	須恵器 坏	9.6	6.2	3.0	赤色粒、雲母	良好	灰黄褐	外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。底部回転糸切り。 内面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。			
覆土	須恵器 埦							外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。墨書あり。 内面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。			酸化焰。3/4 残存。
		_	_	3.0	白色粒、雲母	良好	にぶい黄橙	内面口縁部ヨコナデー以下ロ	フロナデ成形。墨書あり フロナデ成形。		酸化焔。3/4 残存。 酸化焔。口縁部片。
覆土	羽釜	(22.8)	_	3.0 (7.4)	白色粒、雲母	良好良好	にぶい黄橙 にぶい黄橙	内面口緑部ヨコナデ、以下ロ: 外面口緑部ヨコナデ、以下ロ:	ワーナデ成形。 フロナデ成形。		
覆 ±	羽釜		_					内面口縁部ヨコナデ、以下ロ	ワーナデ成形。 フロナデ成形。		酸化焰。口縁部片。
	羽釜種別、器種		底径					内面口縁部ヨコナデ、以下ログ 外面口縁部ヨコナデ、以下ログ 内面口縁部ヨコナデ、以下ユリ	ワーナデ成形。 フロナデ成形。	0	酸化焰。口緑部片。
6		(22.8)	底径 5.8	(7.4)	白色粒、雲母	良好	にぶい黄橙	内面口縁部ヨコナデ、以下ログ 外面口縁部ヨコナデ、以下ログ 内面口縁部ヨコナデ、以下ユリ	r ロナデ成形。 r ロナデ成形。 ビナデ成形。 整形、文様等の r ロナデ成形。 底部回転	・	酸化缩。口縁部片。 口縁部 1/6 残存。
6 出土位置	種別、器種	[22.8]		(7.4)	白色粒、雲母胎土	良好 焼成	にぶい黄橙色調	内面口縁部ヨコナデ、以下ロッ 外面口縁部ヨコナデ、以下ロ 内面口縁部ヨコナデ、以下ユ 器形、成・ 外面口縁部ヨコナデ、以下ユ	r ロナデ成形。 r ロナデ成形。 ビナデ成形。 整形、文様等の r ロナデ成形。 底部回転	・	酸化協。口縁部片。 口縁部 1/6 残存。 残存状況・備考
6 出土位置 Na.1	種別、器種	[22.8]		(7.4)	白色粒、雲母胎土	良好 焼成	にぶい黄橙色調	内面口縁部ヨコナデ、以下ロ 外面口縁部ヨコナデ、以下ロ 内面口縁部ヨコナデ、以下ユ ・ 発配し縁部ヨコナデ、以下ロ 内面口縁部ヨコナデ、以下ロ 内面口縁部ヨコナデ、以下ロ 内面口縁部ヨコナデ、以下ロ	マロナデ成形。 ロコナデ成形。 ナイデ成形。 サデ成形。 整形、文様等の キャデ成形。 成部回転 フロナデ成形。 成部回転 フロナデ成形。 変形 アロナデ成形。 が発	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	酸化協。口縁部片。 口縁部 1/6 残存。 残存状況・備考
6 出土位置 No.1	種別、器種 第一個	〔22.8〕 口径 12.2	5.8	(7.4) 高さ 4.3	白色粒、雲母 胎土 白色粒	良好 焼成 軟質	にぶい黄橙 色調 灰白	内面口縁部ヨコナデ、以下ロ: 外面口縁部ヨコナデ、以下ロ: 内面口縁部ヨコナデ、以下ユ: 器形、成・ 外面口縁部ヨコナデ、以下ロ: 内面口縁部ヨコナデ、以下ロ: 器形、成・ 外面上総のラケマリ後ユビナ 内面しばり裏明瞭、裾部にへ:	ロナデ成形。 ロナデ成形。 ビナデ成形。 整形、文様等の ロナデ成形。 底部回転 ロナデ成形。 整形、文様等の ロナデ成形。 である。 である。 である。 である。 である。 である。	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	酸化缩。口禄部片。 口禄部 1/6 残存。 残存状况·備考 酸化缩、3/4 残存。
6 出土位置 No.1 7 出土位置	種別、器種 第一次	〔22.8〕 口径 12.2	5.8	(7.4) 高さ 4.3	白色粒、雲母 胎土 白色粒	良好 焼成 軟質	にぶい黄橙 色調 灰白	内面口縁部ヨコナデ、以下ロ: 外面口縁部ヨコナデ、以下ロ: 内面口縁部ヨコナデ、以下ロ: 器形、成・ 外面口縁部ヨコナデ、以下ロ: 内面口縁部ヨコナデ、以下ロ: 器形、成・ 外面上部のラケスリ後エビナ	ロナデ成形。 ロナデ成形。 ビナデ成形。 整形、文様等の ロナデ成形。 底部回転 ロナデ成形。 整形、文様等の ロナデ成形。 である。 である。 である。 である。 である。 である。	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	酸化協。口縁部片。 口縁部 1/6 残存。 残存状況・備考 酸化協、3/4 残存。
6 出土位置 No.1 7 出土位置 度土 程土	種別、器種 須恵器 高台付境 種別、器種 土師器 高坏	〔22.8〕 口径 12.2	5.8	高さ 4.3 高さ (16.1)	白色粒、雲母 胎土 白色粒 胎土 石类、雲母	良好 焼成 軟質 焼成	にぶい黄橙色調灰白色調黄橙	内面口縁部ヨコナデ、以下ロ、 外面口縁部ヨコナデ、以下ロ、 内面口縁部ヨコナデ、以下ロ、 内面口縁部ヨコナデ、以下ロ、 内面口縁部ヨコナデ、以下ロ、 内面口縁部ヨコナデ、以下ロ 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、	ロナデ成形。 ロナデ成形。 ビナデ成形。 整形、文様等の ロナデ成形。 底部回転 ロナデ成形。 整形、文様等の ロナデ成形。 である。 である。 である。 である。 である。 である。	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	酸化協。口縁部片。 口縁部 1/6 残存。 残存状況・備考 酸化協、3/4 残存。 残存状況・備考 関部片。
6 出土位置 No.1 7 出土位置 覆土	種別、器種 須恵器 高台付境 種別、器種 土師器 高坏	(22.8) □径 12.2 □径 - -	5.8	高さ 4.3 高さ (16.1)	白色粒、雲母 胎土 白色粒 胎土 石类、雲母	良好 焼成 軟質 焼成	にぶい黄橙色調灰白色調黄橙	内面口縁部ヨコナデ、以下ロ、 外面口縁部ヨコナデ、以下ロ、 内面口縁部ヨコナデ、以下ロ、 内面口縁部ヨコナデ、以下ロ、 内面口縁部ヨコナデ、以下ロ の面口縁部ヨコナデ、以下ロ というない。 発施しまで、 外面上部へラケスリ、後エピナ の面上ピリ東明線、報館に、 外面が、相解に、 外面が、相解に、 外面が、 外面エピナデ。	ロナデ成形。 ロナデ成形。 ビナデ成形。 整形、文様等の ロナデ成形。 底部回転 ロナデ成形。 整形、文様等の ロナデ成形。 である。 である。 である。 である。 である。 である。	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	酸化協。口縁部片。 口縁部 1/6 残存。 残存状況・備考 酸化協、3/4 残存。 残存状況・備考 関部片。
6 出土位置 No.1 7 出土位置 覆土 程土 2 出土位置	種別、器種 須恵器 高台付境 種別、器種 土師器 高坏 土師器 要	「228」 「122 「122 「122 「122 「122 「122 「122 「123 「12	底径 — —	(74) 高さ 4.3 高さ (16.1) (11.8)	白色粒、雲母 胎士 白色粒 胎士 石灰、雲母	良好 焼成 軟質 焼成 良好 良好	にぶい黄橙色調灰白佐調黄橙黄橙	内面口縁部ヨコナデ、以下ロ、 外面口縁部ヨコナデ、以下ユ・ 一般の一般部ヨコナデ、以下ユ・ ・ 以下ロ・ ・ 以下ロ・ ・ 以下ロ・ ・ 以下ロ・ ・ 以下ロ・ ・ との一般部ヨコナデ、以下ロ・ ・ との一般部ヨコナデ、以下ロ・ ・ との一般の一般の一般の一般の一般の一般の一般の一般の一般の一般の一般の一般の一般の	ロナデ成形。 ロナデ成形。 ナデ成形。 ナデ成形。 整形、文様等の ロナデ成形。 底部回転 ロサデ成形。 整形、文様等の なのである。 なが、文様等の ない。 なが、文様等の ない。 なが、スポーツを ない。 ない、スポーツを ない、ス	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	酸化幅。口禄部片。 口禄部 1/6 残存。 残存状况·備考 酸化幅、3/4 残存。 残存状况·備考 脚部片。 1/2 残存、口禄部欠捐。
6 出土位置 No 1 7 出土位置 度土 度土 2 出土位置	種別、器種 須恵器 高台付塊 種別、器種 土師器 高坏 土師器 売 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	「228」 「122 「122 「122 「122 「123 「12	58 底径 一 一	(7.4) 高さ 4.3 高さ (16.1) (11.8)	自色粒、雲母 胎土 白色粒 胎土 石类、雲母 石类、雲母 花元年(960年)	度好 焼成 軟質 焼成 食好 良好 財質 別	にぶい黄橙色調灰白佐調黄橙直径23.61 r	内面口縁部ヨコナデ、以下ロ、外面口縁部ヨコナデ、以下ロ、内面口縁部ヨコナデ、以下ロ、内面口縁部ヨコナデ、以下ロ、内面口縁部ヨコナデ、以下ロ、内面口縁部ヨコナデ、以下ロ・カ面上部へラケズリ後エピナの面しばり東町隊、搭部にヘ・ク両頭部ヨコナデ、脚部ヘラク両コエピナデ。 李 第径 m 614mm	ロナテ成形。 ロナテ成形。 ロナテ成形。 オーデ成形。 整形、文様等の ロナテ成形。 底部回転 ロナテ成形。 広部回転 ロナテ成形。 広部回転 ロナテ成形。 京都回転 ロナテ成形。 京都回転 ロナテ成形。 143mm	· 特徵 · 赤切り。	酸化烯。口禄部片。 口禄部 1/6 残存。
6 出土位置 No.1 7 出土位置 渡土 度土 18 出土位置	種別、器種 和思認 高台付換 種別、器種 土師器 高坏 土師器 東 銭種名 宋通元賞	[228] 口径 122 口径 一 - - - - - - - - -	5.8 底径	(7.4) 高さ 4.3 高さ (16.1) (11.8)	白色粒、雲母 胎土 白色粒 胎土 石灰、雲母 石灰、雲母 初 請年代 進元年(960年)	度好 焼成 軟質 焼成 良好 良好	にぶい黄橙色調英セ黄橙五名1 r企調企調	内面口縁部ヨコナデ、以下ロ、 外面口縁部ヨコナデ、以下ロ、 内面口縁部ヨコナデ、以下ロ、 内面口縁部ヨコナデ、以下ロ、 内面口縁部ヨコナデ、以下ロ の面しはりまずい。 外面上はりまずい。 大型ではいますが、 大型では、 大型では、 大型では、 大型では、 大型では、 大型では、 大型では、 大型では、 大型では、 大型では、 大型では、 大型では、 大型では、 大型では、 大型では、 大型では、 大型を 大型を 大型を 大型を 大型を たる たる たる たる たる たる たる たる たる たる たる たる たる	ロナデ成形。 ロナデ成形。 ナデ成形。 ナデ成形。 整形、文様等の料 ロナデ成形。 整形、文様等の料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	· 特徵 · 赤切り。	酸化幅。口縁部片。 口縁部 1/6 残存。 残存状況・備考 酸化幅、3/4 残存。 残存状況・備考 脚部片。 1/2 残存、口縁部欠損。 残存状況・備考 完存状況・備考 完存状況・備考 完存状況・備考
6 出土位置 No 1 7 出土位置 度土 度土 2 出土位置	種別、器種 須恵器 高台付塊 種別、器種 土師器 高坏 土師器 売 ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	「228」 「122 「122 「122 「122 「123 「12	58 底径 一 一	(7.4) 高さ 4.3 高さ (16.1) (11.8)	自色粒、雲母 胎土 白色粒 胎土 石类、雲母 石类、雲母 花元年(960年)	度好 焼成 軟質 焼成 食好 良好 財質 別	にぶい黄橙色調灰白佐調黄橙直径23.61 r	内面口縁部ヨコナデ、以下ロ、 外面口縁部ヨコナデ、以下ロ、 内面口縁部ヨコナデ、以下ロ、 内面口縁部ヨコナデ、以下ロ、 内面口縁部ヨコナデ、以下ロ、 内面口縁部ヨコナデ、以下ロ、 という。 という。 という。 という。 という。 という。 という。 という。	ロナテ成形。 ロナテ成形。 ロナテ成形。 オーデ成形。 整形、文様等の ロナテ成形。 底部回転 ロナテ成形。 広部回転 ロナテ成形。 広部回転 ロナテ成形。 京都回転 ロナテ成形。 京都回転 ロナテ成形。 143mm	· 特徵 · 赤切り。	酸化烯。口禄部片。 口禄部 1/6 残存。 残存状况·備考 酸化烯、3/4 残存。 残存状况·備考 即部片。 1/2 残存、口禄部欠相。 残存状况·備考 完存。
	1 出土位置 関土 関土 関土 関土 Na 27 Na 28 関土 Na 24 Na 24 Na 32 Na 13 Na 14 Na 30 Na 13 Na 14 Na 30 Na 13 H土位置 Na 31 B土位置 P 1 関土 4 出土位置 Na 2 Na 2 Na 3 Na 13 Na 14 Na 3 Na 14 Na 16 Na N	1 出土位置 種別、器種	1 出土位置 種別、器種 口径	1 出土位置 種別、器種 □径 底径	出土位置 種別、器種 口径 底径 高さ 度土 土師器 坏 (96) - (29) 度土 土師器 坏 (98) - (26) 2 出土位置 種別、器種 口径 底径 高さ 高さ 度土 須惠器 环 (118) (41) 44 度土 須惠器 环 (128) - (33) Na 27 土師器 环 (131) - (46) Na 28 土師器 环 (134) - (45) Na 24 土師器 环 (134) - (45) Na 24 土師器 环 (134) - (45) Na 2 土師器 环 (134) - (45) Na 3 土師器 殊 (196) 56 11.1 Na 32 土師器 発 (196) 56 11.1 Na 13 土師器 要 (182) - (179) Na 13 土師器 要 (182) - (167) Na 3 土師器 要 (180) - (167)	出土位置 種別、器種 口径 底径 高さ 胎土 東土 土崎器 坏 (9.6)	田土位置 種別、器種 口径 底径 高さ 胎土 焼成 度土 土師器 环 (9.6) - (2.9) 黒色紋、雲母 良好 良好 世上位置 種別、器種 口径 底径 高さ 胎土 焼成 産土 知郷器 环 (11.8) (4.1) 4.4 石灰、長石 医級 産品 は 知恵器 环 (11.8) (4.1) 4.4 石灰、長石 医級 産土 知恵器 环 (11.8) (4.1) - (4.6) 自色粒 良好 良好 上師器 环 (13.1) - (4.6) 自色粒 良好 良好 人名之 土師器 环 (13.4) - (4.5) 石灰 良好 良好 人名之 土師器 环 (13.5) - (5.2) 自色粒 良好 人名之 土師器 來 (19.6) 5.6 11.1 石灰、雲母 良好 人名之 土師器 來 (19.6) 5.6 11.1 石灰、雲母 良好 人名之 土師器 変 (18.2) - (17.9) 石灰、雲母 良好 人名 土師器 変 (18.2) - (17.9) 石灰、雲母 良好 人名 土師器 変 (18.2) - (17.9) 石灰、雲母 良好 人名 土師器 変 (18.0) - (16.7) 石灰、雲母 良好 人名 土師器 変 一 - (8.7) 雲母 良好 人名 土師器 夜 一 - (8.7) 雲母 良好 人名 土師器 存 (10.8) - (2.4) 雲母 大谷 色調 入る 石灰 色調 本屋 大谷 大名	出土位置 種別、器種	### 出土位置 様別、器種 口径 底径 高さ 胎土 焼成 色調 発部に凝・ 次値に対する。	世土位置 極別、器種 口径 底径 高さ 胎土 焼成 色調 器形、成・整形、文様等の計画士 上部高 环 (9.6) - (2.9) 馬色泉、素母 自称 (2.6) 馬色泉、素母 (2.6) 馬色泉 (2.6) 馬色泉、素母 (2.6) 馬色泉 (2.6) 馬島泉 (2.	世土位置 種別、器種 口径 底径 高さ 出土 規元 色形 一 200 日本日

22.41mm

5.77mm

1.36mm

完存。

2 2区

(1) 竪穴住居跡

H-1号住居跡 (Fig.15 · 25、PL. 3 · 10)

位置 X110・111、Y199・200 主軸方向 N - 105°-E 規模 東西軸 4.13 m、南北軸(2.96)m、壁現高 0.34 m。住居北半は調査区外となる。最終段階で As-B 軽石により埋没しているが床面直上に暗褐色土が堆積していることから As-B 軽石段階には住居は廃絶していたと考えられる。 面積 (10.20)㎡ 床面 平坦で、全面的に硬化する。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 先行する遺構を掘り込んで床面とする。 重複 $H-28\cdot 29\cdot 30\cdot 31\cdot 36$ 、W-4、P-2と重複し、本遺構が後出する。出土遺物 覆土から出土した須恵器埦(1)、羽釜(2)、軒平瓦(3)を図示。 時期 出土遺物および覆土から 11 世紀後半と考えられる。

H-2号住居跡(Fig.15、PL. 3)

位置 X107、Y200 主軸方向 N - 89°-E 規模 東西軸 (0.83) m、南北軸 (3.50) m、壁現高 0.28 m。調査区東端での検出で、大半は調査区外となる。 面積 (1.60) m 床面 検出したのは住居隅であり、床面の硬化は認められず。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 $H-4\cdot 24$ と重複し、新旧関係は $H-24\rightarrow H-4\rightarrow$ 本遺構である。 出土遺物 なし。 時期 重複関係から 10 世紀代と考えられる。

H-3号住居跡(Fig.15、PL. 3)

位置 X113、Y200・201 主軸方向 N -89° - E 規模 東西軸 2.82 m、南北軸 (2.83) m、壁現高 0.56 m。住居北半の検出である。 面積 (6.70) ㎡ 床面 全面的に硬化している。 カマド 検出されず。 貯蔵穴検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 H-5・6・22・26と重複し、新旧関係はH-6→本遺構→H-5・26 → H-22 である。 出土遺物 酸化焔の須恵器 境、土師器坏・甕、羽釜、平瓦等が出土しているが、いずれも小破片のため図示に至らず。 時期 重複関係や出土遺物から 10 世紀後半から 11 世紀初頭と考えられる。

H-4号住居跡(Fig.15·25、PL. 4·10)

位置 X107・108、Y200・201 主軸方向 N-89°-E 規模 東西軸 (3.07) m、南北軸 (3.86) m、壁現高 0.56 m。住居北東隅に 0.73 mの張り出し部を持ち、住居内ととに周溝が巡る。 面積 (11.16) ㎡ 床面 カマド 前から住居中央にかけて硬化する。 カマド 東壁に 1 基検出したが、南半は調査区外となる。確認長 0.88 m、燃焼部幅 (0.18) m、袖の残存長は左 (北) が 0.31 mを測る。煙道は壁外に 0.30 m突出している。 貯蔵穴検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 H-2・24・25、W-3と重複し、新旧関係はH-24→本遺構→H-2・25、W-3である。 出土遺物 須恵器坏・甕、土師器坏・甕が出土しており、床面直上から出土した土師器坏(1)を図示。 時期 重複関係や出土遺物から 8 世紀中頃と考えられる。

H-5号住居跡(Fig.16、PL. 4)

位置 X112・113、Y199・200 主軸方向 N - 84° - E 規模 東西 2.78 m、南北軸 (1.73) m、壁現高 0.32 m。住居北東隅は調査区外となる。 面積 (4.13) ㎡ 床面 平坦であるが、全面的に硬化は弱い。 カマド 東壁南寄りに1 基検出した。確認長 0.56 m、燃焼部幅 0.39 m、袖の残存長は左(北)が 0.22 m、右(南)が 0.17 mを測る。煙道は壁外に 0.25 m突出している。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社 砂層を掘り込みむ、地山硬化床。部分的に暗褐色土により構築されている。 重複 $H-3\cdot6$ と重複し、新旧 関係は $H-6\to H-3\to \pi$ 遺構である。 出土遺物 覆土およびカマドから須恵器甕、平瓦等が出土している

が、いずれも小破片のため図示に至らず。 時期 重複関係や出土遺物から10世紀後半と考えられる。

H-6号住居跡(Fig.16·25、PL.4·10)

位置 X112・113、Y199~201 主軸方向 N - 90°-E 規模 東西軸 (3.63) m、南北軸 (4.21) m、壁現高 0.28 m。住居西半の検出である。 面積 (10.37) m 床面 全面的に硬化している。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする地山硬化床で、部分的 に暗褐色土により構築されている。掘り方と考えられる凹凸が確認された。 重複 H - 3・5と重複し、新旧 関係は本遺構 \rightarrow H - 3 である。 出土遺物 覆土中から灰釉陶器碗(1)が出土している。 時期 重複関係や出土遺物から 10 世紀前半から中頃と考えられる。

H-7号住居跡(Fig.16·26、PL. 4·10)

位置 X115~117、Y199・200 主軸方向 N - 120°-E 規模 東西軸 3.50 m、南北軸 (3.85) m、壁現高 0.26 m。住居北半は調査区外となる。 面積 (7.18) ㎡ 床面 平坦な床面で、カマド前を中心として全面的に硬化する。 カマド 東壁南寄りに1 基検出した。確認長 0.60 m、燃焼部幅 0.16 m、袖の残存長は左(北)が 0.30 mを測り、右袖は残存せず。煙道は壁外に 0.27 m突出している。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 H - 12 と重複し、新旧関係は H - 12 →本 遺構である。 出土遺物 床面直上から酸化焔の須恵器塊(1・2)・高台付塊(3・4)、カマド覆土から軒平瓦(5)が出土している。 時期 重複関係や出土遺物から 10 世紀中頃と考えられる。

H-8号住居跡(Fig.17、PL.4)

位置 X119・120、Y196・197 主軸方向 N − 82° − E 規模 東西軸 (2.08) m、南北軸 2.80 m、壁現高 0.10 m。調査区北側で検出し、住居東半は調査区外となる。上部の削平が強く、非常に浅い住居となっている。 面積 (4.87) m 床面 全体的に平坦で、住居中央に硬化面が認められる。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 P − 1 と重複し、新旧関係は本遺構→P − 1 である。 出土遺物 覆土中より酸化焔の須恵器埦等が出土しているが、小破片のため図示に至らず。 時期 出土遺物から 10 世紀代と考えられる。

H-9号住居跡(Fig.17·26、PL. 4·10)

位置 X119・120、Y197~199 主軸方向 N-114°-E 規模 東西軸(4.02) m、南北軸3.79 m、壁現高0.22 m。住居中央の検出である。 面積 (10.39) m 床面 全体的に平坦で、部分的に硬化面が認められる。 カマド 検出されず。住居東側に硬化が強く、カクラン部にカマドがあったものと考えられる。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込みむ、地山硬化床。部分的に暗褐色土により構築されている。 重複 なし。 出土遺物 酸化焔の須恵器高台付埦、羽釜、土釜等が出土している。 (1) は床面直上から出土した平瓦で凸面にヘラ記号「×」が見られ、 (2) は覆土中から出土した丸瓦で凸面にヘラ文字が認められるが欠損により判読不能である。 時期 出土遺物から10世紀後半と考えられる。

H-10号住居跡(Fig.17·26、PL. 4·11)

位置 X119、Y199・200 主軸方向 N-115°-E 規模 東西軸 2.61 m、南北軸 2.85 m、壁現高 0.16 m。面積 6.28 ㎡ 床面 全面的に硬化しており、カマド前から中央にかけて特に顕著である。 カマド 東壁南寄りに1 基検出した。確認長 0.57 m、燃焼部幅 0.47 m、袖の残存長は左(北)が 0.22 mを測り、右袖は残存せず。煙道は壁外に 0.36 m突出している。中央に安山岩製の支脚が残存する。 貯蔵穴 長軸 0.49 m、短軸 0.41 m、深さ 0.17 mを測る平面楕円形の貯蔵穴が住居南西隅に 1 基検出された。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 なし。 出土遺物 酸化焔の須恵器境(1~3)・高台付境(4・5)、羽釜(6)、凸面にヘラ文字と押印「當」のある平瓦(7)が出土している。 時期 出土遺物から 10 世紀中頃と考えられる。

H-11号住居跡(Fig.18·26、PL. 5·11)

位置 X119、Y195・196 主軸方向 $N-72^\circ-E$ 規模 東西軸 (1.91) m、南北軸 3.38 m、壁現高 0.57 m。住居東半の検出である。 面積 (3.44) ㎡ 床面 全面的に硬化しており、カマド前が最も硬化が強くなっている。 カマド 東壁南寄りに1基検出した。確認長 0.91 m、燃焼部幅 0.33 m、袖の残存長は右(南)が 0.33 m、を測り、左袖は残存せず。煙道は壁外に 0.51 m突出している。上部は後出する D-1 により削平される。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 D-1 と重複し、新旧関係は本遺構 $\rightarrow D-1$ である。 出土遺物 床面直上から出土した土師器坏($1\sim3$)を図示。 時期 出土遺物から 7 世紀末から 8 世紀初頭と考えられる。

H-12号住居跡(Fig.18·26·27、PL. 5·11)

位置 X117・118、Y199~201 主軸方向 N - 84°-E 規模 東西軸 3.94 m、南北軸(5.17)m、壁現高 0.51 m。住居北隅は調査区外となる。 面積 (17.42)㎡ 床面 カマド前を中心として、全面的に硬化する。西・南壁には周溝が巡る。 カマド 東壁南寄りに 1 基検出した。確認長 1.56 m、燃焼部幅 0.67 m、袖の残存長は左(北)が 0.71 m、右(南)が 0.63 mを測る。煙道は壁外に 0.63 m突出している。残存状態は良好であり、両袖ともに凝灰岩質砂岩を構築材として使用、同質の支脚も残存する。焚口には袖に掛けていたと思われる凝灰岩質砂岩が崩落していた。 貯蔵穴 長軸 0.70 m、短軸 0.62 m、深さ 0.25 mを測る、平面隅丸方形の貯蔵穴が住居南東隅で検出された。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 $H-7\cdot23$ と重複し、新旧関係は本遺構→ $H-7\cdot23$ である。 出土遺物 須恵器蓋(1)・瓶類の底部(2)、土師器坏(3~7)・甕(8~10)、石製品の紡錘車(11)が出土している。 時期 重複関係や出土遺物から8世紀前半と考えられる。

H-13号住居跡 (Fig.19·27、PL.5·11)

位置 X117・118、Y201・202 主軸方向 N - 92°-E 規模 東西軸 3.96 m、南北軸 4.15 m、壁現高 0.28 m。住居南西隅は調査区外となる。 面積 (9.57) ㎡ 床面 カマド前を中心として、全面的に硬化する。 カマド 東壁南寄りに1 基検出した。確認長 1.56 m、燃焼部幅 0.43 m、煙道は壁外に 1.44 m突出している。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 なし。出土遺物 酸化焔焼成の須恵器小皿 (1・2)・境 (3~5)が床面直上およびカマドから出土している。 時期 出土遺物から 10 世紀後半と考えられる。

H-14号住居跡(Fig.17、PL.5)

位置 X120、Y201 主軸方向 N-90°-E 規模 東西軸 (0.34) m、南北軸 (2.93) m、壁現高 0.28 m。住居西端の検出であり、大半は調査区外となる。 面積 (5.44) ㎡ 床面 住居隅のためか、硬化は認められず。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 なし。 出土遺物 須恵器境・甕等が出土しているが、小破片のため図示に至らず。 時期 出土遺物から 10 世紀代と考えられる。

H-15号住居跡(Fig.19、PL.5)

位置 X119・120、Y205・206 主軸方向 N-127°-E 規模 東西軸 (3.21) m、南北軸 (3.17) m、壁現高 0.16 m。住居東半は調査区外となる。上部の削平が強く、浅い住居となっている。 面積 (4.27) ㎡ 床面 平坦な床面で、硬化は弱い。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 なし。 出土遺物 覆土から土師器甕の小破片が 1 点 出土しているのみである。 時期 出土遺物が僅少で判然としないが、10 世紀代と考えられる。

H-16号住居跡(Fig.19、PL. 5)

位置 X119、Y205·206 主軸方向 N-120°-E 規模 東西軸 2.15 m、南北軸 (3.03) m、壁現高 0.11 m。

住居南東隅は調査区外となる。上部の削平が強く、浅い住居となっている。 面積 (4.27) ㎡ 床面 平坦な 床面で、硬化は弱い。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 なし。 出土遺物 覆土から須恵器甕、土師器甕の小破片が 1点ずつ出土しているのみである。 時期 出土遺物が僅少で判然としないが、10世紀代と考えられる。

H-17号住居跡(Fig.19、PL.5)

位置 X119、Y207・208 主軸方向 N − 134° − E 規模 東西軸 (3.10) m、南北軸 (4.96) m、壁現高 0.37 m。調査区南側での検出である。 面積 (10.15) m 床面 全体的に平坦であり、住居中央を中心に硬化する。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込みむ、地山硬化床。部分的に暗褐色土により構築されている。 重複 W − 1 と重複し、新旧関係は本遺構→W − 1 である。 出土遺物 須恵器甕、平瓦・丸瓦が出土しているが、小破片のため図示に至らず。 時期 出土遺物が僅少で判然としないが、10 世紀代と考えられる。

H-18号住居跡(Fig.20、PL.6)

位置 X119・120、Y202・203 主軸方向 N − 92° − E 規模 東西軸 (1.41) m、南北軸 (1.93) m、壁現高 0.27 m。住居北東隅の検出である。 面積 (2.01) m 床面 全面的に硬化している。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 H − 19 と重複し、新旧関係は本遺構→ H − 19 である。 出土遺物 須恵器境・甕、土師器甕、平瓦等が出土しているが、小破片のため図示に至らず。 時期 重複関係や出土遺物から 10 世紀中頃と考えられる。

H-19号住居跡(Fig.20·27、PL.6·11)

位置 X119・120、Y203 主軸方向 N - 95°-E 規模 東西軸 (2.28) m、南北軸 (1.93) m、壁現高 0.21 m。住居北東隅の検出である。 面積 (2.01) m 床面 全面的に硬化している。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 $H-18\cdot 21$ 、W-2と重複し、新旧関係は H-18 →本遺構 H-21 W-2である。 出土遺物 酸化焔 焼成で底部回転糸切りの須恵器境(1)の他、灰釉陶器碗等が出土している。 時期 重複関係や出土遺物から 10 世紀後半と考えられる。

H-20 号住居跡(Fig.20、PL. 6)

位置 X119・120、Y204 主軸方向 N - 82° - E 規模 東西軸 (0.96) m、南北軸 (1.81) m、壁現高 0.23 m。 住居南東隅の検出である。 面積 (1.32) ㎡ 床面 全面的に硬化している。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 H-21、W-2と重複し、新旧関係は H-21 →本遺構 W-2である。 出土遺物 なし。 時期 重複関係から 10 世紀中頃と考えられる。

H-21号住居跡(Fig.20、PL. 6)

位置 X119・120、Y203・204 主軸方向 N - 89° - E 規模 東西軸 (1.31) m、南北軸 3.49 m、壁現高 0.34 m。住居西半の検出である。 面積 (2.53) m 床面 全面的に硬化している。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 $H-19\cdot 20$ と W-2 と重複し、新旧関係は H-19 →本遺構 + H-20 + W-2 である。 出土遺物 なし。 時期 重複関係から 10 世紀後半と考えられる。

H-22 号住居跡(Fig.20 · 27 · 28、PL. 6 · 12)

位置 X113・114、Y200・201 主軸方向 N - 88° - E 規模 東西軸 4.39 m、南北軸 (3.41) m、壁現高 0.28 m。 住居南半は調査区外となる。 面積 (11.52) ㎡ 床面 全面的に硬化しており、南東から中央にかけて特 に顕著である。 カマド 検出されず。硬化面および焼土・灰の散布状況から、住居南東にありカクランにより 削平されていると考えられる。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 先行する遺構の覆土を掘り込み、床面としている。 重複 $H-3\cdot 26\cdot 27$ 、T-1、D-3と重複し、新旧関係は $H-3\cdot 27\to H-26\to D-3\to a$ 遺構 $\to T-1$ である。 出土遺物 灰釉陶器碗($1\cdot 2$)、酸化焔焼成で内面に法輪状の暗文を施す須恵器高台付埦($3\cdot 4$)が出土している。 $3\cdot 4$ ともに出土位置がカクラン部にあたり、下層のH-22 に属する可能性もある。 時期 重複関係や出土遺物から 10 世紀後半と考えられる。

H-23 号住居跡(Fig.21·27、PL. 6·12)

位置 X118・119、Y200・201 主軸方向 N - 91° - E 規模 東西軸 3.64 m、南北軸 (4.81) m、壁現高 0.32 m。住居南西隅は調査区外となる。 面積 (12.97) m 床面 カマド前を中心として、全面的に硬化している。 カマド 東壁中央に 1 基検出した。確認長 1.72 m、燃焼部幅 0.70 m、煙道は壁外に 1.23 m突出している。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 地山の C 黒層 (V 層) を掘り込み、褐灰色土により貼床を構築している。 重複 H-12 と重複し、新旧関係はH-12 →本遺構である。 出土遺物 高台部が残存する緑釉陶器碗 (1)、酸化焔焼成の須恵器埦 (2・3)、凹面にへラ記号のある平瓦 (4)、判読不能であるがヘラ文字が凸面に描かれた平瓦 (5)が出土している。また、住居北東に馬と考えられる獣骨を、ほぼ一頭分検出している。 時期 土遺物から 10 世紀前半から中頃と考えられる。

H-24号住居跡(Fig.21、PL. 6)

位置 X107・108、Y199・200 主軸方向 N - 91°- E 規模 東西軸 (2.06) m、南北軸 (2.64) m、壁現高 $0.29 \, \mathrm{m}$ 。調査区北東で検出。上部はカクランにより削平され、浅い住居となっている。 面積 (6.75) ㎡ 床面 カマド前から住居中央にかけて硬化する。 カマド 東壁に1基検出した。確認長2.86 m、煙道は壁外に1.68 m突出している。削平により、焼土面のみの検出である。カマド前には焼土粒・炭化物が広がる。 貯蔵穴 長軸 $0.68 \, \mathrm{m}$ 、短軸 $0.63 \, \mathrm{m}$ 、深さ $0.43 \, \mathrm{m}$ を測る、平面隅丸方形の貯蔵穴がカマド南東部で検出された。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 $\mathrm{H}-2\cdot4$ 、 $\mathrm{D}-4$ と重複し、新旧関係は $\mathrm{D}-4$ →本遺構 → $\mathrm{H}-4$ → $\mathrm{H}-2$ である。 出土遺物 土師器坏の小破片が 2 点、貯蔵穴覆土から出土しているのみである。 時期 重複関係や出土遺物から 8 世紀代と考えられる。

H-25 号住居跡(Fig.21·22·28、PL. 6·12)

位置 X108・109、Y200・201 主軸方向 N - 97°-W 規模 東西軸 2.16 m、南北軸 (2.88) m、壁現高 0.40 m。住居南端は調査区外となる。 面積 (5.84) ㎡ 床面 カマド前を中心として、全体的に硬化する。 カマド 西壁北寄りに1基検出した。確認長 0.66 m、燃焼部幅 0.24 m、煙道は壁外に 0.33 m突出している。両袖ともに残存しないが、袖石を据え付けたと思われる掘り込みが確認された。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。部分的に暗褐色土により構築されている。重複 $H-4\cdot33\cdot34$ 、D-8と重複し、新旧関係は $H-4\cdot33\cdot34$ →本遺構 D-8である。 出土遺物床面直上から灰釉陶器碗(1)・皿(2)、酸化焔焼成の須恵器埦(3)が出土している。 時期 出土遺物から 10 世紀後半と考えられる。

H-26 号住居跡(Fig.22 · 28、PL. 7 · 12)

位置 X113・114、Y200・201 主軸方向 N - 116°-E 規模 東西軸 3.28 m、南北軸(2.39)m、壁現高 0.29 m。住居南半は調査区外となる。 面積 (4.64)㎡ 床面 全面的に硬化しており、住居中央付近が特に顕著である。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層、部分的に先行する遺構の覆土を掘り込んで床面とする。 重複 $H-3\cdot 22\cdot 27$ 、D-3と重複し、新旧関係は $H-3\cdot 27$ →本遺構 $\rightarrow H-22$ 、D-3である。 出土遺物 八稜鏡(1)、灰釉陶器碗(2・3)が出土している。 1 は瑞花双鳥(鳳)八稜鏡で、完形品である。湯口は丁寧に整形されている。 時期 出土遺物から 10 世紀後半と考えられる。

H-27号住居跡(Fig.23·28、PL. 7·12)

位置 X114・115、Y200・201 主軸方向 N - 88°-E 規模 東西軸 5.60 m、南北軸 4.08 m、壁現高 0.40 m。面積 18.9 m 床面 全体的に平坦な床面で、カマド前から住居中央にかけての硬化が顕著である。ほぼ全周にわたり周溝が巡る。 カマド 東壁中央に1基検出した。確認長 1.81 m、燃焼部幅 0.59 m、袖の残存長は左(北)が 1.01 m、右(南)が 1.25 mを測る。煙道は壁外に 0.49 m突出している。両袖ともに灰黄褐色粘質土により構築され、右袖には構築材として凝灰岩質砂岩が見られる。。中央には支脚を据えたと思われる掘り込みが確認された。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 P 1 ~ 3 の 3 基が検出された。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 H - 22・26、T - 1 と重複し、新旧関係は本遺構 \rightarrow H - 26 \rightarrow H - 22 \rightarrow T - 1 である。出土遺物 須恵器坏・甕、土師器坏・甕等が出土しており、カマド覆土から出土した須恵器蓋(1)、床面直上から出土した土師器坏(2)を図示。 時期 重複関係や出土遺物から7世紀末から8世紀初頭と考えられる。

H-28号住居跡(Fig.22、PL.7)

位置 X109・110、Y200 主軸方向 N - 83° - E 規模 東西軸 2.27 m、南北軸 (2.35) m、壁現高 0.34 m。調査区西側で検出。住居南半は遺構外となる。 面積 (4.17) ㎡ 床面 カマド前から住居中央にかけて、非常に堅緻に硬化する。 カマド 東壁に 1 基検出した。確認長 0.58 m、燃焼部幅 (0.27) m、煙道は壁外に 0.43 m突出している。カマドは浅く、薄い灰層と被熱し赤変した火床面が確認できる程度である。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層および先行する遺構の覆土を掘り込んで床面としている。 重複 $H-29\cdot30\cdot34\cdot37$ 、 $D-2\cdot5$ と重複し、新旧関係は $H-34\rightarrow H-37\rightarrow H-30\rightarrow$ 本遺構 $\rightarrow H-29$ 、 $D-2\cdot5$ である。 出土遺物灰釉陶器碗、酸化焔焼成の須恵器境、羽釜、平瓦等が住居覆土およびカマド覆土から出土しているが。小破片のため図示に至らず。 時期 重複関係や出土遺物から 10 世紀後半と考えられる。

H-29号住居跡(Fig.24·28、PL. 7·12)

位置 X109・110、Y199・200 主軸方向 N - 105°-E 規模 東西軸 2.04 m、南北軸 2.50 m、壁現高 0.45 m。調査区西側で検出した。全面検出であるがカマドが検出されず、灰層の広がりや火床面も確認されなかった。住居として扱っているが、竪穴状遺構となる可能性も考えられる。 面積 5.09 m 床面 平坦な床面で、部分的に硬化が見られる。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 H - 1・28・30・32・33、W - 5、D - 7、P - 2・4と重複し、新旧関係はH - 33 → H - 32 → H - 30 → H - 28 → 本遺構 → W - 5、D - 7、P - 2・4である。 出土遺物 灰釉陶器碗、羽釜、平瓦等が出土しており、覆土中から出土した酸化焔焼成で底部回転糸切りの須恵器境(1)を図示した。 時期 重複関係や出土遺物から 10 世紀後半と考えられる。

H-30 号住居跡 (Fig.24、PL.7)

位置 $X211 \sim 213$ 、 $Y124 \sim 126$ 主軸方向 $N-60^{\circ}-E$ 規模 東西軸 5.67 m、南北軸 5.73 m、壁現高 0.34 m。調査区西側で検出した。 面積 11.04 ㎡ 床面 全面的に硬化しており、南東から中央にかけて特に顕著である。ほぼ全周にわたり周溝が巡る。 カマド 検出されず。硬化面および焼土・灰の散布状況から、住居南東にあったものと考えられる。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 $H-1\cdot 28\cdot 29\cdot 31\cdot 32\cdot 36\cdot 37$ 、W-5、 $D-2\cdot 5$ 、 $P-2\cdot 4$ と重複し、新旧関係は $H-28\cdot 31\cdot 32\cdot 37\cdot 36$ →本遺構 $\rightarrow H-29$ $\rightarrow H-1$ 、W-5、 $D-2\cdot 5$ 、 $P-2\cdot 4$ である。出土遺物 覆土中から灰釉陶器碗、須恵器蓋・高台付埦(足高高台)、羽釜、平瓦等が出土しているが、小破片のため図示に至らず。 時期 重複関係や出土遺物から 10 世紀後半と考えられる。

H-31号住居跡(Fig.22·29、PL. 7·12)

位置 X110・111、Y200 主軸方向 N-107°-E 規模 東西軸 (2.63) m、南北軸 (2.90) m、壁現高 0.46 m。 調査区西側で検出した。 面積 (10.01) m 床面 全面的に平坦な床面で、全体的に強く硬化する。 カマ ド 検出されず。南東隅に焼土・灰の散布が見られ、後出するD-6に削平された可能性が考えられる。 貯蔵 穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 $H-1\cdot30\cdot35\cdot36$ 、W-4、 $D-5\cdot6$ と重複し、新旧関係は $H-35\cdot36$ →本遺構 $\rightarrow H-1$ 、W-4、 $D-5\cdot6$ である。 出土遺物 灰釉陶器碗、酸化焔焼成の須恵器高台付埦、羽釜等が覆土中から出土している。 詳細は不明な鉄製品(1)を図示した。形状から光背の可能性が考えられる。 時期 重複関係や出土遺物から 10 世紀後半と考えられる。

H-32 号住居跡(Fig.24·29、PL. 7·12)

位置 X109・110、Y199・200 主軸方向 N - 103°-E 規模 東西軸 3.03 m、南北軸 2.22 m、壁現高 0.29 m。調査区西側で検出、住居北西隅は調査区外となる。カマドが検出されず、灰層の広がりや火床面も確認されなかった。住居として扱っているが、竪穴状遺構となる可能性も考えられる。 面積 (5.81) ㎡ 床面 平坦な床面で、全体的に硬化が認められる。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 $H-29\cdot30\cdot33\cdot34$ 、W-5、D-7、 $P-4\cdot5$ である。 出土遺物 酸化焔焼成で底部回転糸切りの須恵器境(1)、鉄製紡錘車(2)の他、羽釜、平瓦等が出土している。 時期 重複関係や出土遺物から 10 世紀後半と考えられる。

H-33号住居跡(Fig.24、PL.7)

位置 X109、Y199・200 主軸方向 N - 98° - E 規模 東西軸 (0.75) m、南北軸 (2.54) m、壁現高 0.25 m。住居北側は調査区外、東・南側は重複により削平され、住居南端の部分的な検出となる。 面積 (1.34) ㎡ 床面 平坦であるが、住居隅のためか硬化は弱い。 カマド 検出されず。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 $H-25\cdot32\cdot34$ と重複し、新旧関係は本遺構 $\rightarrow H-32 \rightarrow H-34 \rightarrow H-25$ である。 出土遺物 酸化焔焼成の須恵器埦等が出土しているが、小破片のため図示に至らず。 時期 重複関係や出土遺物から 10 世紀中頃と考えられる。

H-34号住居跡(Fig.24、PL.7)

位置 X109、Y200 主軸方向 N - 92° - E 規模 東西軸 5.67 m、南北軸 5.73 m、壁現高 0.48 m。調査区西側で検出、住居南側は調査区外となる。 面積 (6.56) m 床面 全面的に硬化しており、南東から中央にかけて特に顕著である。 カマド 東壁に 1 基検出した。確認長 0.47 m、燃焼部幅 (0.19) m、煙道は壁外に 0.38 m突出している。カマドは浅く、薄い灰層と被熱し赤変した火床面が確認できる程度である。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。カマド南東に長軸 0.81 m、短軸 0.77 m、深さ 0.51 mを測る、平面円形の床下土坑を検出した。最上層は住居の硬化床となっており、非常に堅緻である。 重複 $H-25\cdot28\cdot30\cdot32\cdot33\cdot37$ 、 $D-2\cdot7\cdot8\cdot9$ と重複し、新旧関係は $H-25\cdot28\cdot30\cdot32\cdot33\cdot37$ 、 $H-28\rightarrow H-30\rightarrow D-2\cdot7\cdot8\cdot9$ である。 出土遺物 住居覆土および床下土坑覆土から灰釉陶器碗・長頸壺、酸化焔焼成の須恵器境等が出土しているが、小破片のため図示に至らず。 時期 重複関係や出土遺物から 10 世紀中頃と考えられる。

H-35 号住居跡(Fig.22、PL. 7)

位置 X110・110、Y200 主軸方向 N - 98°-E 規模 東西軸 3.66 m、南北軸 (2.71) m、壁現高 0.45 m。住居北半の検出である。 面積 (3.12) ㎡ 床面 全面的に硬化しており、調査区際が最も硬化が強くなっている。 カマド 検出されず。硬化面および焼土・灰が住居南東に広がることから、後出するD - 6 に削平された可能性が考えられる。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 $H-30\cdot31\cdot36$ 、 $D-5\cdot6$ と重複し、新旧関係は本遺構 $H-36\to H-31\to H-30\to D-5\cdot6$ である。 出土遺物 酸化焔焼成の須恵器境等が出土しているが、小破片のため図示に至

らず。 時期 重複関係や出土遺物から10世紀中頃と考えられる。

H-36号住居跡(Fig.22、PL.7)

位置 X110・111、Y199・200 主軸方向 N - 114°-E 規模 東西軸 (3.14) m、南北軸 (3.51) m、壁現高 0.34 m。調査区西側で検出。住居北側は調査区外、西側は後出する遺構に削平される。 面積 (4.62) ㎡ 床面 住居中央付近の硬化が顕著である。 カマド 検出されず。住居東壁に極めて薄い灰層と被熱し赤変した火床面が確認できるが、形状把握には至らず。後出するH-35 による削平か。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 $H-30\cdot31$ 、D-5 と重複し、新旧関係は本遺構 $\rightarrow H-31 \rightarrow H-30 \rightarrow D-5$ である。 出土遺物 酸化焔焼成の須恵器埦等が出土しているが、小破片のため図示に至らず。 時期 重複関係や出土遺物から 10 世紀中頃と考えられる。

H-37号住居跡(Fig.22、PL.7)

位置 X109・110、Y200 主軸方向 N - 102°-E 規模 東西軸 (1.73) m、南北軸 (1.38) m、壁現高 0.12 m。調査区西側で検出。住居南側は調査区となる。 面積 (2.14) ㎡ 床面 カマド前から住居中央にかけて、非常に堅緻に硬化する。 カマド 東壁に 1 基検出した。確認長 0.31 m、燃焼部幅 (0.29) m、煙道は壁外に 0.25 m突出している。カマドは浅く、薄い灰層と被熱し赤変した火床面が確認できる程度である。 貯蔵穴 検出されず。 柱穴 検出されず。 掘り方 総社砂層を掘り込んで床面とする、地山硬化床。 重複 H - 28・34、D - 2・5と重複し、新旧関係はH - 34 →本遺構→H - 28 →D - 2 · 5 である。 出土遺物 なし。 時期 重複関係から 10 世紀中頃とと想定される。

(2) 竪穴状遺構

T-1号竪穴状遺構(Fig.20、PL. 6)

位置 X113・114、Y200 主軸方向 N $-87^{\circ}-E$ 規模 東西軸 $3.08\,\mathrm{m}$ 、南北軸 $(0.82)\,\mathrm{m}$ 、壁現高 $0.78\,\mathrm{m}$ 。 調査区西側の北壁沿いで検出。大半は調査区となる。 形状等 平面は長方形である。直線的に落ち込み、総社 砂層面まで掘り込んでいる。全体的に平坦な底面で、硬化は認められない。 覆土には拳大の総社砂層ブロックが 大量に含まれる。 重複 $H-22\cdot 27$ と重複し、新旧関係は $H-27\to H-22\to \pi$ 遺構である。 出土遺物 須恵器境の小破片が 1 点出土しているのみである。 時期 出土遺物が僅少で判然としないが、重複関係等から 中世以降と想定される。

(3) 溝跡

W-1号溝跡(Fig.25、PL.7)

位置 X119·120、Y208~210 主軸方向 N-79°-E 規模 長さ (3.50) m、上幅 (9.30) m、下幅 0.57 m、深さ 3.76 m。調査時は深さ 1 m程度の掘削に留め、埋め戻し時に調査区東壁に沿って、トレンチ調査を実施した。トレンチ部分は現地での簡易的な測量のため、深さ等はおおよその値である。 形状等 東西方向に走行し、断面形状は薬研状を呈する。 重複 H-17と重複し、新旧関係はH-17→本遺構である。 出土遺物 須恵器高台付埦、平瓦等が出土しているが、小破片のため図示に至らず。いずれも覆土上層からの出土で、周辺からの混入遺物である。 時期 規模・形状から蒼海城に伴う堀跡である。

W-2号溝跡(Fig.20、PL. 6)

位置 X119、Y203・204 主軸方向 N − 89° − E 規模 長さ(3.59) m、上幅 3.24 m、下幅 2.24 m、深さ 0.68 m。 形状等 東西方向に走行し、断面形状は台形を呈する。 重複 H − 19 ~ 20 と重複し、新旧関係はH − 19 ~ 20 →本遺構である。 出土遺物 須恵器、土師器等が出土しているが、小破片のため図示に至らず。 時期 重複関係から中世以降の開削と考えられる。

W-3号溝跡(Fig.21、PL.6)

位置 X108、Y119・120 主軸方向 N-6°-W 規模 長さ (2.89) m、上幅 0.78 m、下幅 0.42 m、深さ 0.31 m。 形状等 南北方向に走行し、断面形状は箱形を呈する。覆土には As-B 軽石が少量混入する。 重複 H-4と重複し、新旧関係はH-4→本遺構である。 出土遺物 須恵器、土師器等が数点出土しているが、小破片のため図示に至らず。 時期 出土遺物が僅少で判然としないが、重複関係や覆土から中世以降の開削と想定される。

W-4号溝跡(Fig.25)

位置 X110・111、Y199・200 主軸方向 N - 10°-W 規模 長さ (2.50) m、上幅 0.47 m、下幅 0.25 m、深さ 0.15 m。 形状等 南北方向に走行し、断面形状は台形を呈する。浅い溝状の掘り込みであり、D - 5 のような土坑の可能性も考えられる。 重複 $H-1\cdot31\cdot36$ と重複し、新旧関係は $H-31\cdot36$ →本遺構 H-1である。 出土遺物 灰釉陶器碗、須恵器埦の小破片が各 1 点出土している。 時期 重複関係から 10 世紀末から 11 世紀初頭の開削と想定される。

W-5号溝跡(Fig.25)

位置 X109·110、Y199·200 主軸方向 N-95°-E 規模 長さ2.86 m、上幅0.45 m、下幅0.18 m、深さ0.13 m。 形状等 東西方向に走行し、断面形状は台形を呈する。浅い溝状の掘り込みであり、D-5のような土坑の可能性も考えられる。 重複 H-29·30·32と重複し、新旧関係はH-29·30·32→本遺構である。出土遺物 なし。 時期 重複関係から中世以降の開削と想定される。

(4) 井戸跡・土坑・ピット (Fig.17・18・20・21・22・29、PL.4・7・8・13)

本調査区では井戸跡 1 基、土坑 9 基、ピット 5 基を確認している。D - 8 号土坑からは銅鏡 2 面(五花鏡 1 面、素文鏡 1 面)が重なって出土しており、それ以外にも鉄鐸、鉄鈴、4 本の雁又鏃等、一般的な遺構では見られないような遺物群が一括して出土している。断面観察から、柱痕は見られないが覆土に焼土ブロックを含み、意図的に埋め戻した様子が窺える。

各計測値については「Tab. 4 2区井戸跡・土坑・ピット計測表」を参照のこと。

Tab. 4	2区井戸跡	・土坑・	ピッ	ト計測表
--------	-------	------	----	------

遺構名	グリッド	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ(m)	平面形状	重複(古→新)	出土遺物	備考
I - 1	X 119、Y 204	1.05	1.01	(0.99)	円形		須2、土12	上層に As-B 堆積
D - 1	X 119、Y 195·196	2.16	1.80	0.51	楕円形	H − 11 → D − 1	須1	
D - 2	X 109 · 110、 Y 200	1.45	0.98	0.51	楕円形	$\begin{array}{c} H-28\cdot 37 \rightarrow D-5 \rightarrow \\ D-2 \end{array}$		
D - 3	X 113、Y 200	0.85	0.83	0.23	円形	H - 22 · 26 · 27 → D - 3	須1	
D - 4	X 108, Y 199	0.88	(0.71)	0.65	(楕円形)	$D-4 \rightarrow H-24 \rightarrow W-3$		
D - 5	X 110 · 111、 Y 200	3.23	0.79	0.56	隅丸長方形	$\begin{array}{c} H-28\cdot 30\cdot 31\cdot 36\cdot 37 \rightarrow \\ D-5 \rightarrow D-2 \end{array}$	灰3、須2、土11	
D - 6	X 110、Y 200 · 201	(2.65)	1.53	0.42	(隅丸長方形)	H − 31 · 35 → D − 6	須3	
D - 7	X 109、Y 200	0.89	0.82	0.16	不整円形	H - 29 · 32 → D - 7	須4、土3	
D - 8	X 109、Y 200	0.69	0.68	0.61	円形	H - 25 · 34 → D - 8	鏡2、鈴1、鐸2、滓2、須4	
D - 9	X 109、Y 200	0.69	0.58	0.16	不整円形	H − 34 → D − 9	須1、土10、瓦1	
P - 1	X 119、Y 197	0.50	0.45	0.17	円形	$H - 8 \rightarrow P - 1$	灰1、須19、土10	
P - 2	X 110、Y 200	0.44	0.44	0.21	円形	H - 29 · 30 · 36 → P - 2	土1	
P - 3	X 110、Y 200	0.40	0.36	0.08	円形	$H - 30 \rightarrow D - 5 \rightarrow P - 3$	須1、土1	
P - 4	X 110、Y 200	0.46	0.26	0.44	楕円形	H - 29 · 30 → P - 4		
P - 5	X 109、Y 200	0.28	0.28	0.33	不整円形	H - 32 → P - 5		

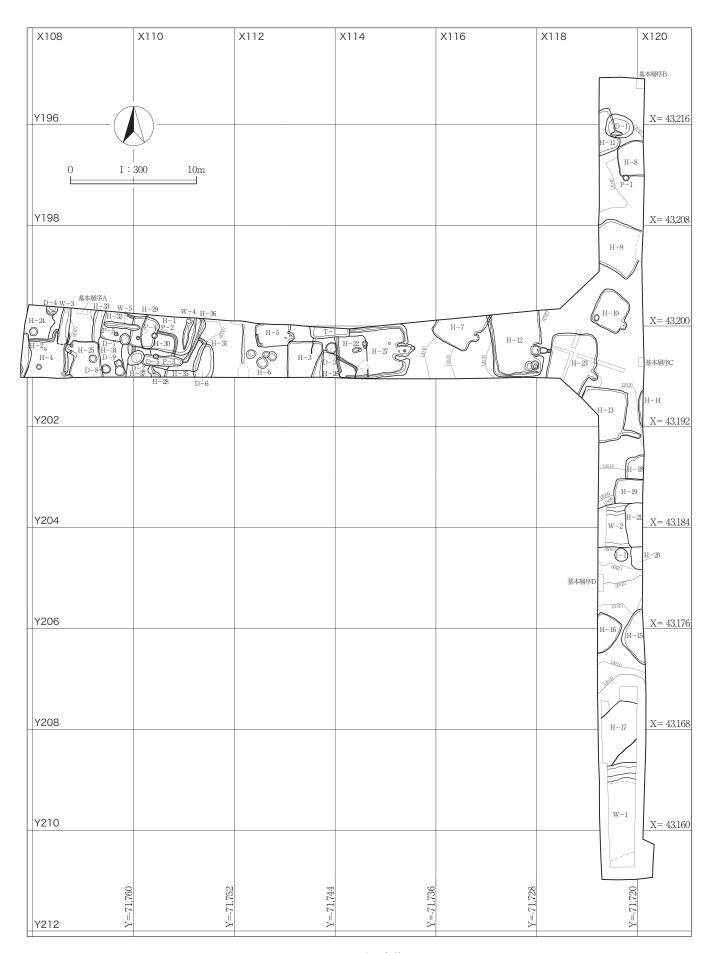


Fig.14 2区 全体図

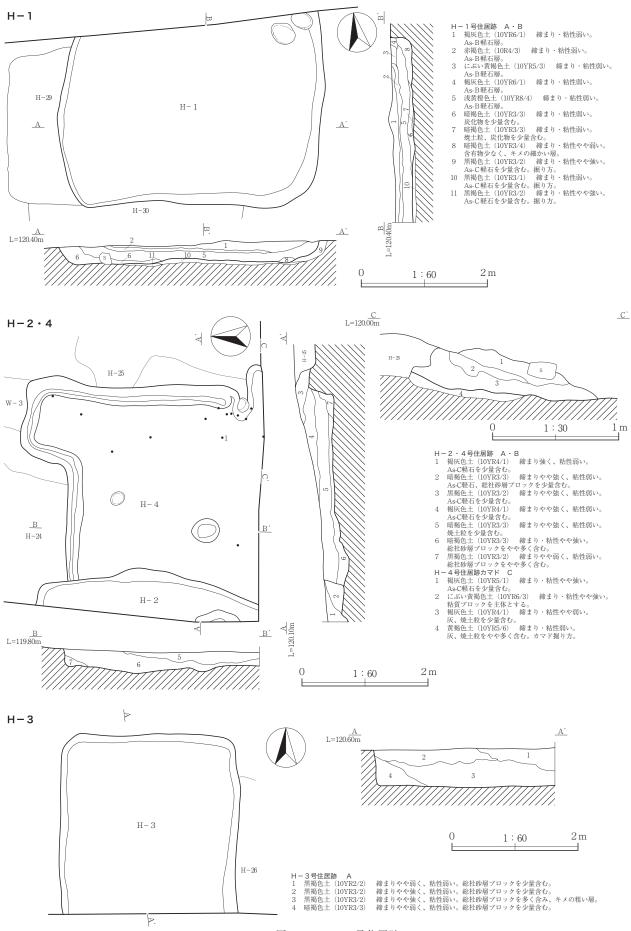


Fig.15 2区 H-1~4号住居跡

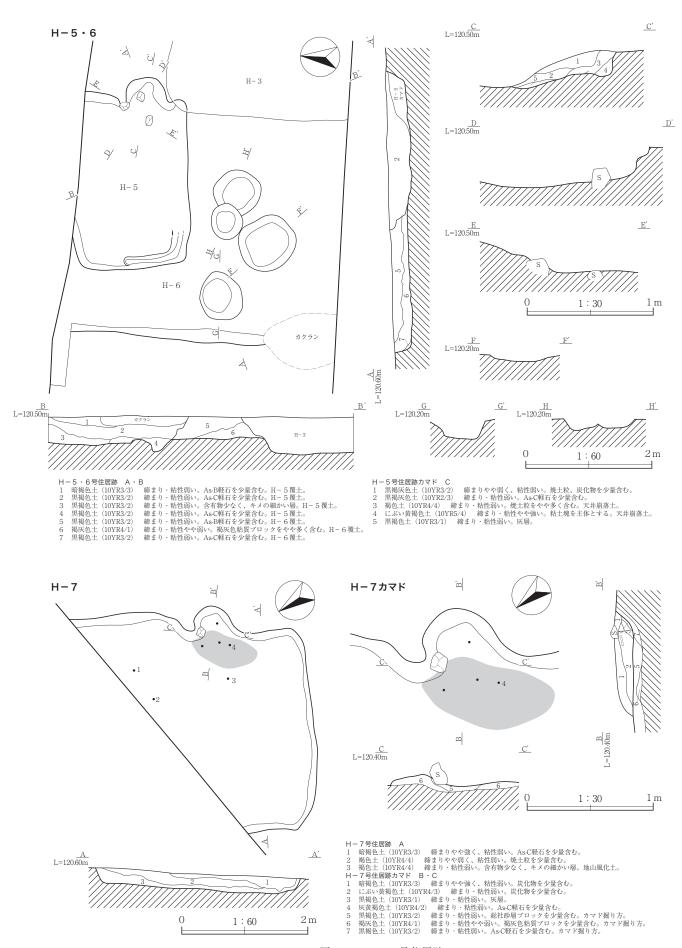


Fig.16 2区 H-5~7号住居跡

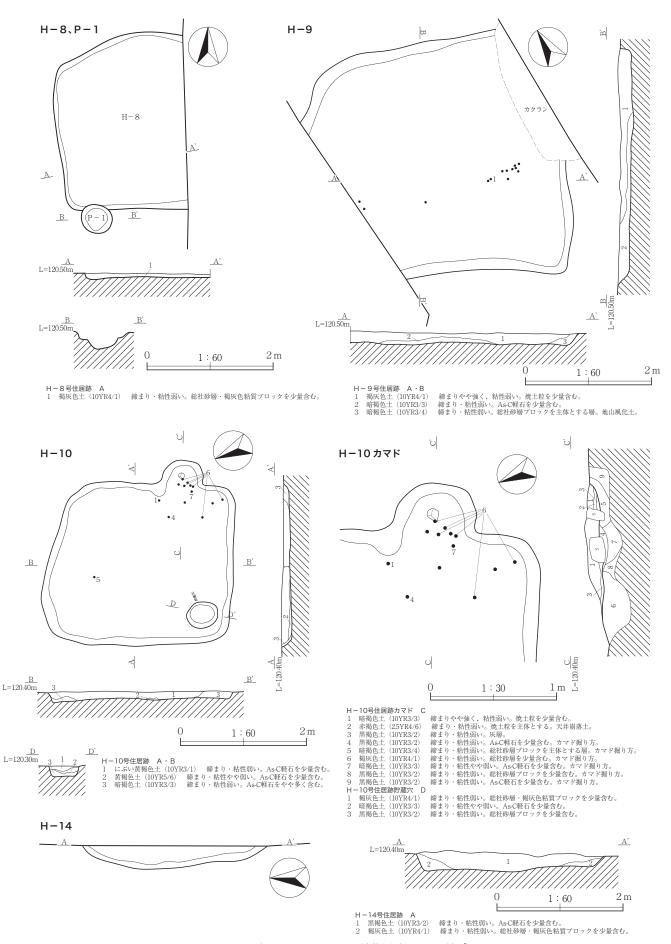


Fig.17 2区 $H-8\sim 10\cdot 14$ 号住居跡、P-1 号ピット

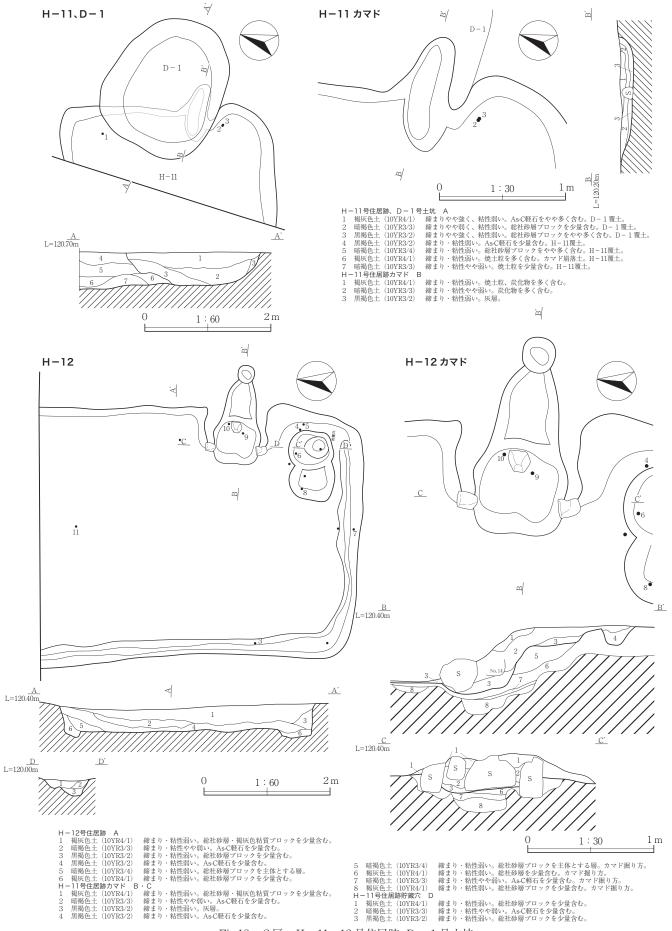


Fig.18 2区 H-11·12号住居跡、D-1号土坑

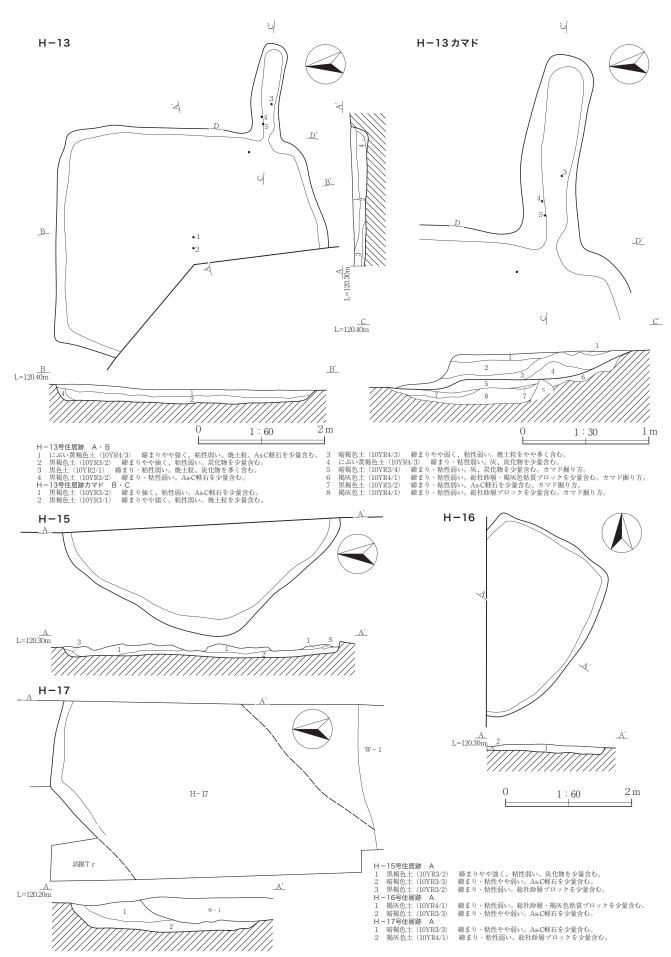


Fig.19 2区 H-13·15~17号住居跡

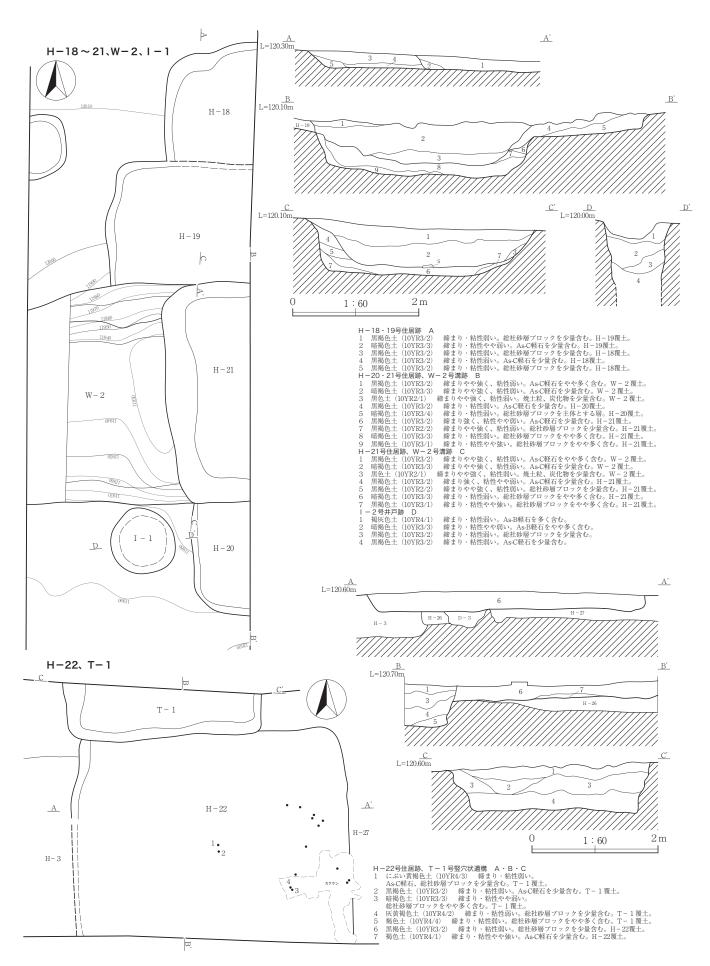
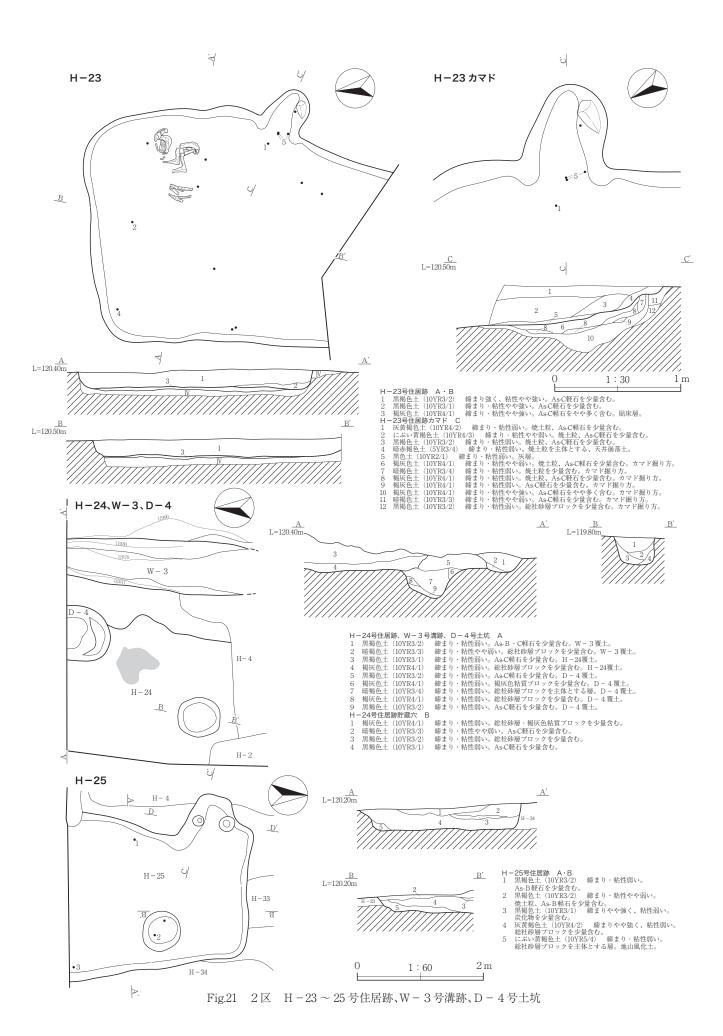


Fig.20 2区 $H-18\sim 22$ 号住居跡、T-1 号竪穴状遺構、W-2 号溝跡、I-1 号井戸跡



- 37 -

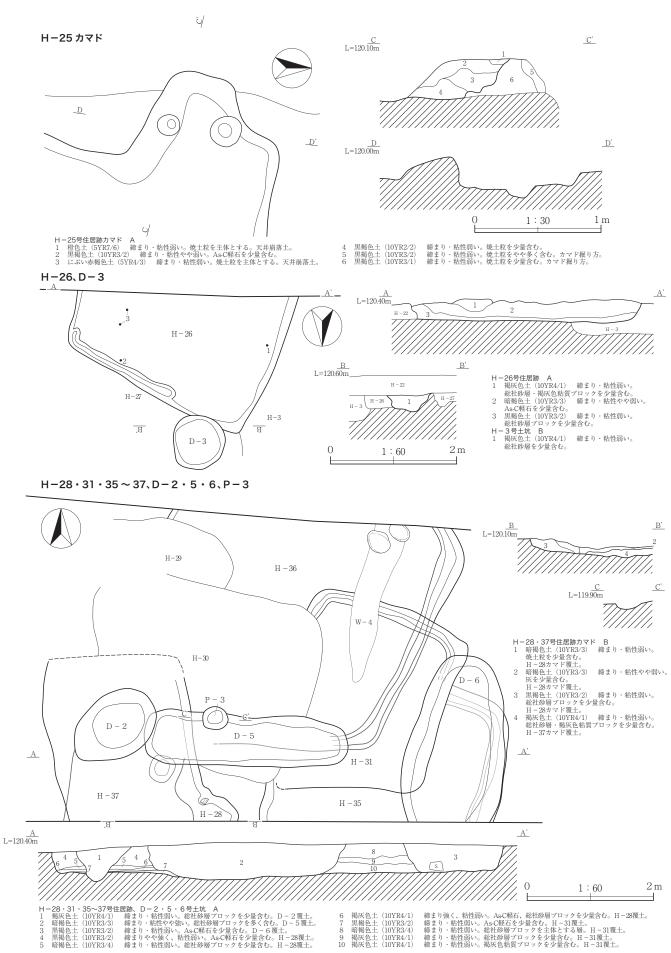
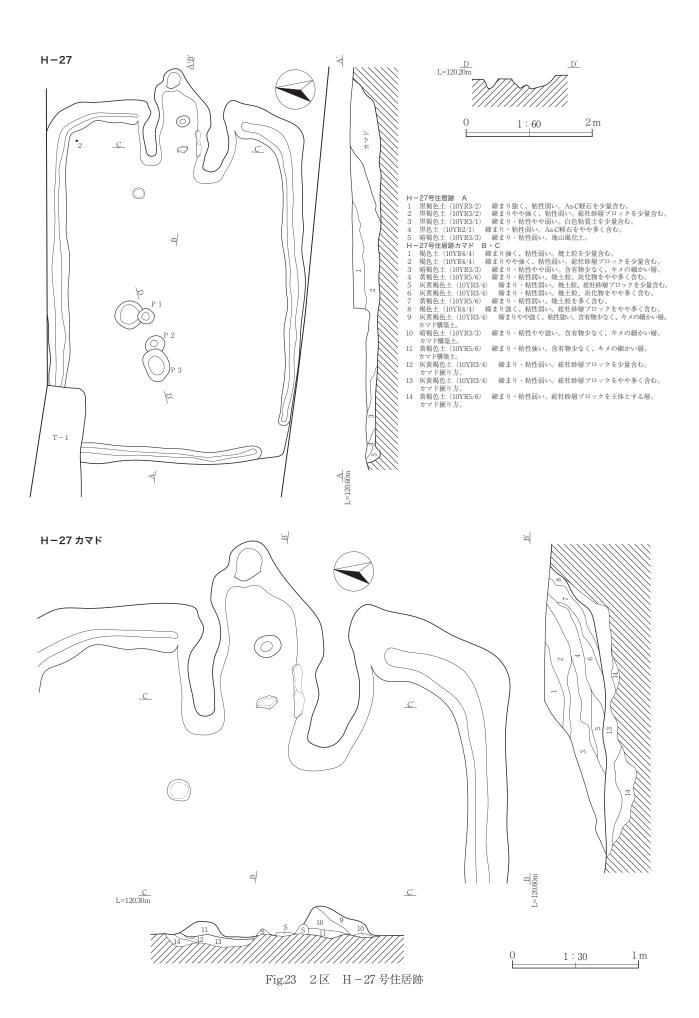


Fig.22 2区 H-25・26・28・31・35 ~ 37 号住居跡、D-2・3・5・6 号土坑、P-3 号ピット



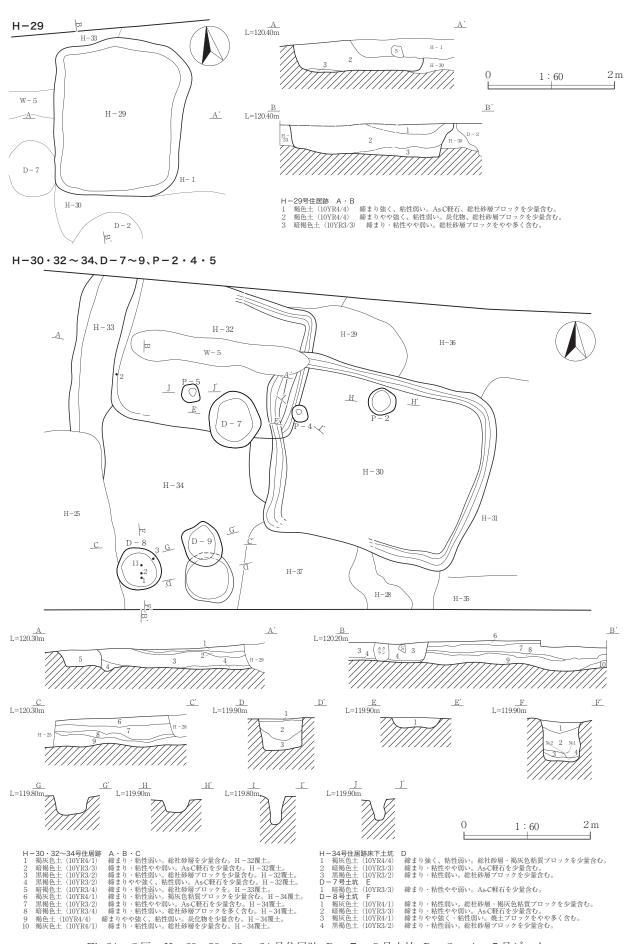


Fig.24 2区 H-29・30・32~34号住居跡、D-7~9号土坑、P-2・4・5号ピット

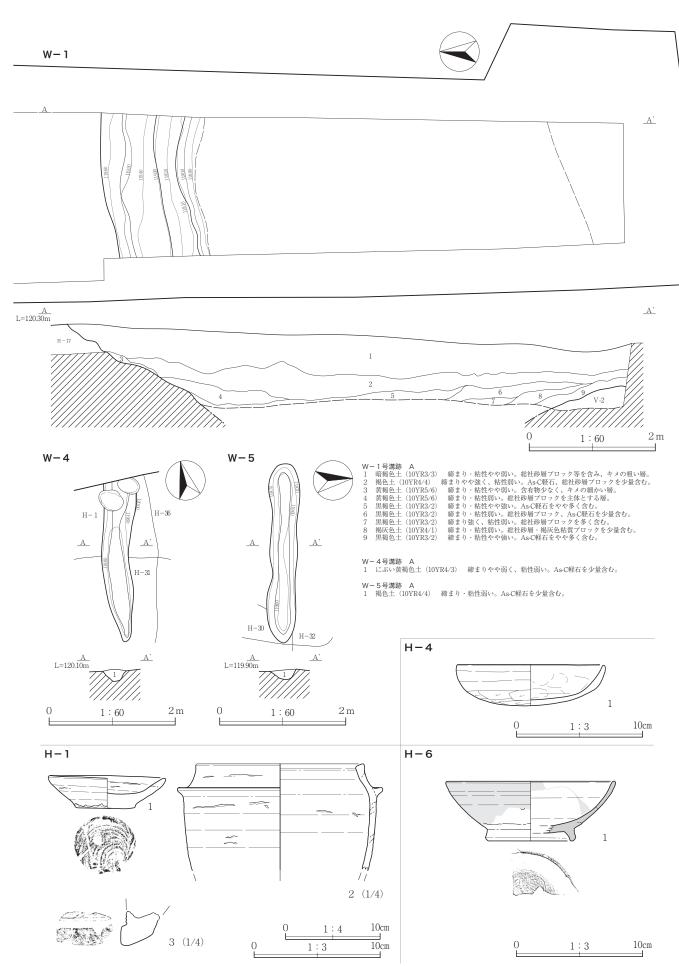
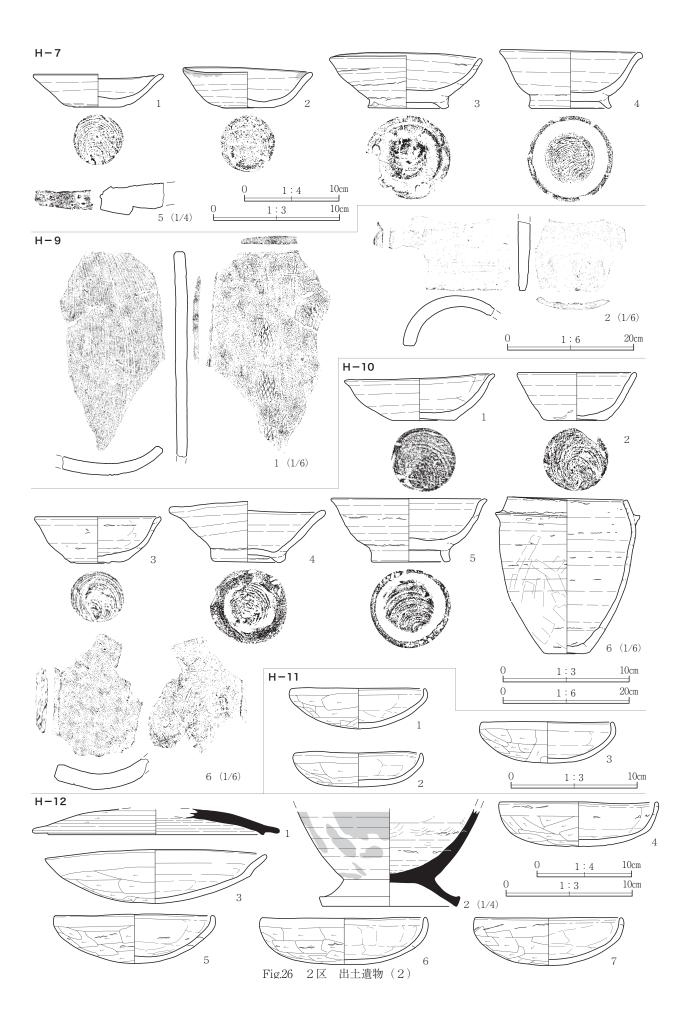
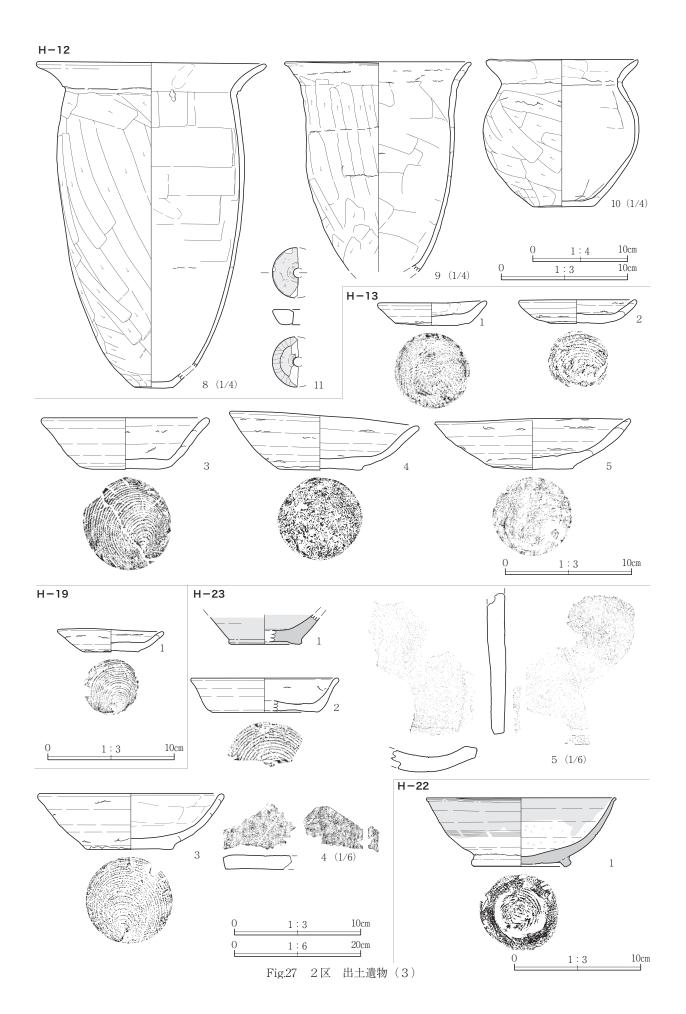


Fig.25 2区 W-1·4·5号溝跡、2区出土遺物 (1)





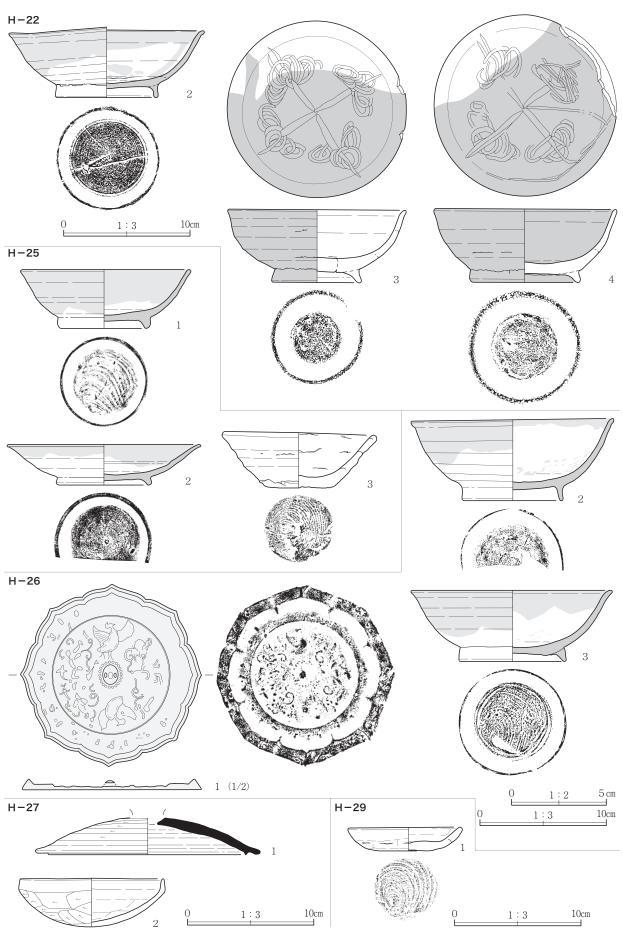
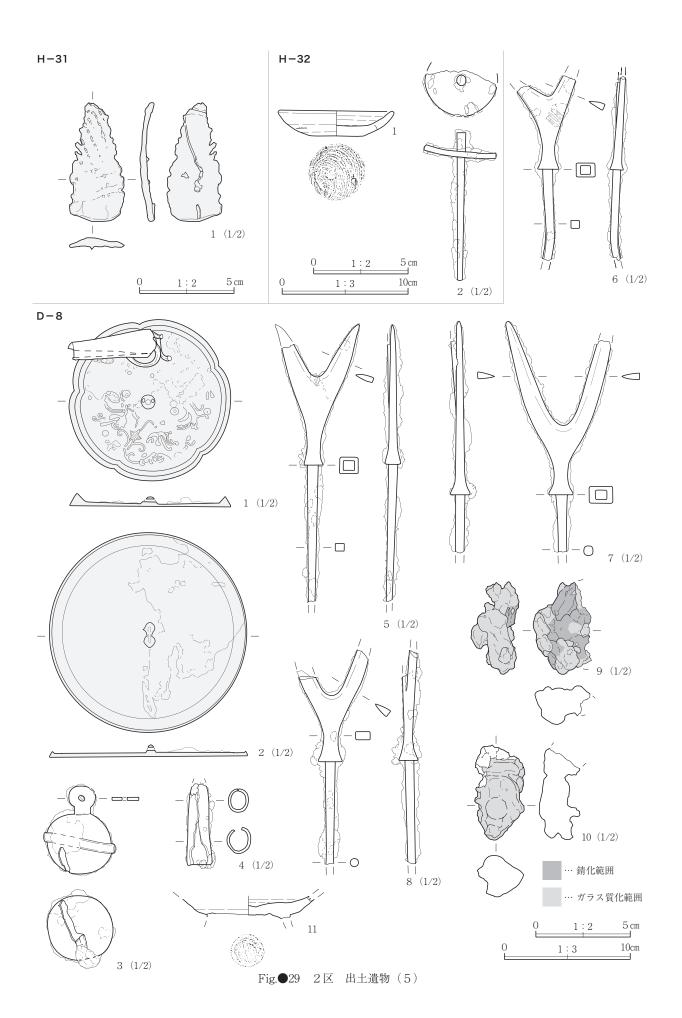


Fig.28 2区 出土遺物 (4)



Tab. 5 元総社蒼海遺跡群 (137) 2区出土遺物観察表

H-1											T
No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎:	±	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	覆土	須恵器 坏	9.2	4.8	2.6	白色粒		良好	浅黄橙	外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。底部回転糸切り。 内面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。	酸化焰。完存。
2	覆土	羽釜	(17.4)	_	(10.5)	雲母		良好	灰白	外面口縁部ヨコナデ、胴上部クロナデ。 内面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ。	1/5 残存。
No	出土位置	種別、器種	瓦当幅	瓦当厚	長さ	胎:	±	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
3	覆土	瓦 軒平瓦	(7.5)	(3.6)	(4.3)	石英・長石		堅緻	褐灰	凹面接合面に布目痕。顎面はナデ調整。	瓦当部片。
H-4											
No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎:	±	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	No. 7	土師器 坏	13.8	_	3.4	白色粒		良好	橙	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ、体部ユビナデ。	完存。
H-6											
No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎:	±	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	覆土	灰釉陶器 碗	[13.4]	(7.6)	5.6	白色粒		堅緻	灰白	外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。底部回転糸切り。施釉。 内面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。施釉。	1/5 残存。
H-7											T.
No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎	±	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	No. 6	須恵器 坏	11.4	4.3	2.3	黒色粒		良好	浅黄橙	外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。底部回転糸切り。 内面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。	酸化焰。3/4 残存。
2	No. 7	須恵器 坏	10.4	4.8	3.0	赤・黒色粒		良好	浅黄橙	外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。底部回転糸切り。口縁部に油煙。 内面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。	酸化焰。完存。
3	No. 1	須恵器 高台付埦	12,2	5.6	4.4	白色粒、雲	母	良好	にぶい黄橙	外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。底部回転糸切り。 内面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。	酸化焰。4/5 残存。
4	No. 2	須恵器 高台付埦	11.4	6.4	4.6	白色粒、雲	母	良好	灰白	外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。底部回転糸切り。 内面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。	酸化焰。3/4 残存。
No	出土位置	種別、器種	瓦当幅	瓦当厚	長さ	胎	±	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
5	No. 14	瓦 軒平瓦	(5.9)	2.0	(5.3)	石英・長石		堅緻	褐灰	珠文のみ残存。段顎。	瓦当部片。
H-9											
No	出土位置	種別、器種	長さ	幅	厚さ	胎	±	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	No.4 · 6	瓦 平瓦	(32.1)	(14.6)	1.9	石英、長石		堅緻	にぶい橙	凹面布目痕、糸曳痕。端部ヘラケズリ。 凸面格子タタキ、ナデ。ヘラ記号「×」あり。	広端部片。
2	覆土	瓦 丸瓦	(10.8)	(14.6)	1.9	石英、長石		堅緻	灰白	凸面ナデ。ヘラ描きあり、判読不能。端部ヘラケズリ。 凹面布目痕、端部に布綴痕あり。	広端部片。
H-1	0										I.
No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎	±	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	No. 2	須恵器 坏	12.0	5.8	4.4	黒・赤色粒		良好	にぶい黄褐	外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。底部回転糸切り。煤付着。 内面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。	酸化焰。完存。
2	覆土	須恵器 坏	(9.8)	4.9	4.0	黒色粒		良好	にぶい黄橙	外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。底部回転糸切り。 内面ロクロナデ成形。	酸化焰。1/3 残存。
3	覆土	須恵器 坏	(9.8)	4.0	3.8	雲母		良好	にぶい黄橙	外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。底部回転糸切り。 内面ロクロナデ成形。	酸化焰。1/3 残存。
4	No. 1	須恵器 高台付埦	12.4	5.8	4.4	雲母		良好	にぶい黄橙	外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。底部回転糸切り。 内面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。	酸化焰。完存。
5	No. 14	須恵器 坏	12.4	6.3	5.4	黒·赤色粒		良好	黒褐	外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ。底部回転糸切り。黒色状の被膜あり。	酸化焰。完存。
6	Na5 · 7 · 8	羽釜	18.9	7.2	24.6	雲母		良好	灰白	内面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。 外面口縁部ヨコナデ、胴上部クロナデ、胴下部へラナデ。	1/2 残存。
No	10·11·12·13 出土位置	種別、器種	長さ	幅	厚さ	胎:	+	焼成	色調	内面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ。 器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
7	№4	瓦 平瓦	(20.9)	(14.9)	2.4	石英、長石	_	良好	橙	凹面布目痕、端部ヘラケズリ。	端部片。広・狭端不明。
H — 1		26 126	(20.0)	(14.0)	2.1	420, 201		1681	135	凸面ナデ、端部ヘラケズリ。押印「當」、ヘラ描き「埋カ」あり。	MILDIO 10 10 30 30 11 17 10
No No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎:	+	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	№ 1	須恵器 坏	10.4	- ANT	3.2	赤色粒、雲		良好		外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。	完存。
2	No. 2	須恵器 坏	10.4		2.8	赤色粒、雲		やや軟質	橙	内面口縁部ヨコナデ、体部ユビナデ。 外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。	完存。
3	No. 3	須恵器 坏	10.4	_	3.3	赤色粒、雲		やや軟質	橙	内面口縁部ヨコナデ、体部ユビナデ。 外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。	完存。
		炽心罐 - 小	10.4		J.J	小巴包、会	ry.	アヤル貝	15	内面口縁部ヨコナデ、体部ユビナデ。	JUIT'0
H — 1	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎:	+	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	漫土	運 別、 倫理 須恵器 蓋	(19.6)	座 往	(2.0)	白色粒、雲		良好	超	外面口縁部ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ。	1/4 残存、摘み欠損。
			(19.0)							内面ロクロナデ。 外面ロクロナデ。自然釉付着。	
2	カマド覆土	須恵器 瓶類		14.2	10.2	精良		堅緻	橙	内面ロクロナデ。胴部にはロクロナデ以前の当て具痕が僅かに残る。 外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。	胴下半から底部片。
3	No.2 · 8	土師器 坏	17.7	_	4.45	雲母		良好	橙		完存。
4	No. 10	土師器 坏	12.6	-	3.4	白色粒、雲	母	良好	橙	内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	ほぼ完存。
5	No. 1	土師器 坏	(12.8)	-	4.0	雲母		良好	橙	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	1/2 残存。
6	No.3 · 4	土師器 坏	13.0	-	3.7	白・赤色粒、	、雲母	良好	橙	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。 内面ヨコナデ。	完存。
7	No. 9	土師器 坏	11.8	-	4.9	白色粒、雲	母	良好	橙	外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ、体部ナデ。	ほぼ完存。
8	No. 7	土師器 甕									
—	No. 14	土師器 甕	19.7	_	(22.1)	白・赤色粒、	、雲母	良好	橙	外面口縁部ヨコナデ、胴部縦方向ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ、胴部ユビナデ。	2/3 残存。
9				1		<u> </u>		A 107	im	外面口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。	2/3 残存。
9	No. 15	土師器 麂	16.0	6.2	15.5	雲母		良好	橙	内面口縁忽ヨコナデ、胴忽磨減 (ナデか) -	2/3/2010
	№ 15 出土位置	土師器 甕種別、器種	16.0	6.2 下径	15.5	要母	石材	色調	重量	内面口縁部ヨコナデ、胴部磨滅 (ナデか)。 器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	No. 5	須恵器 坏	8.7	5.9	1.9	赤色粒、雲母	良好	橙	外面ロクロナデ成形。底部回転糸切り。 内面ロクロナデ成形。	酸化焰。完存。
2	No 6	須恵器 坏	9.4	6.0	1.8	赤色粒、雲母	良好		外面ロクロナデ成形。底部回転糸切り。 内面ロクロナデ成形。	酸化焰。1/2 残存。
3	No. 1	須恵器 埦	14.1	4.6	3.7	雲母	やや軟質		外面ロクロナデ成形。底部回転糸切り。 内面ロクロナデ成形。	酸化焔。ほぼ完存。
4	No. 2	須恵器 埦	15.0	6.7	4.6	石英、雲母	良好	灰黄褐	外面ロクロナデ成形。底部回転糸切り。 内面ロクロナデ成形。	酸化焰。完存。
5	Να 3	須恵器 境	15.4	6.5	3.9	白色粒	良好		外面ロクロナデ成形。底部回転糸切り。 内面ロクロナデ成形。	酸化焰。完存。

H-19

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	覆土	須恵器 坏	8.6	7.3	1.8	白色粒	良好	浅黄橙	外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ。底部回転糸切り。 内面ロクロナデ成形。	酸化焰。完存。

H-22

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	No. 1	灰釉陶器 碗	[15.0]	(8.2)	5.4	白色粒	堅緻		外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。底部回転糸切り。施釉。 内面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。施釉。	1/2 残存。
2	No. 15	灰釉陶器 碗	15.6	8.0	5.2	白色粒	堅緻		外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。底部回転糸切り。施釉。 内面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。施釉。	完存。
3	No. 10	須恵器 高台付埦	14.1	7.1	5.8	白色粒	良好	にぶい黄橙	外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ。底部回転糸切り。ミガキ。黒色処理。 内面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。	内面に法輪状のミガキ。 ほぼ完存。
4	No. 11	須恵器 高台付埦	14.4	8.6	5.8	白色粒	良好		外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ。底部回転糸切り。ミガキ。黒色処理。 内面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。	内面に法輪状のミガキ。 ほぼ完存。

H – 23

	-0									
No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	No. 8	緑釉陶器 碗	-	(5.8)	(2.1)	精良	堅緻	オリープ灰	外面ロクロナデ。施釉。 内面ロクロナデ。施釉。	底部片。
2	No. 15	須恵器 埦	[11.8]	(7.6)	2.7	白色粒、雲母	良好	(发典位)	外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。底部回転糸切り。 内面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。	酸化焰、1/3 残存。
3	覆土	須恵器 坏	14.8	7.0	4.4	黒·赤色粒	良好	にぶい黄橙	外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ。底部回転糸切り。 内面ロクロナデ成形。	酸化焰。1/2 残存。
No	出土位置	種別、器種	長さ	幅	厚さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
4	No. 1	瓦 平瓦	(7.1)	(11.3)	2.2	石英、長石	堅緻	褐灰	凹面布目痕、端部ヘラケズリ。ヘラ描あり。 凸面ナデ。	端部片。広・狭端不明。
5	No.9 · 10 · 14	瓦 平瓦								

H-25

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	も高	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	No. 1	灰釉陶器 碗	14.0	7.0	4.7	精良	堅緻		外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。底部回転糸切り。施袖。 内面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。施軸。	1/3 残存。
2	No. 2	灰釉陶器 皿	(15.0)	7.1	3.2	精良	堅緻		外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。底部回転糸切り。施釉。 内面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。施釉。	1/2 残存。
3	No. 4	須恵器 坏	12.2	5.7	2.3	黒色粒	良好		外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。底部回転糸切り。 内面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形、磨滅により不鮮明。	酸化焔。ほぼ完存。

H-26

	20													
No	出土位置	種別、器種	直往	圣	縁高	重量			残存状況・備考					
1	H - 3 No 1	銅鏡 八稜鏡	95.38 r	nm	5.54 m m	140.7		緑断面は三角形。内区は瑞花・双鳥(鳳)文、外区は点文か。界圏は段圏。 全面に緑青。		完存。				
No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考				
2	No. 1	灰釉陶器 碗	16.2	7.4	6.6	白色粒	堅緻	灰白	外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。底部回転糸切り。施釉。 内面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。施釉。	2/3 残存。				
3	No.2 · 3	灰釉陶器 碗	16.0	8.4	6.6	白色粒	堅緻	灰白	外面口緑部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。底部回転糸切り。施釉。 内面口緑部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。施釉。	1/2 残存。				

H-27

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	覆土	須恵器 蓋	17.8	_	(3.1)	石英、長石	良好		外面口縁部ロクロナデ、天井部回転ヘラケズリ。 内面ロクロナデ。	2/3 残存、摘み欠損。
2	No. 1	須恵器 坏	11.5	_	3.9	石英	良好		外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ。 内面口縁部ヨコナデ、体部ユビナデ。	完存。

H-29

1	No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
	1	覆土	須恵器 坏	9.1	4.9	1.8	白色粒	良好	褐灰	外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。底部回転糸切り。 内面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。	酸化焰。完存。

H-32

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	覆土	須恵器 坏	9.6	4.6	2.1	白色粒	良好		外面口緑部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。底部回転糸切り。 内面口緑部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。	酸化焰。完存。
No	出土位置	出土位置 種別、器種 長さ 幅 厚さ 重量		器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考					
2	No. 1	鉄製品 紡錘車	7.8		3.8	4.1		12.7	円盤面は変形が認められる。 軸は下方が僅かに狭小する円柱状。	円盤部 1/2 欠損。

D-8

No	出土位置	種別、器種	直径	緑高	重量	材質	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	No. 1	銅鏡 五花鏡	85.34 mm	6.46 mm	142.0	青銅	緑断面は三角形。内区は暗花文以外は緑青等により不明。界圏は単圏細線。 他遺物 (鉄鐸、舌が残存する) が付着。	完存。
2	No. 2	銅鏡 素文鏡	104.58 mm	2.98 mm	115.4	青銅	閥線が巡るが内・外区ともに素文。 全面に緑青。	完存。
No	出土位置	種別、器種	長さ	幅	厚さ	重量	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
3	No. 4	鉄製品 鈴	4.7	3.8	0.2	27.5	内部に鉄製の玉が残る。	完存。
4	覆土	鉄製品 鐸	4.3	1.1	0.2	9.8	上部は僅かに狭小になる。舌等は欠損する。	ほぼ完存。
5	覆土	鉄製品 雁又鏃	(14.7)	(3.9)	0.3	33.0	基部四角柱状。全面鲭化。	先端·基部欠損。
6	覆土	鉄製品 雁又鏃	(9.8)	(3.0)	0.3	15.9	歪みあり。基部四角柱状。全面錆化。	先端·基部欠損。

No	出土位置	種別、器種	長さ	ţ.	幅	Ą	厚さ		重量	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
7	覆土	鉄製品 雁又鏃	(12.1	.)	(5.6)		0.4 29.36		29.36	基部四角柱から円柱状。	先端·基部欠損。
8	覆土	鉄製品 雁又鏃	(11.2	2)	(3.6)		0.6	23.0		基部円柱状。	先端・基部欠損。
9	覆土	銅滓	4.8		3.0		1.9 17.3		17.3	全体的にガラス質化が顕著。	破片。
10	覆土	銅滓	5.0		2.6		2.1		21.8	全体的にガラス質化が顕著。	破片。
No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	为	尭成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
11	覆土	須恵器 高台付埦	-	_	2.1	白色粒		良好	褐灰	外面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。底部回転糸切り。 内面口縁部ヨコナデ、以下ロクロナデ成形。	底部片、高台欠損。

Ⅵ まとめ

今回の発掘調査では、1 区で住居跡 8 軒・溝跡 1 条・井戸跡 2 基・土坑 19 基・ピット 27 基、2 区で住居跡 37 軒・ 溝跡 5 条(1 条は蒼海城の堀跡)・竪穴状遺構 1 基・井戸跡 1 基・土坑 19 基・ピット 27 基を検出した。

1区

1区では6世紀後半から7世紀前半頃にかけての住居跡が4軒検出された。確実に規模が判明したのは1辺5 mを超えるH-2号住居跡のみであるが、他の住居跡も同様の規模を持っていたものと想定される。H-2号住居跡では北東柱穴(P1)上に土師器長胴甕を2個並べた後に他の遺物を遺棄した状況が見られ、対角の住居隅では大型の土師器壺が出土している。また、北壁に沿って多量の焼土隗・炭化物が検出され、検出状況から火災住居というよりは意図的に燃やしたと考えられ、遺物の出土状況とともに住居廃絶に関わる行為と想定される。8・9世紀にかけては空白期間となり10世紀になって集落が再び展開し、10世紀前半から中頃にかけての住居跡を4軒検出した。

2区

2区で検出した遺構は上述の通りであるが、H-26号住居跡から五稜鏡が1面、D-8号土坑から五花鏡1面・素文鏡1面・鉄鈴・鉄鐸・銅滓・雁又鏃と、一般的な遺構では見られない特殊な遺物が多数出土している。

H-26号住居跡で出土した五稜鏡は瑞花双鳥(鳳)文で、鈕座縁辺には連珠文が巡る。住居南壁近くの床面直上から、鏡背面を上にして出土した。鏡面には僅かに炭化した繊維が付着しており、鏡を包んでいた布痕の可能性が考えられる。同住居跡からの一括遺物として、灰釉陶器碗があり10世紀後半から11世紀初頭にかけての住居跡と考えられる。D-8号土坑からは鉄鐸・銅滓・4本の雁又鏃の他、覆土中層から五花鏡と素文鏡が重なった状態で出土した。五花鏡は鉄鐸が1点、錆により付着している。内区に瑞花文が見られる以外は、鉄鐸と緑青により不明である。素文鏡は円形で圏線が巡るのみである。2面の鏡の下、覆土下層から鉄鈴が1点と酸化焔焼成による須恵器高台付埦が1点出土している。断面観察から自然に埋まったとは考えられず、意図的な埋納行為の様子が窺われる。出土遺物と重複する他遺構との関連から10世紀後半から11世紀初頭にかけての遺構と想定される。また、H-22号住居からは内面に法輪状の暗文(意匠的に錫杖を放射状に配置したものか)が施された須恵器高台付埦が2点出土している。これらの遺物が出土した遺構は調査区内でも重複の著しい箇所であり、特にD-8号土坑周辺では10軒近くが10世紀中頃から11世紀初頭にかけて短期間のうちに建て替えられた様子が窺え、出土した遺物と相俟って、特異な様相が見て取れる。最終的にはH-1号住居跡で見られたAs-B 軽石により埋没し、中世になるまで遺構は確認されなかった。

2区で出土した特徴的な遺物について概観したが、本遺跡周辺でも八稜鏡の出土が確認されている(鳥羽遺跡、元総社寺田遺跡、天神Ⅲ遺跡等)。元総社寺田遺跡 I で坂井隆氏が県内の八稜鏡の分布について検討されており、本遺跡は国府・総社地域となる。また、東山道沿いの遺跡での出土が多いとの指摘もあり(前橋市2008)、本遺跡は東山道沿いの遺跡とも言え、今後の資料増加が期待される地域である。



1区 H-1号住居跡全景(北から)



1区 H-2号住居跡全景(西から)



1区 H-2号住居跡遺物出土状況(北西から)



1区 H-2号住居跡遺物出土状況(西から)



1区 H-2号住居跡遺物出土状況(北から)



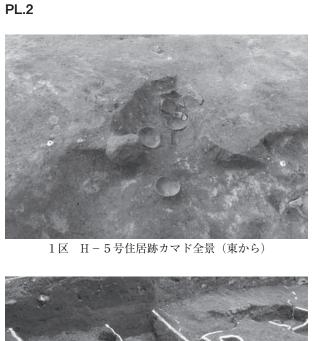
1区 H-3号住居跡全景(東から)



1区 H-4~6号住居跡全景(西から)



1区 H-4号住居跡カマド全景(西から)







1区 H-8号住居跡、W-1号溝跡全景(南西から)



1区 I-1号井戸跡全景(南から)



1区 基本層序A (東から)



1区 基本層序B (東から)



1区 基本層序 (南から)



1区 基本層序D (東から)



2区 調査区全景 (上が北)



2区 H-1号住居跡全景(南から)



2区 H-1号住居跡覆土堆積状況(南西から)



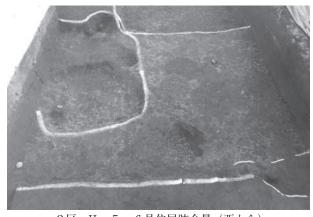
2区 H-2号住居跡全景(北から)



2区 H-3号住居跡全景(西から)



2区 H-4号住居跡全景(西から)



2区 H-5・6号住居跡全景(西から)



2区 H-7号住居跡全景(西から)



2区 H-7号住居跡カマド全景(北西から)



2区 H-8号住居跡、P-1号ピット全景(西から)



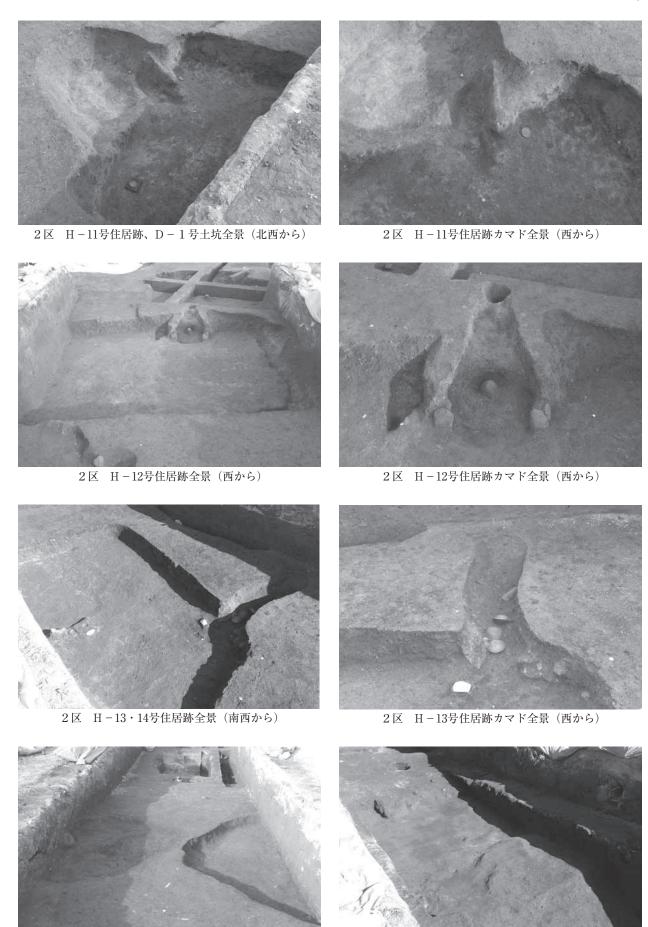
2区 H-9号住居跡全景(西から)



2区 H-10号住居跡全景(西から)



2区 H-10号住居跡カマド全景(西から)



2区 H-15・16号住居跡全景(南から) 2区 H-17号住居跡(南西から)



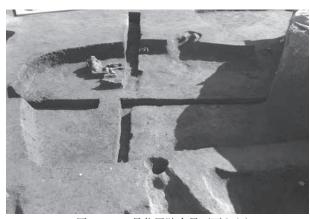
2区 H-18~21号住居跡、W-2号溝跡全景(南西から)



2区 H-22号住居跡、T-1号竪穴状遺構全景(南から)



2区 H-22号住居跡遺物出土状況(北西から)



2区 H-23号住居跡全景(西から)



2区 H-23号住居跡獣骨検出状況(南から)



2区 H-24号住居跡、W-3号溝跡全景(南から)



2区 H-25号住居跡全景(東から)



2区 H-25号住居跡カマド全景 (東から)



2区 H-26号住居跡全景(西から)



2区 H-26号住居跡遺物出土状況 (西から)



2区 H-27号住居跡全景(西から)



2区 H-27号住居跡カマド全景 (西から)



2区 H-28・29号住居跡、D-5号土坑全景(西から)



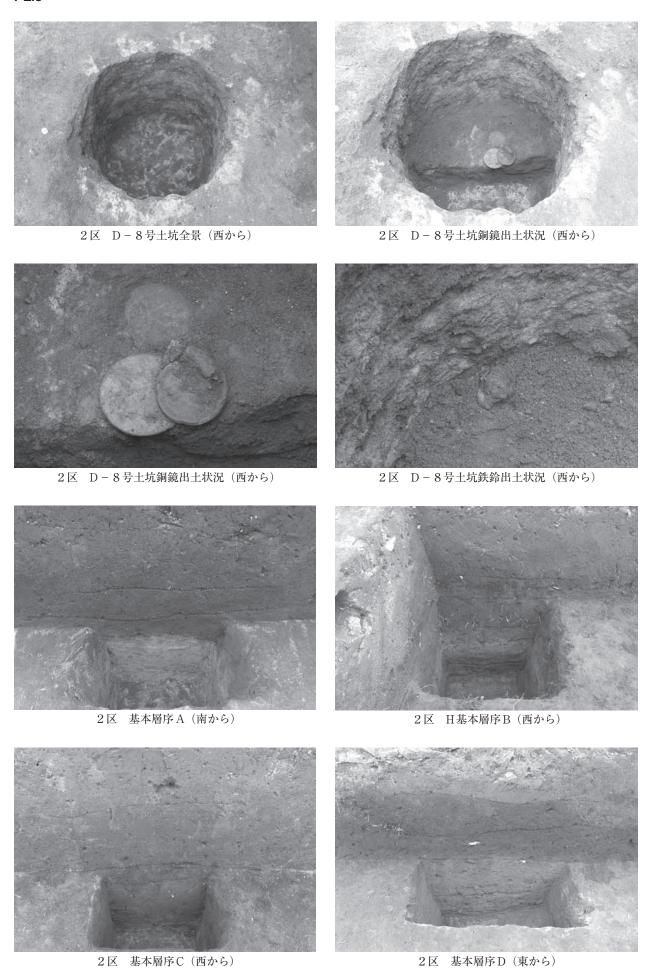
2区 H-28号住居跡全景(西から)

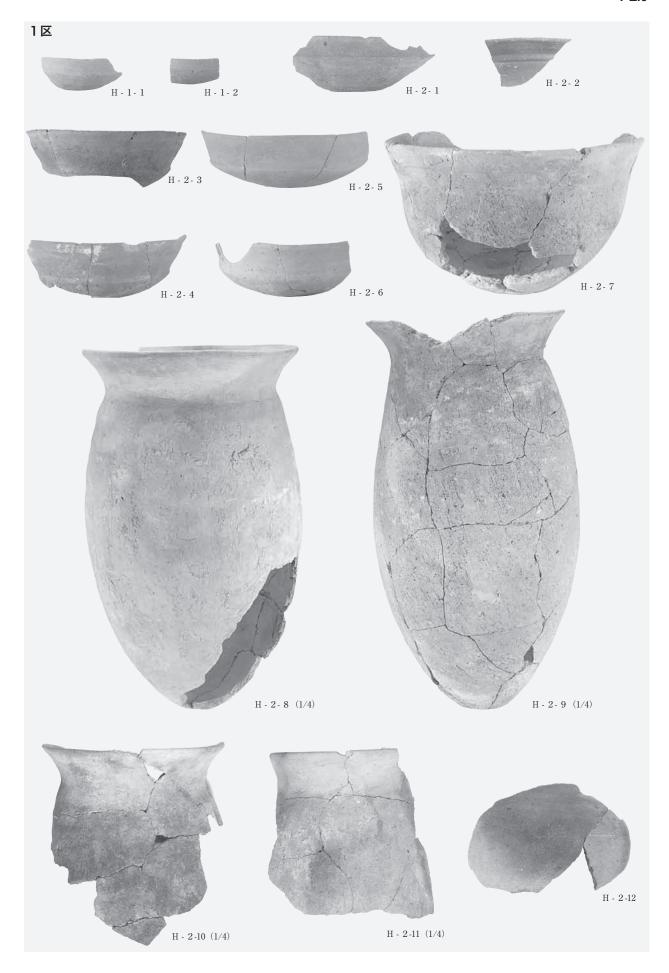


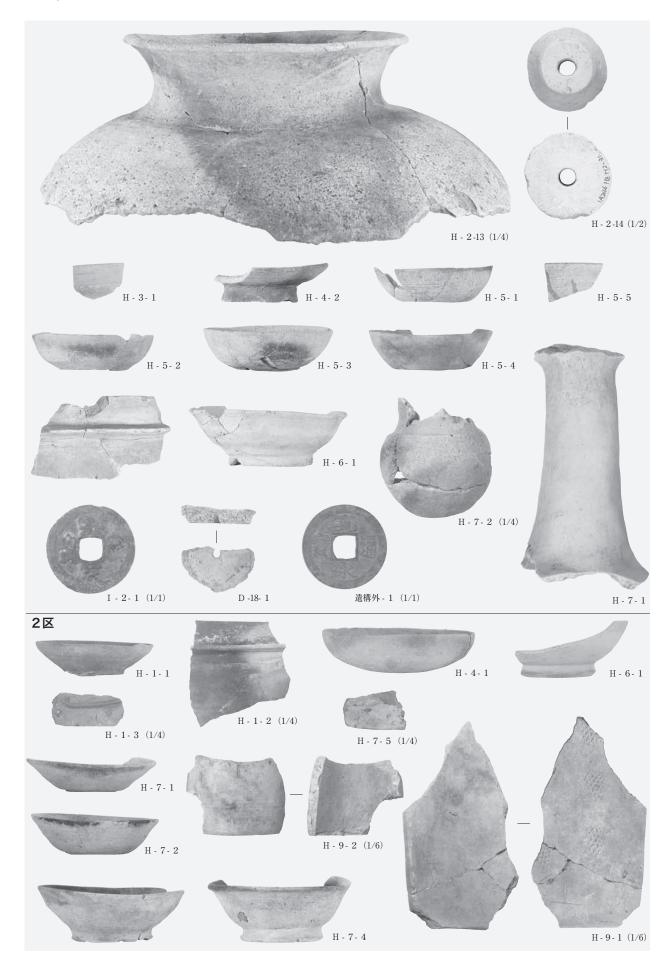
2区 H-30~37号住居跡全景(南西から)

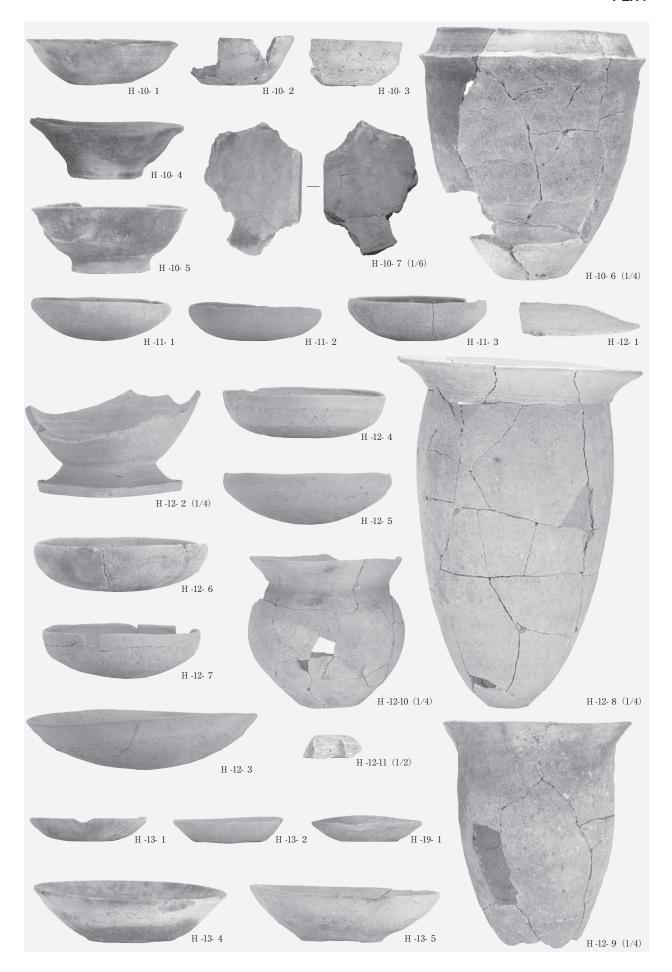


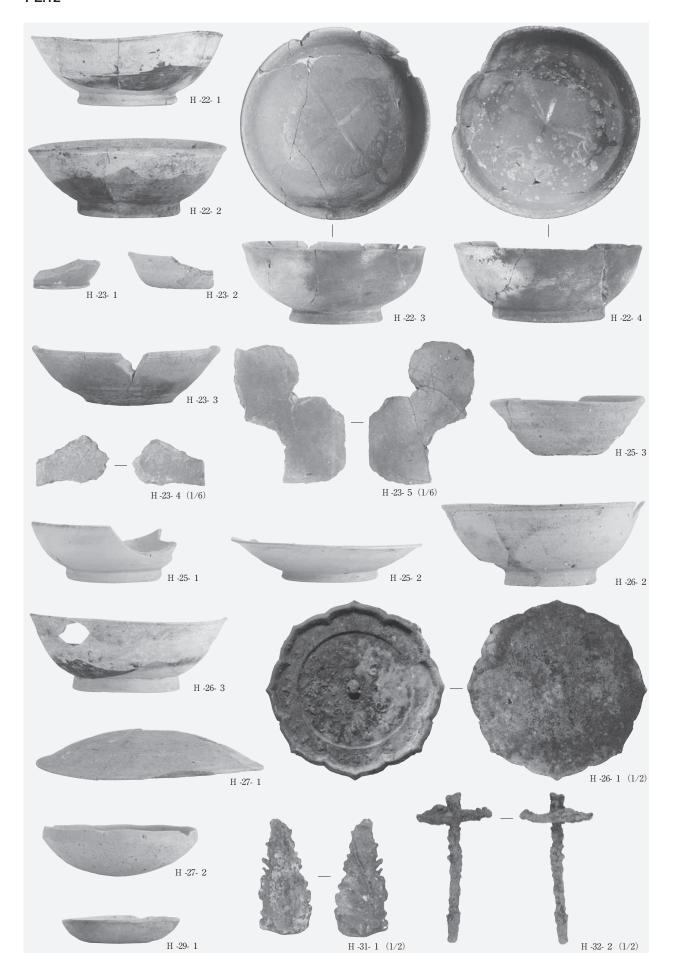
2区 W-1号溝跡全景(南西から)

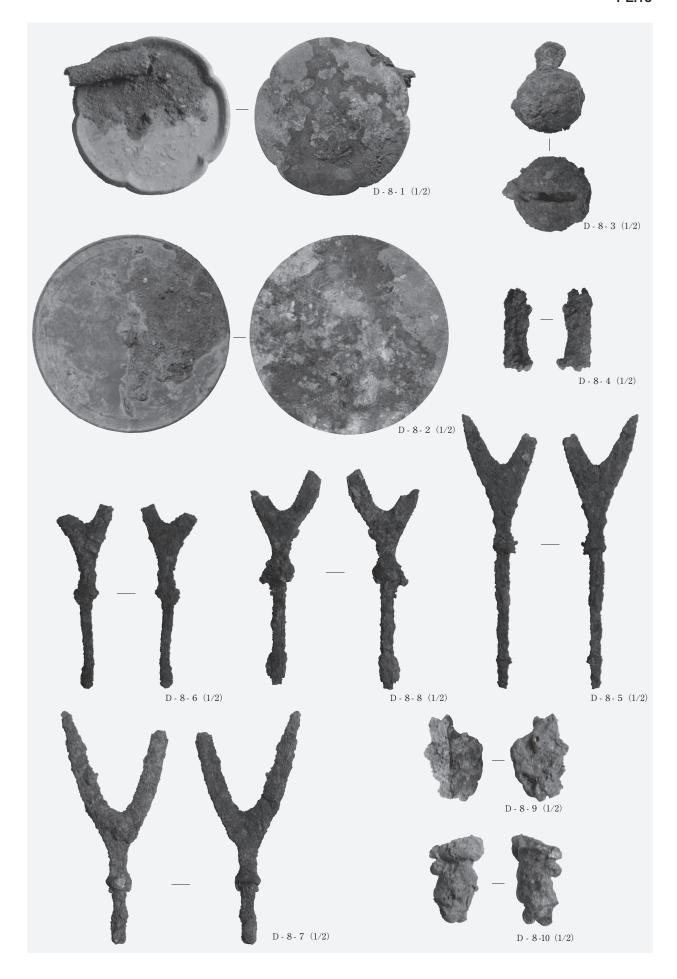












報告書抄録

フ リ ガ ナ	モトソウジャオウミイセキグン(137)
書名	元総社蒼海遺跡群(137)
副書名	前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	-
シリーズ名	-
シリーズ番号	
編著者名	山田誠司・茂木佑輔
編集機関	技研コンサル株式会社
編集機関所在地	〒371-0031 群馬県前橋市下小出町1丁目15番地3
発 行 機 関	前橋市教育委員会
発行機関所在地	〒371-0853 群馬県前橋市総社町3丁目11番地4
発行年月日	2020年 3 月27日

フ リ ガ ナ	フ リ ガ ナ		- ド	位	置	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	神里别則	神旦即惧	神旦尽口
モトソウジャオウミイセキグン 元総社蒼海遺跡群	マエバシシモトソウジャマチ前橋市元総社町	102021	1 A 246	1 区 36°23'33	139°2'2	20191205	1 ⊠ 605㎡	前橋都市計画事業一元総社養海土地区
(137)	1986ほか	102021	111210	2 🗵 36°23'24	139°1'48	20200213	2 ⊠ 854m²	画整理事業

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺	構	主な遺物	特記事項
元総社蒼海遺跡群	集落	古墳時代 奈良・平安時代 中・近世	土坑	8軒 1条 2基 19基 27基	須恵器 土師器 陶磁器 石製品	・6世紀末~10世紀にわたる住居跡。
(137)	全区 集落 城館跡	奈良·平安時代 中·近世	溝跡 竪穴状遺構 井戸跡 土坑	37軒 5条 1 基 1 基 19基 27基	須恵器 土師器 銅製品 鉄製品	・7世紀末~11世紀にわたる 住居跡。・3面の銅鏡(八稜鏡、五花鏡、 素文鏡)。・蒼海城の堀跡。

元 総 社 蒼 海 遺 跡 群 (137)

2020年3月10日 印刷 2020年3月27日 発行

発行 前橋市教育委員会文化財保護課

〒371-0853 群馬県前橋市総社町3丁目11番地4

TEL 027-280-6511

編集 技研コンサル株式会社 印刷 朝日印刷工業株式会社